愛知県東海市

松崎貝塚第2次発掘調査報告書

付載 塚森遺跡

1984

東海市教育委員会

序　　言

知多半島は、平城宮跡出土木簡にも記されておりますように、古くから塩を生産したところであります。

松崎貝塚（大田町）は、古代の製塩遺跡でありまして、ここでつくられた塩もまた調として都へ送られたことと思われます。

本書は、昭和51年夏・冬の２度にわかれて行われました発掘調査のうち、冬の調査の報告書であります。製塩土器をはじめ多量の出土遺物の整理と、人骨・石材・鉄塊等の鑑定を行い、ようやく本書を発刊するはこびとなりました。さきに刊行いたしました「松崎貝塚」と併せて、本書が今後の研究の一助となりますことを願ってやみません。

調査にあたり御尽力いただきました調査関係者並びに地元関係各位、さらに本書の刊行のため御助力を賜わりました関係各位に厚くお礼申し上げます。

なお、本書には、塚森遺跡（名和町）の発掘調査報告を付載いたしました。

昭和59年７月

東海市教育委員会
教育長　築　波　善　夫

例　　言

1　本書は、昭和51年12年26日から31日までの間に東海市教育委員会が発掘調査を実施した、愛知県東海市大田町松崎に所在する松崎貝塚（土器製塩遺跡）の第２次発掘調査報告書である。

併せて、昭和56年８月27日から11月７日の間に実働25日を要した東海市名和町塚森に所在する塚森遺跡の調査報告を収録した。

2　本調査は、東海市教育委員会が主体者となり、学術担当者として日本考古学協会員の杉崎章（主任）、磯部幸男、宮川芳照、山下勝年があたった。

3　発掘調査の参加者については、第２章に記したとおりである。

4　松崎貝塚から出土した人骨については、京都大学霊長類研究所の江原昭善教授の研究室へとどけ、その鑑定結果を報告していただいた。

5　松崎貝塚から出土した鉄塊については、新日本製鐵株式会社名古屋製鐵所に分析を依頼し、中央研究本部名古屋技術研究部から分析結果をいただいた。

6　本書の編集及び図面の整理、製図遺物実測等は、杉崎章が監修し、立松彰が行った。執筆は、第７章を杉崎が、そのほかを立松が担当し、全体の校閲を杉崎が行った。

7　石材の同定は、伊藤新氏（阿久比町立南部小学校長）にお願いし、肉眼観察に依った。

8　写真図版中に付された番号は、実測図版の番号と一致する。

9　図版１の松崎貝塚周辺の製塩遺跡地形図は、建設省国土地理院発行の５万分の１地形図「名古屋南部」・「半田」の一部を複製したものである。

10　本書に関する資料は、すべて東海市立郷土資料館（〒476　東海市荒尾町蜂ケ尻67番地）に保管されている。

目　　次

第１章　遺跡の位置と周辺の製塩遺跡 …… 1
第２章　調査の経過 …… 2
第３章　遺構 …… 4
第４章　遺物 …… 11
　第１節　人工遺物 …… 11
　　1　土器類 …… 11
　　(1)　土師器・須恵器・灰釉陶器 …… 11
　　(2)　緑釉陶器 …… 14
　　(3)　瓷器系中世陶器（行基焼） …… 14
　　(4)　製塩土器 …… 14
　　(5)　土錘 …… 16
　　2　鉄器および骨角器等 …… 16
　　3　石器類 …… 19
　　4　貨幣 …… 19
　第２節　自然遺物 …… 20
　　1　貝類 …… 20
　　2　獣骨類 …… 20
　　3　人骨出土状況 …… 20
第５章　松崎貝塚出土の人骨について …… 37
第６章　松崎貝塚出土鉄塊分析結果 …… 39
第７章　松崎貝塚の調査を終えて …… 41

付載　塚森遺跡

　Ⅰ　はじめに …… 47
　Ⅱ　遺跡 …… 47
　Ⅲ　遺物 …… 48
　　1　人工遺物 …… 48
　　2　自然遺物 …… 57

挿　図　目　次

挿図1　Ⅵ－1遺構実測図 …… 4
挿図2　Ⅶ－1遺構および出土遺物実測図 …… 5
挿図3　Ⅶ－2遺構実測図 …… 7
挿図4　Ⅶ－3遺構および出土遺物実測図 …… 8
挿図5　Ⅵ－1およびⅦ－2遺構出土遺物実測図 …… 10
挿図6　製塩土器拓影 …… 14
挿図7　永楽通宝拓影 …… 19
挿図8　松崎貝塚Ⅵ区北貝層出土鉄塊およびEDAX特性X線チャート …… 40
挿図9　知多式製塩土器の変遷 …… 42
挿図10　渥美町青山貝塚 …… 43
挿図11　塚森遺跡土層模式図 …… 47
挿図12　塚森遺跡縄文土器拓影および土偶 …… 48
挿図13　塚森遺跡須恵器の文字 …… 54
挿図14　塚森遺跡B地点（北壁）土層図 …… 58

表　目　次

表1　松崎貝塚周辺の製塩遺跡 …… 1
表2　松崎貝塚各遺構規模等一覧 …… 9
表3　松崎貝塚土錘一覧 …… 17
表4　松崎貝塚鉄器・骨角器一覧 …… 18
表5　松崎貝塚石器一覧 …… 19
表6　松崎貝塚Ⅵ区北および南貝層の貝類組成 …… 20
表7　松崎貝塚土器類一覧 …… 21
表8　松崎貝塚鉄塊の化学組成 …… 39
表9　塚森遺跡B地点破砕貝層の貝類組成 …… 59

図　版　目　次

図版１　松崎貝塚周辺の製塩遺跡
図版２　松崎貝塚調査区域図
図版３　松崎貝塚発掘調査区および遺構配置図
図版４　松崎貝塚発掘区土層断面図
図版５　松崎貝塚11層出土遺物実測図１
図版６　松崎貝塚11層出土遺物実測図２
図版７　松崎貝塚Ⅵ区北貝層出土遺物実測図
図版８　松崎貝塚Ⅵ区南貝層出土遺物およびⅥ区６層出土製塩土器実測図
図版９　松崎貝塚Ⅴ区４層およびⅥ区６層出土遺物実測図
図版10　松崎貝塚Ⅶ区10層出土遺物実測図１
図版11　松崎貝塚Ⅶ区10層出土遺物実測図２
図版12　松崎貝塚10層出土および各所採集品実測図
図版13　松崎貝塚Ⅵ区９層出土遺物実測図
図版14　松崎貝塚Ⅶ区８層出土遺物実測図
図版15　松崎貝塚３層出土遺物および石器類実測図
図版16　松崎貝塚２層出土遺物実測図
図版17　松崎貝塚出土鉄器・骨角器実測図
図版18　塚森遺跡地形図
図版19　塚森遺跡出土弥生土器実測図
図版20　塚森遺跡出土弥生土器・土師器実測図
図版21　塚森遺跡出土土師器・土錘・石器実測図
図版22　塚森遺跡出土弥生土器・土師器・瓦拓影および釣針実測図
図版23　塚森遺跡出土須恵器実測図
図版24　塚森遺跡出土須恵器・灰釉陶器等実測図
図版25　塚森遺跡出土製塩土器実測図および拓影
（写真図版）
図版26　松崎貝塚現況・Ⅶ区北壁土層状況
図版27　松崎貝塚Ⅵ区南壁土層状況・Ⅵ－１遺構断面
図版28　松崎貝塚Ⅶ－２遺構

図版29　松崎貝塚鞴の口と鉄塊および遺物出土状態

図版30　松崎貝塚出土土師器および貨幣

図版31　松崎貝塚出土須恵器（高坏等）

図版32　松崎貝塚出土須恵器（蓋坏）

図版33　松崎貝塚出土須恵器（蓋・坏）

図版34　松崎貝塚出土須恵器（盤等）・灰釉陶器等

図版35　松崎貝塚出土製塩土器各類

図版36　松崎貝塚出土製塩土器各類台脚

図版37　松崎貝塚出土人骨下顎骨・石器

図版38　松崎貝塚出土鉄器および骨角器

図版39　松崎貝塚出土貝類・獣骨類

図版40　塚森遺跡出土縄文土器・土偶・釣針

図版41　塚森遺跡出土獣骨類・弥生土器

図版42　塚森遺跡出土須恵器・灰釉陶器

図版43　塚森遺跡出土製塩土器（塚森式）

図版44　塚森遺跡出土石器・貝類

第1章　遺跡の位置と周辺の製塩遺跡

松崎（まつざき）貝塚は、愛知県（尾張国）東海市大田町松崎に所在する。この地域は、知多半島基部の伊勢湾に面する西海岸にあたり、半島内でも有数の面積をもつ海岸平地が広がっている。この海岸平地には、海岸線に沿って3条の砂堆列が横たわっており、内陸の海蝕崖寄りから海岸へ向って第1、第2および第3砂堆と分類することができる。本貝塚は、このうちの最も海岸寄りの第3砂堆列北端に立地する。

これらの砂堆列上には、縄文時代後期以後の遺跡が点在している。なかでも弥生時代の遺跡にみるべきものが多い。

製塩遺跡についてみてみると、この海岸平地に限ってみても、第3砂堆上に細別して10箇所の地点（表1参照）が知られている。これらの遺跡の多くは遺物散布地であり詳細の不明なものが多いものの、知多半島製塩土器4類を出土する遺跡が大半を占め、その出土量も多く、この時期に最も広範囲に土器製塩が行われたことを示している。

表1　松崎貝塚周辺の製塩遺跡（番号は図版1の遺跡番号と一致する。）

番号	遺跡名	所在地	出土製塩土器型式	引用文献
1	一番畑遺跡	愛知県東海市名和町一番畑	知多4類	早川ほか1978
2	長光寺遺跡	〃　〃　〃　榎戸	〃	
3	塚森遺跡	〃　〃　〃　塚森	塚森式、知多3・4類	
4	松崎貝塚	〃　〃　大田町松崎	知多1～5類、渥美類似式	杉崎1956、杉崎ほか1971・1977
5	下浜田遺跡	〃　〃　〃　下浜田	知多1～4類	杉崎1956
6	御亭遺跡	〃　〃　高横須賀町御亭	知多4類	
7	宮西遺跡	〃　〃　横須賀町四ノ割	〃	
8	大門遺跡	〃　〃　〃　二ノ割	〃	
9	漁脇遺跡	〃　〃　養父町漁脇	〃	
10	浜脇遺跡	〃　〃　〃　浜脇	〃	
11	釈迦御堂遺跡	〃　〃　〃　釈迦御堂	〃	
12	荒井遺跡	〃　知多市八幡字荒井	〃	
13	平井遺跡	〃　〃　〃　字西平井	〃	
14	細見遺跡	〃　〃　〃　字細見	知多1～5類	杉崎ほか1982

第2章　調査の経過

松崎貝塚の立地する地域一帯の愛知用水土地改良区川北第2工区において、土地改良(圃場整備)事業が施工されることになり、昭和51年7月21日から29日までの9日間と8月19日から21日までの3日間の延べ12日間にわたって発掘調査を実施した。この調査の結果、本遺跡は当初予想していたよりも広範囲であることが判明し、調査実施区域外については遺跡全体に土盛りを行い保護を計った。しかし、道路敷設部分については計画変更ができかねることから、再度調査を実施することになった。調査は、調査員の確保できる12月の下旬に実施することになり、12月26日から31日までの実働5日間にわたって行われた。先の夏期の発掘調査に関しては、すでに報告書を「愛知県東海市松崎貝塚発掘調査報告」(昭和52年3月)として刊行した。本書は、冬期の調査に関する報告であり、これを第2次とする。

調査にあたっては、道路部分とそれによって削平される区域に任意に3個所の調査区を設定した。これらの調査区に、夏期の調査区呼称記号を踏襲してそれぞれⅤ～Ⅶ区とした。調査区の表土面には遺物が認められず、数個所の試掘調査によって確認した遺物包含層上面まで重機によって排土作業を行った。この深さは約50cmである。その後、主に砂の色調変化を目安とする層位発掘を実施した。

Ⅴ区は遺物の出土が少なく、土層断面の調査を重点に行うこととし、当初の調査区域の南側部分の幅2mのみを掘り下げた。遺物の出土が多いⅥ、Ⅶ区は全域を掘り下げた。Ⅵ区は約50cm掘り下げた面で貝層を2個所検出した。それぞれ位置する場所によって北と南貝層とした。これらの貝層を掘り下げた面で遺構を検出した。この面を基盤の生活面とし、その広がりを追求した。その結果、Ⅴ区は海岸寄りのⅥ区よりも低くなっていることがわかった。最も低いところで、Ⅵ区の遺構検出面より約1.8m下がっている。Ⅴ区東寄りのこの低くなった地点から須恵器無台坏身の完器などが出土したが、遺構は認められなかった。Ⅶ区も約1m掘り下げた面でⅥ区と同様の遺構を検出した。この方面もⅥ区より約0.7m低くなってきている。検出した遺構は、粘土分の混じるいわゆる山砂といわれる土によって構築されていた。形態はすべて小丘状に盛り上がったものであった。遺構はⅥ区で大小4個所、Ⅶ区で5個所を検出した。遺構を裁ち割った結果、Ⅵ区のものは1個所を除き、単に山砂が堆積していたのみであった。残る1個所は、中程に焼土が堆積し、その中から泥岩製の支柱状棒と土師器の甕形土器が出土した。Ⅶ区のものは、3個所に焼土が堆積していたが、Ⅵ区でみられた支柱状棒を伴うものはなかった。

遺物の出土状態は、各層とも点在して出土しており、遺構面においても特にまとまりをもって出土するといった状態はみられなかった。時期も同一層において、新旧のものが入り混じっていたが、

おおむね下層のもののまとまりが上層のそれより古いといった傾向を示している。このうち、Ⅵ区のⅡ区と通ずる区域において、炭と灰を混じる黒色の砂層が堆積しており、ここからは知多半島製塩土器第3様式（3類）が多量に出土し、伴出した須恵器等の日常容器の編年から、3類の使用時期を知ることのできる良好な資料を得ることができた。また、海岸寄りの遺跡にしては、良好な状態を保つ紡錘や鉸具などの鉄器類が出土し注目された。

冬期の調査区域は、夏期のⅠ～Ⅳ区の調査区域より若干内陸寄りに位置するのであるが、製塩土器の出土量が比較的少なく、製塩炉も検出されず、1次と2次の調査区域幅約20mの範囲内において土地利用の仕方が異なっていることが感じられた。

冬期の厳寒のなか、降雪にも悩まされた悪条件の調査であったが、調査関係者の献身的な協力を得て終了することができた。後日、踏切工事に伴い線路の西側（図版2●印）から人骨が1体出土した。出土状態は不明で、土器などの遺物も伴わなかった。出土した場所からみて、本遺跡に関係するものとみられる。出土した人骨については、京都大学霊長類研究所江原昭善教授の研究室へ届けられた。

以下、調査関係者名を記しておく。所属は調査当時である。

調 査 参 加 者

杉崎章（学術担当者、知多中学校校長）、磯部幸男（南知多町立師崎中学校教頭）、中山善夫（愛知県立常滑高等学校教諭）、宮川芳照（犬山市立犬山中学校教諭）、山下勝年（武豊町立武豊小学校教諭）、都築暢也、石黒立人、伊藤和彦、稲垣順三、宇佐美幸弘、島津忠英、早川廣好（以上、南山大学）、中野晴久（明治大学）、県立常滑高等学校生徒21名、富木島町・大田町の方々18名。

協　　力　　者

加古重光、片田秀一、浅井啓吉、池田陸介、石川玉紀、石野武、築波崧、堤文二、長谷川昭二、早川信三（以上、東海市文化財調査委員）、神野孝一、井上与造（以上、土地改良区地元役員）。

整 理 参 加 者

石黒立人、島津忠英、友松康二（以上、南山大学）。

事　　務　　局

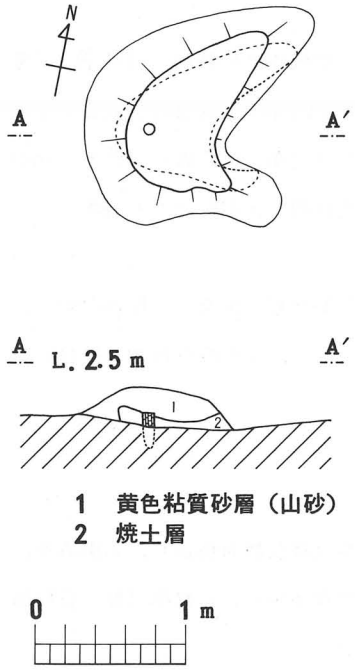
築波善夫（東海市教育長）、伊藤克己（社会教育課長）、石岡隆（社会教育係長）、吉田清孝、大島邦明、荒田敏夫、松木秀一、平川秀規、佐藤えり子（社会教育課主事）、立松彰（郷土資料館主事）。

第3章　遺　　構

松崎貝塚の第2次調査によって明らかにすることのできた遺構は、炉址とみられるものが4基ある。これらは同一の地表面上に点在しており、Ⅵ区に1基、Ⅶ区に3基が構築されている。個々の詳細は後述するとして、全体の概要をみてみる。

黄褐色の粗砂上に、粘土分の混じるいわゆる山砂によって構築されており、小丘状のマウンドをなした状態で検出した。これらを裁ち割ると中ほどに焼土が堆積しており、そこから土師器の甕や甑などが出土した。形態の大きさや伴出する遺物などに画一性は認められない。また、同様な外形をなすもののうち、いくつかのものは単に山砂が堆積しただけのものであった。この山砂は、内陸の丘陵に分布する土であり、製塩土器の胎土によく似た組成をもっており、製塩土器などの素焼きの土器を作るために運ばれた粘土材料であった可能性も考えられる。いずれにせよ、これらの遺構は海岸寄りの砂上に構築されたものであり、風雨波浪の影響を受けて小丘状のマウンドをなすに至ったと考えられるのであるが、構築当初の形態は明確にでき得なかった。

1　Ⅵ－1遺構（挿図1・5、図版27）

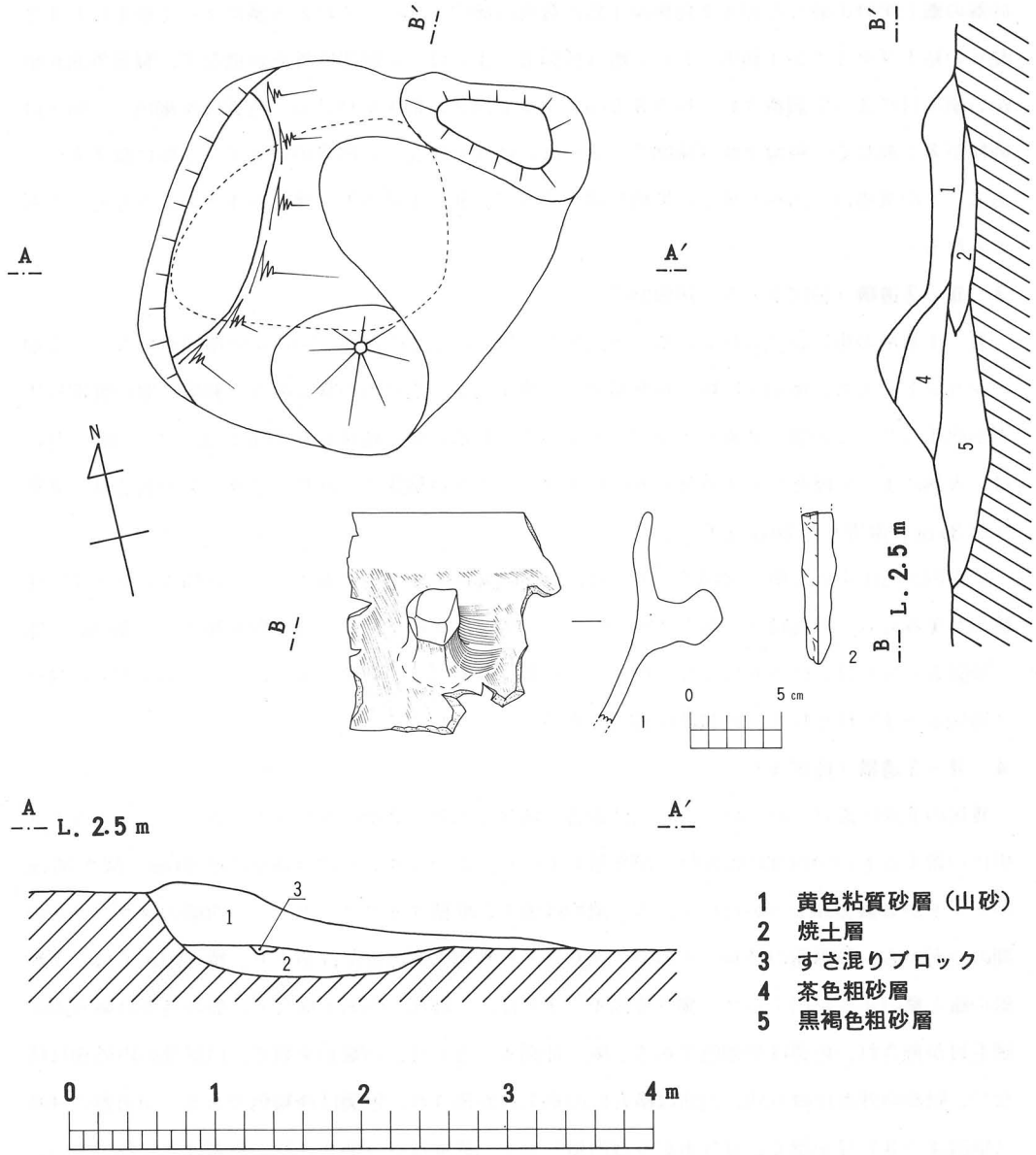


挿図1　Ⅵ－1遺構実測図

Ⅵ区北貝層に近接した・5位置に設けられている。平面プランは弓形に張った形態で、長辺1.5m、短辺1m、高さ30cmを測る。平面プランの凹んだ部分の一部に焼土がみられ、横に裁ち割ってみると、中央に面取りの施された泥岩製の棒（挿図5－1）が立てられており、その下半は砂中に埋め込まれていた。この棒は、鋭利な刃物のような工具によって削り取られており、上面は平坦で、側面は面取りがなされ、下方はやや細まり、先端は丸く仕上げられている。全体の色調は、茶色味をおびた白色で、砂中より上に出る部分の一方の側面（挿図1のA′方向を向く面）は焼けて淡褐色となり、砂中の部分との境目は黒色に変化している。焼土はA′方向からみられ、内部では、先の棒の後方あたりで終っている。焼土の分布状態と棒の焼け具合からみて、火はA′方向からくべられたものとみられる。焼土内の棒の直上あたりを中心にして土師器の甕（挿図5－2・3）が1個体出土した。この土器は、出土状態からみて、棒の上面あたりに立てて置かれていた可能性もある。特徴は、胴部がひじょうに長く、底部は丸底である。外面の調整は、口頸部が横なで、胴

部上半は縦方向の荒い刷毛目、下半は縦方向の細かい刷毛目、底部は雑多な方向からなる細かい刷毛目が施されている。内面は上半が横方向の荒い刷毛目で、下半はヘラ削りである。外面には煤が全体に付着している。色調は薄茶色で、胎土は砂粒を混じる。

この遺構の当初の形態は、焼土の上に山砂が覆いかぶさっていることからみて、火をくべる部分を除いた周囲が高く取り囲まれていたか、ドーム状に天井部が構築されていたものとみられる。用



挿図2　Ⅶ－1遺構および出土遺物実測図

途は、煮炊き用のかまどと考えられる。

2　Ⅶ－1遺構（挿図2）

Ⅶ区内の西側に設けられており、平面プランは径約2.6 mのほぼ円形をなす。外見は西側と北および南側が小丘状に盛り上がり、東側は中央部から低く下がってきており、焼土がみられる。これを裁ち割ってみると、中央の地山上に径1.5 m、厚み20 cmほどの焼土が堆積している。焼土内から土師器の甑上半分の破片と知多半島製塩土器の脚部の破片が1点、それと火熱によって硬化したすさ混りの粘土ブロックが1個出土した。甑（挿図2－1）は、口縁部内外面が横なで、胴部外面が細かい刷毛目によって調整され、長さ3.5 cmのやや上向きの把手を付ける。色調は淡褐色で、胎土は砂粒が多く混じる。製塩土器（挿図2－2）は、にぎりはなしの細身の作りで、3類に属すものである。この遺構は、山砂と焼土の堆積状態からみて、Ⅵ－1遺構と同様なかまどのようなものと考えられる。

3　Ⅶ－2遺構（挿図3・5、図版28）

Ⅶ－1遺構の東に設けられている。平面プランは、長辺2.2 m、短辺1 mの楕円形をなす。2個のマウンドをもち、地山上に焼土が堆積する。焼土内から土師器の甕の破片と製塩土器の脚部片1点が出土した。この他、北寄りのマウンド上から土師器の甕と高坏の破片が出土した。焼土内には、火熱によって硬化したすさ混じりの粘土ブロックが数個認められた。マウンドの高さは、北寄りが35 cm、南寄りが30 cmを測る。

焼土内から出土した甕（挿図5－6）は、外面は細かい刷毛目が施され、ヘラ描きの交差する沈線が2条みられ、内面はヘラ削りされている。色調は淡褐色で、胎土は砂粒を混じる。製塩土器（挿図5－5）は、にぎりはなしの作りで、知多半島製塩土器3類である。マウンド上出土の高坏（挿図5－4）は小片で、色調は淡褐色である。

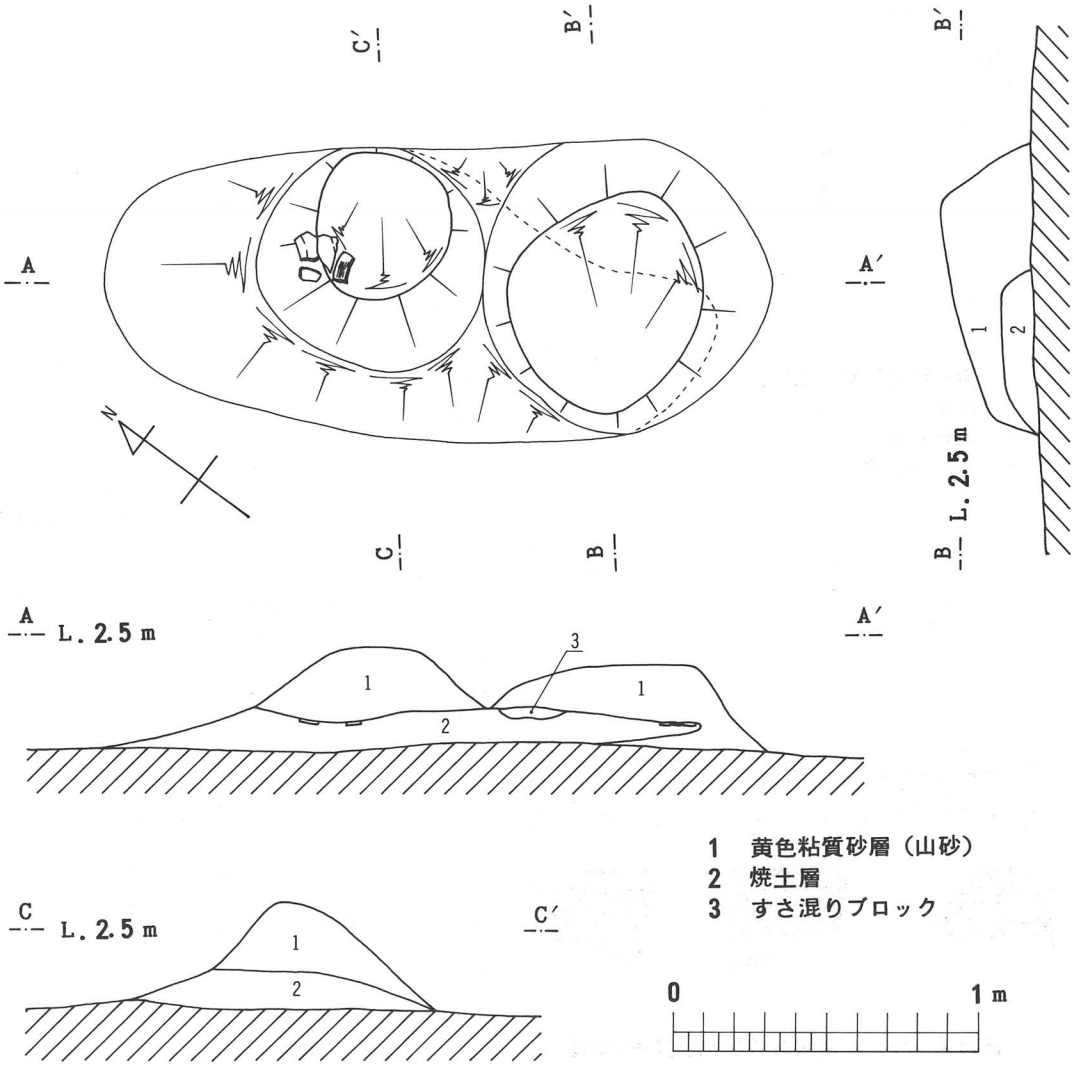
4　Ⅶ－3遺構（挿図4）

Ⅶ区の北東に設けられており、一部は調査区域外にある。3個のマウンドがみられ、このうち北東に位置するものの内部にのみ焼土が堆積している。このマウンドの東寄りに径40 cm、深さ35 cmのピットが2個並んでうがたれている。遺物は焼土の堆積するマウンドとその西側のマウンドとの間の上面から、須恵器の坏身とその中に入り込んだ製塩土器の脚部片があり、焼土内からは、土師器の甑と甕の小片が出土した。甕（挿図4－1）は、口縁部と内面が横なで、頸部外面は縦方向の刷毛目が施され、色調は淡褐色である。甑（挿図4－2）は、口端が平坦で、口縁部の内外面は横なで、胴部の外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目が施され、色調は淡褐色である。須恵器の坏身（挿図4－3）は完器で、立ちあがりは内傾し短く、底面はヘラ削りされ、色調は青灰色である。製塩土器（挿図4－4）は、内底面から先端までの高さ7.7 cm、坏部と接する部分の径1.7 cmを測

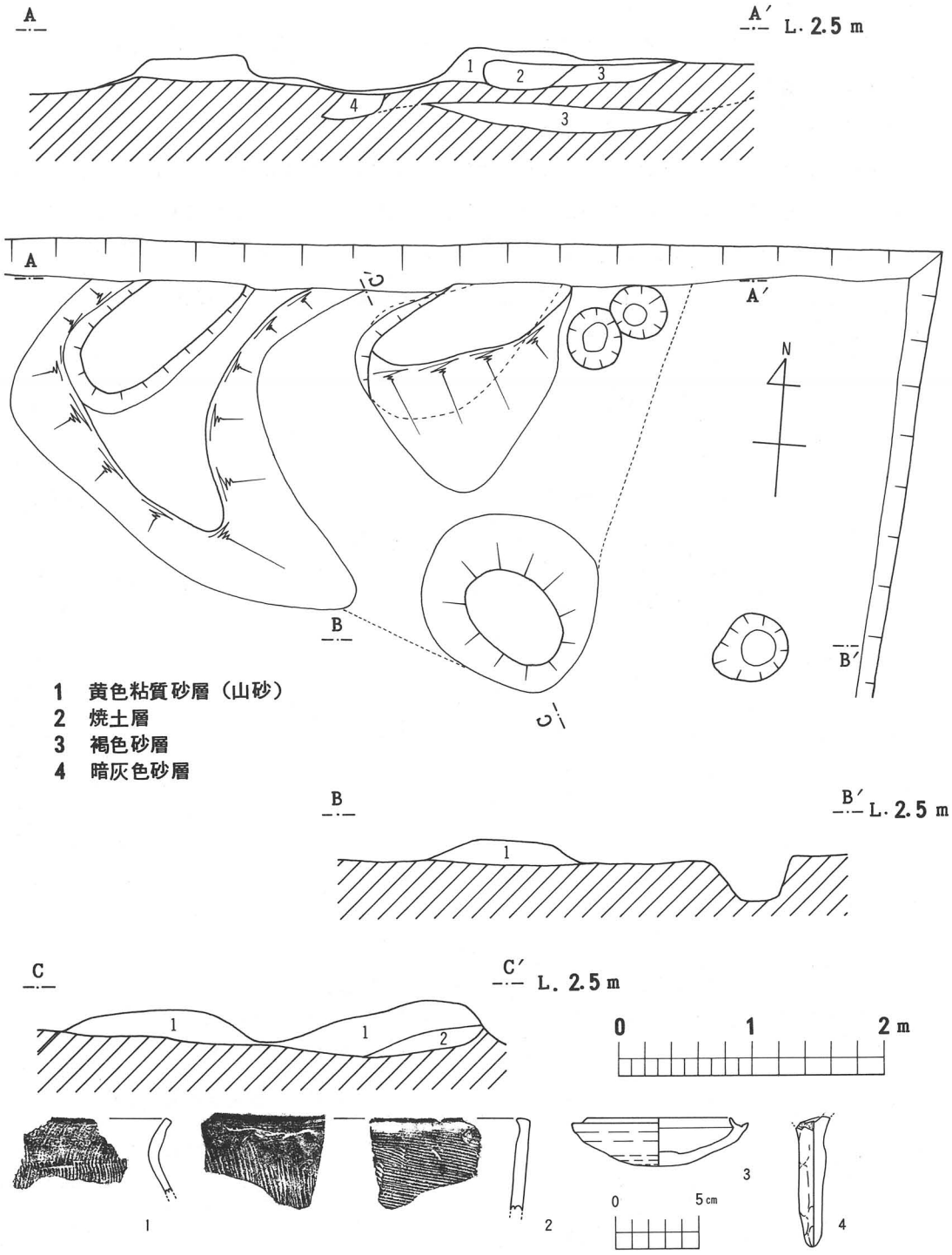
り、にぎりはなしの作りである。やや小型であるが作り方からみて3類に含められるものである。

5　その他の遺構

Ⅶ－3遺構でも触れたが、この遺構内とそれを取り巻くように数個のピットがある。Ⅶ－3遺構でとらえた2個のほか、遺構の東側に1mほど離れて、径60cm、深さ30cmのピットが1個所、この南に1mほど離れて径20cm、深さ15cmのピットが1個所、さらにこれより南西に1mほど離れて長辺1m、短辺60cm、深さ20cmのピットが設けられている。これらのピット内には、他とは異なる黒味をおびた砂が堆積し、土師器の細片が出土したものもある。ピットの性格については、Ⅶ－3遺構の全容をとらえられず明確にでき得ない。



挿図3　Ⅶ－2遺構実測図



挿図 4　Ⅶ－3 遺構および出土遺物実測図

この他、Ⅶ－1遺構の北に炭化物がまとまって分布する地点があり、この近くの地山上から未使用とみられる製塩土器（図版6－37）が出土した。

6 まとめ

前述した各遺構の規模や出土遺物等をまとめて示すと表2のようである。

各遺構に共通する点をあげると、次のようである。

(1) 同一地表面上に構築されており、おそらく同時期のものとみられる。その時期は、Ⅵ－1遺構の土師器甕のほかに求めえる良好なものがないが、後述する各層の遺物のうち、遺構面上に堆積するものから推測して、7世紀の前半に求められる。

(2) 焼土内に、煮炊きに使用する土師器の甕、甑がみられる。

(3) 山砂を使用して構築している。

相違する点をあげると、次のようである。

① 規模、形態が異なる。

② 泥岩製の支柱状棒を伴うものと伴わないものがある。

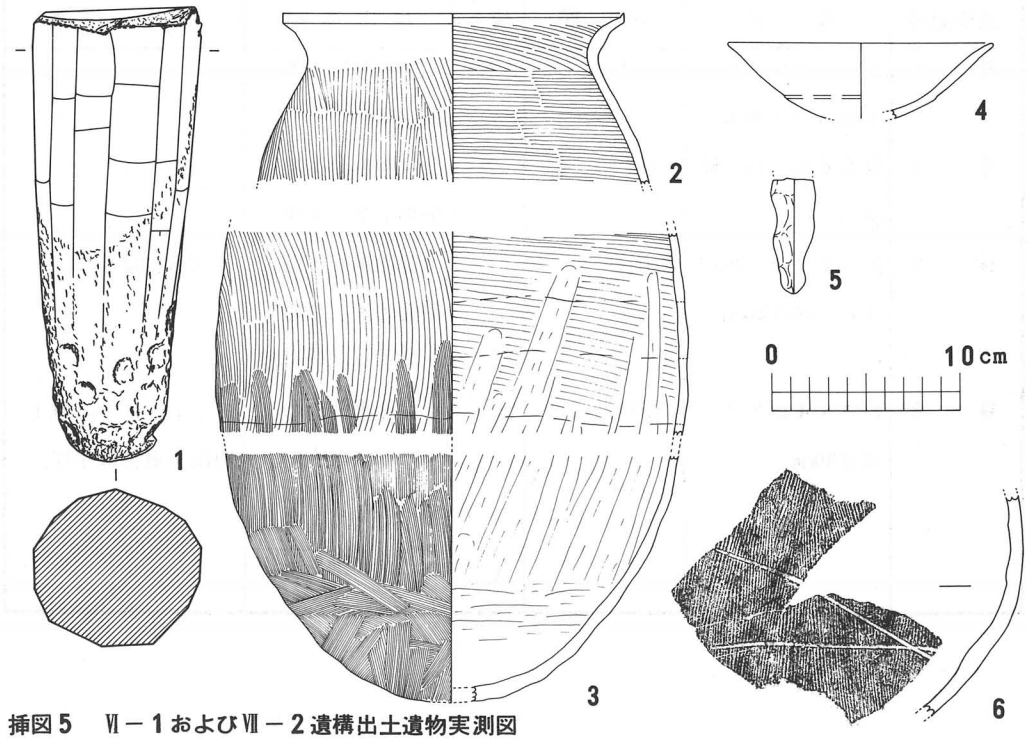
表2 松崎貝塚各遺構規模等一覧

遺構記号	規模	形態	焼土	伴出遺物	備考
Ⅵ－1	長辺1.5m×短辺1m×高さ30cm	C字形	有	土師器甕形土器、泥岩製棒	
Ⅶ－1	径2.6m×高さ65cm	円形	有	土師器甑形土器、製塩土器（3類）	
Ⅶ－2	長辺2.2m×短辺1m×高さ35cm	楕円形	有	土師器甕形土器、製塩土器（3類）土師器高坏形土器	伴出遺物は小片。
Ⅶ－3	長さ4.4m×?×高さ30cm	（隅丸方形）	有	土師器甕形土器、土師器甑形土器、須恵器坏身、製塩土器（3類）	ピットを伴う。焼土内出土遺物は小片。

Ⅵ－1遺構は、泥岩製の棒を伴うのであるが、これと同様の棒をもった遺構はⅡ区においても検出している。Ⅱ区の遺構については、知多半島製塩土器1類を小さくしたような形態をもち「小型製塩土器」と呼称した土器や、製塩土器3類、火熱によって硬化したすさ混じりの粘土ブロックなどが焼土内から出土し、しかも天井部をもっていたとみられることなどから、その用途は立松・宮川とともに杉崎も同定した焼き塩ないし固型塩作成用の炉であろうと推定〔杉崎ほか　1977〕している。このⅡ区の炉址と、Ⅵ－1遺構は伴出遺物の細部が異なるものの、支柱状棒をもつ点において、よく似た様相をもつ遺構である。

他の遺構は、支柱状棒をもたないが、焼土が存在することと、その上部と周囲に土が堆積することからみて、側壁および天井部を構築して、風などの影響を考慮したかまどのような用途を有する炉址と考えられる。そこから土師器の甕や甑が出土することからみて、主に日常の食生活の用に供されたのであろう。これらの炉址も、極くわずかだが製塩土器を伴出しており、前述したⅡ区の炉址の用途や製塩土器の焼成といったような作業が行なわれた可能性も否定できない。後者に関しては、未使用とみられる完器に近い製塩土器が周辺から出土していることからも注目される。

これらの煮沸煎熬（せんごう）用の炉とは異なる炉は、Ⅵ・Ⅶ区およびⅡ区南部にまとまりをもつように構築されている。このことは、この区域が土器製塩作業場の中でも、煎熬作業の場とは異なる区域（たとえば住居）として設定されていたことをうかがわせる。



挿図5　Ⅵ－1およびⅦ－2遺構出土遺物実測図

第4章　遺　　物

今次の調査区域においては、第1次の調査区域に比べて製塩用土器片の出土は少なく、日常容器の土師器・須恵器類が多かった。ただ、製塩土器の出土量は1次に比べて少ないのであって、全出土遺物量に占める割合は大きく、各層にわたって知多半島製塩土器4類を主体にして出土している。

以下、各層ごとに出土遺物を述べるが、層序についてはおおむね上層から下層へと番号を付したが、前後関係の複雑な層もあり明確なものではない。個々の遺物の特徴については、表3～5・7および各実測図版を参照していただきたい。

第1節　人工遺物

1　土器類

(1)　土師器・須恵器・灰釉陶器（表7、図版5～16、30～34）

a　11層（図版5、6）

主にⅥ・Ⅶ区内に堆積する最下層である。須恵器の坏蓋（図版＝以下同じ＝5－1～4）・坏身（5－5～7）・高坏（5－9・10・12・13）・甑（5－18）は東山50号窯式、高坏（5－11）・瓶（5－17）は岩崎17号窯式、鉢（5－25）・坏身（5－26）は高蔵寺2号窯式に比定できよう。土師器は、甕・高坏・甑・壷がある。甕のなかで、口端が突出し断面三角形をなすもの（6－11・13）がある。灰釉陶器は碗の細片が2点認められる。本層は、時代の違う遺物が混在するものの、主体をなす須恵器は7世紀前半の時期である。

b　Ⅵ区北貝層（図版7）

Ⅵ区の北部に位置する貝層でハマグリを主体とする。須恵器の坏蓋（1・2）・高坏（5・6）は東山50号窯式、坏身（3）・高坏（7・8）・坏蓋（9）・甕（12）・鉢（14）は岩崎17号窯式、蓋（10）は岩崎41号窯式、坏身（11）・鉢（15）は鳴海NN－32号窯式に比定できよう。高坏（4）は、本遺跡では古い型式であり、東山11号窯〔斎藤　1983〕に続くものとみられる。土師器は甑と甕があり、甕（20・21）の口端は、11層の甕（6－11・13）の特徴をわずかに残しており、後出するものではないかと考えられる。

本層は、須恵器の遍年からみて7世紀代を主体としている。

c　Ⅵ区南貝層（図版8）

Ⅵ区の南部に位置する貝層で、ニナの類とハマグリを主体とする。須恵器は坏身（1～4）・短頸壷（6・7）は東山50号窯式、坏蓋（5）・高坏（8）・蓋（10）は岩崎17号窯式に比定できよう。土師器は甕・甑などがある。甕（13）は長胴形で、輪積み成形である。口縁部内面と胴部外面は刷毛目、口縁部外面と胴部内面はなで調整されている。口端はわずかではあるが突出する。同じく14は口端が突出し断面三角形をなす。胴部内外面に細かい刷毛目調整が施されている。16は高坏

と考えられる。胎土は砂粒を多く含み、内外面ともなで調整されているが、輪積みの痕跡が残る。

本層は、須恵器の編年からみて7世紀前半から中葉を主体とする。

d　4層（図版9）

主にⅤ区内に堆積する最下層である。須恵器のうち坏蓋は口縁部が高く稜も鋭く古い形態をもっている。東山11号窯と同時期のものと考えられる。坏身（2）は受口部が直立気味で長く、やはり古い形態をもつ。ともに細片である。坏身（3・4）は東山50窯式、坏身（5）は岩崎17号窯式に比定できよう。坏身（6）は底面が手持ちのヘラ削りである。（7）は底面が回転ヘラ削りされているが、中央に糸切り痕が残っている。ともに高蔵寺2号窯式に比定できよう。坏身（8）は糸切り底であり、岩崎25号窯式に、 坏身（9）と坏蓋（10）は鳴海NN－32号窯式あたりに比定できる。土師器は高坏と甕がある。甕（17）は須恵器坏身（7）と伴出した。胎土は砂粒を多く含む。口縁部外面は横なで、内面は刷毛目、胴部外面は刷毛目、内面はヘラ削りの後になで調整されている。

本層は時代の違う遺物が混在しており、下層で須恵器坏身（7）と土師器甕（17）が出土した。

e　6層（図版9）

Ⅵ区の南西角に堆積する黒色の砂層で、知多半島製塩土器3類が多量に出土した。須恵器は坏蓋（22）・坏身（24）が東山50号窯式、坏蓋（23）・坏身（25・26）・高坏（27）が岩崎17号窯式、細頸瓶（29）が岩崎41号窯式に比定できよう。土師器は甕がある。甕（30）は硬質で、口端が突出する。

本層は、須恵器の編年からみて7世紀代のもののみ包含されている。

f　10層（図版10、11、12）

主にⅦ区内に堆積し、前述した11層と同様に地山面を覆っている。須恵器は坏蓋（10－1・2）・坏身（10－5～10）が東山50号窯式に、坏蓋（10－3・4）・坏身（10－11・12）・高坏（10－15～23）・坏蓋（10－32）が岩崎17号窯式に比定できよう。次に、坏蓋（10－35）・坏身（10－40～42・44～46）の鳴海NN－32号 窯式と坏身（10－43・47）に比定できうる一群がある。灰釉陶器は碗（11－22・23）が黒笹14号窯式に、広口瓶（11－6）・盤（11－15）・碗（11－24・26～28）・段皿（11－25）が黒笹90号窯式に、壷（11－30）は折戸53号窯式に比定できよう。土師器は、高坏・甑・甕がある。

本層は時期の違う遺物が混在しており、須恵器等の編年からみて7世紀代、8世紀後半～9世紀前半、10世紀前半の時期を求められるものがまとまりをもち、7世紀前半～11世紀前半にわたる遺物が認められる。

g　9層（図版13）

Ⅵ区において地山面上に堆積する。須恵器は高坏（７・８）が古い器形をもつ。次いで坏蓋（１～３）・坏身（４）・高坏（９）が東山50号窯式に、坏身（５）・高坏（６）が岩崎17号窯式に比定できよう。その他、坏蓋（11・14）・坏身（15・16）・細頸瓶（17）が鳴海NN－32号窯式あたりに比定される。土師器は高坏・甕・甑がある。高坏（19・20）は脚のみではあるが、青山貝塚（芳賀 1959）のＡ地点上層出土品に類似するものとみられる。

本層は、古い器形の土師器が伴うほか、須恵器の編年からみて７世紀前半と８世紀後半を主体とする遺物がみられる。

ｈ　８層（図版14）

主にⅦ区に堆積する。須恵器は高坏（２）・坏身（３）が岩崎17号窯式に比定できよう。　坏蓋（９・10）・坏身（11・12）は折戸10号窯式に含められよう。灰釉陶器の碗（36）は黒笹14号窯式、碗（37・38・47）・皿（39～43）は黒笹90号窯式、碗（45・48・49）は折戸53号窯式に比定できよう。土師器は皿と甕がある。甕は口端内側に段をもつもの（18・19）がある。

本層は時期の違う遺物が混在しており、須恵器等の編年からみて７世紀後半から10世紀後半までのものがある。

ｉ　３層（図版15）

主にⅤ・Ⅶ区に堆積する。須恵器は坏身（１）が岩崎17号窯式、鉢（５）が岩崎41号窯式、鉢（６）・坏身（８）が高蔵寺２号窯式あたりに、坏蓋（４）・甑（10）が鳴海NN－32号窯式あたりに比定できよう。灰釉陶器は碗（11・12）が黒笹90号窯式、碗（13・14）・耳皿（15）が東山72号窯式に比定できよう。土師器は高坏がある。

本層も時期の違う遺物が混在しており、須恵器類の編年からみて７世紀後半から８世紀後半と10世紀前半と11世紀前半のものがある。土師器の高坏は、器形からみて、前の須恵器よりも古い時期のものとみられる。

ｊ　２層（図版16）

主にⅥ・Ⅶ区に堆積する。須恵器は坏蓋（１・10）・坏身（２・３）・高坏（４～６）が岩崎17号窯式に、把手付大型盤（９）は高蔵寺２号窯式あたりに、盤（19・20）は井ケ谷78号窯式に比定できよう。灰釉陶器は碗（27・28）が黒笹90号窯式に、段皿（26）・碗（29）が折戸53窯式に比定できよう。土師器は小壷・甑がある。

本層も時期の違う遺物が混在している。

ｋ　採集品（図版12）

須恵器の坏蓋（15）は、第１次調査Ⅳ区の北東方面で採集した。土師器小坩（16）は、支水溝設置工事に伴い出土した完器である。出土地点は、工事関係者の話によれば、第１次調査Ⅲ区の東約

40 mである。

(2) 緑釉陶器（図版34）

Ⅵ区南貝層の直上から破片が1点出土した。底部の破片で器形を特定しえないが、碗か皿の類である。糸切り底で高台が付く。胎土は均質で、素地の色調はやや黄味がかった白色である。緑釉が高台内側底面にいたるまで全面に施釉されている。

これと接するようにして、須恵器の鉢（図版7－15）が出土している。

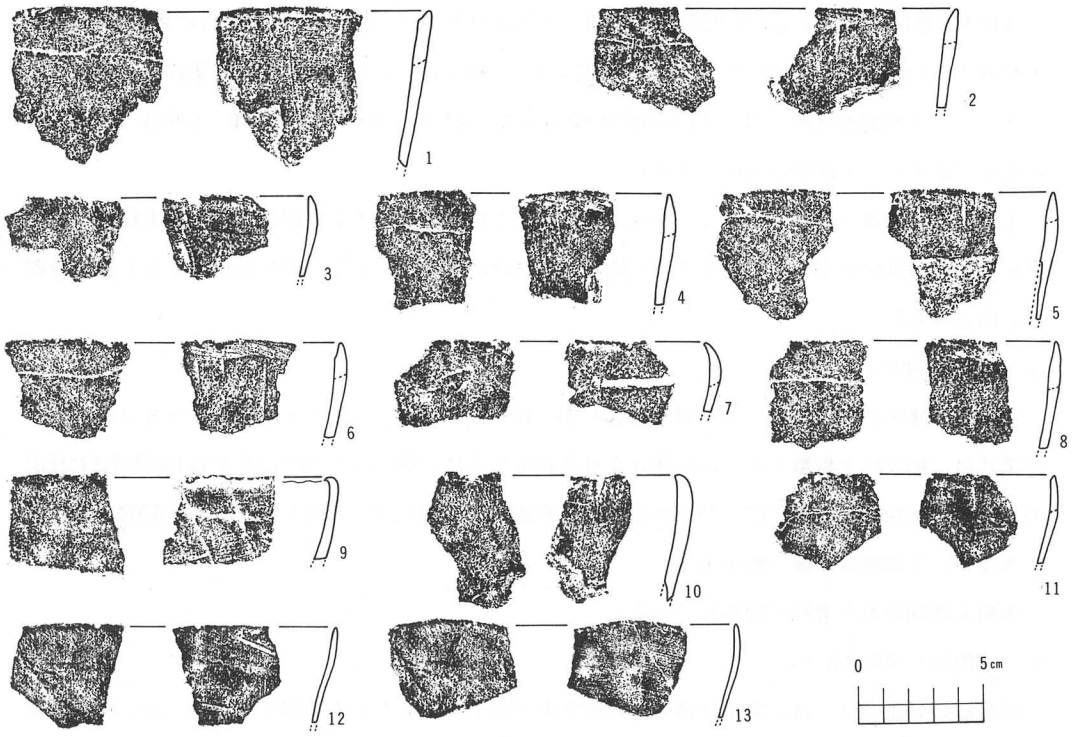
(3) 瓷器系中世陶器（行基焼）（図版11－30、15－16・17）

いわゆる山茶碗・皿とよばれるもので、碗（15－16・17）は、常滑窯編年の第2型式（後期＝13世紀後半）〔杉崎 1981〕に比定できよう。皿（11－30）は碗より新しい時期のものである。

(4) 製塩土器（図版6～9、11～15、35、36）

知多半島製塩土器のうち、脚が中実細身で表面になで調整の施された4類を主体にして、全層から出土している。同一型式の量がまとまりをもったものとしては、Ⅵ区6層における、脚が中実太目でにぎりはなしのままの3類がある。以下、各層ごとにみてみる。

a 11層（挿図6－1～8、図版6－23～37）



挿図6 製塩土器拓影（1～8＝11層出土、9～11＝6層出土、12＝9層出土、13＝Ⅵ区北貝層出土）

遺構の項で述べたように、未使用とみられる3類がⅦ区遺構面から1個体分（37）出土した。脚の先端部を欠くが、残存する台脚部分からみてにぎりはなしのもので、3類の中では細身である。坏部の大きさは、口径13.6cm、深さ11cm、器体の厚み3㎜前後を測る。台脚の坏部と接する部分の径は2.6㎝である。 3類の大多数のもののこの部分の径は平均3.2㎝ ほどを示すことからみて、細身である。坏部の成形は輪積みによってなされ、外面にその痕跡が残る。外面全体に掌や指紋の痕がみられる。内面はヘラ削りとなでによって平滑に仕上げられている。内底面には、粘土を削り取ったヘラの痕が残る。口端は尖がり気味の素縁で、やや内湾する。胎土は砂粒が多く混じり、色調は全体が黄土色で、使用されたもののように部分的な変化が全くない。この他、筒形台脚の1類と棒脚で中実太身の3類が認められる。1類の中では、下端をつまんだままのもの（C類）が多い。口縁部片についてみてみると、尖がった素縁で、胎土は砂粒を多く混じり、3類のものと考えられる。

b　Ⅵ区北貝層（挿図6－13、図版7－26～31）

小型の倒坏形の台脚をもった渥美半島製塩土器A類〔芳賀 1959 ・近藤 1965 〕に酷似するもの（26）が1点出土している。この他、1（C）類と3類がみられる。

c　Ⅵ区南貝層（図版8－20 ・ 21）

3類の細身のものと太身のものがある。

d　6層（挿図6－9～11、図版8－23～33、9－32～46）

3類が多量に出土し、1（C）類と棒脚で中空の2類が伴う。1（C）類は、坏部内底面から脚下端までの高さが7㎝と9㎝前後の高低2種類があり、筒形台脚で下端が平坦な1（A）類と、1（A）類より大型の1（B）類の大きさのものの下端をつまんだままの作りのようでもある。3類は坏部内底面から脚下端までの高さ11cm前後、坏部と接する部分の脚径3㎝前後を測るものがほとんどであるが、細身のもの（8－33）や低いもの（9－39）が数点認められる。

e　4層（図版9－18～20）

筒形台脚の中で下端面が平坦な作りで小型のもの1（A）類（18・19）がみられる。この2例は、A類の中でも、坏部と台脚の接合の仕方が、他のものと若干異なり、台脚内面上端の坏部との接合がはっきりしている。

f　10層（図版11－53～63）

少量ではあるが1類から4類にわたる各類型のものが出土している。

g　9層（挿図6－12 ・ 14、図版13－31～44）

渥美半島製塩土器A類に酷似するものが5個まとまってみられる。これと、同層の土師器高坏（13－19 ・ 20）との組み合わせは、青山貝塚〔芳賀　1959〕と同様のように考えられる。この他、1（C）類、2類、3類がある。筒形台脚の中で、筒部の浅いもの（39）がみられる。2類（40）

は先端が尖がり気味作られ、外見は3類のようである。

h　8層（図版14－26・27）

表面がなで調整されており4類に属すものであるが、坏部と接する部分の脚径が 2.3 cmと 3 cmを測り、大多数を示めるもの（平均1.8 cm）より太身である。

i　3層（図版15－20～23）

1（C）類と、にぎりはなしの作りで、胎土に砂粒を多く混じる5類とみられるもの（23）がある。

j　採集品（図版12－17～27）

渥美半島製塩土器A類に酷似するもの（17）1点を、第1次調査の1区方面で表採した。

18～27は第1次調査のⅣ区の北東約70 m付近（図版2のA地点）で、工事によってならされた土砂の中からまとまって採集した。作り方は4類と同様で、表面が丁寧になで調整されている。ただ坏部と接する部分の脚径が3 cm以上と太いものである。

k　まとめ

4類が10・9・8・3層から多く出土したが、ほとんど脚自体破損して細片であった。出土状態からみて同類のものが廃棄集積した場所から移動拡散したものとみられる。このことは、他の類型のものも同様で、第1次調査でみられたように煎熬用炉に伴って出土したものではなく、土層中に点在した状態で出土している。

(5)　土錘（表3、図版6～9、11、13～16）

ほとんどの層から出土しており、破損したものを含めて100個ほどある。このうち、8層の1個（14－33）が須恵質で、他はすべて土師質である。形態としては紡錘形が最も多く、俵形・球形・管形をしたものもみられる。使用時期を特定しえるものは少なく、強いてあげるならば、11層（6－19～22）・Ⅵ－北貝層（7－22～24）・Ⅵ－南貝層（8－22）・9層（13－45～53）のものが、古墳時代後期から奈良時代である。重量が40 g を越えるもの（15－31・32）は層位等から見て、本遺跡では後出するもののようである。いずれにせよ、孔径 0.2～0.5cmのものが約9割を占め、なかでも 0.3～0.4cmのものが多く、0.6～0.9cmのものは残りの1割と少ない。

2　鉄器および骨角器等（表4、図版17、29、38）

(1)　鉄器（図版17－1～10）

海岸の遺跡としては、良好かつ多種の鉄器が遺存していた。種別および各特徴については表4に示すとおりである。用いられた時期は、古墳時代後期（7世紀）から奈良時代のうちに入ると考えられる。

紡錘車や鋤先などは、直接、製塩や漁撈作業に関係しないものであり、これらの出土した今次の

表3　松崎貝塚土錘一覧

図版番号	出土区・層位	形態	法量（cm・g）				図版番号	出土区・層位	形態	法量（cm・g）			
			長さ	最大径	孔径	重量				長さ	最大径	孔径	重量
6－19	Ⅶ－11	紡錘形	—	1.5	0.4	—	14－28	Ⅶ－8	紡錘形	3.6	1.6	0.3	8.2
20	Ⅵ－11	〃	5.6	1.7	0.3	12.7	29	〃	〃	3.1	1.0	0.3	3.2
21	〃	〃	6.4	1.5	0.3	12.5	30	〃	〃	4.1	1.2	0.3	4.4
22	Ⅶ－11	〃	—	1.2	0.4	—	31	〃	〃	8.5	2.4	0.5	27.3
7－22	Ⅵ北貝層	〃	3.9	1.3	0.3	5.6	32	〃	〃	5.6	1.5	0.2	12.0
23	〃	〃	4.7	1.2	0.3	5.2	33	〃	〃	6.5	1.9	0.3	15.9
24	〃	〃	—	1.8	0.4	—	34	〃	〃	—	0.6	0.4	—
8－22	Ⅵ南貝層	管形	—	1.9	0.4	—	35	〃	〃	4.4	1.8	0.5	10.7
9－21	Ⅴ－4	紡錘形	4.0	1.4	0.4	8.0	15－24	Ⅴ－3	〃	3.9	1.2	0.3	—
11－32	Ⅶ－10	〃	3.8	1.1	0.3	4.1	25	〃	〃	4.7	1.1	0.3	—
33	〃	〃	3.5	1.2	0.4	4.3	26	〃	〃	4.7	1.3	0.3	4.7
34	〃	〃	3.8	1.0	0.3	4.1	27	〃	〃	6.4	1.7	0.4	15.9
35	〃	〃	3.8	1.2	0.3	3.6	28	〃	〃	6.1	2.0	0.5	—
36	〃	〃	4.9	0.9	0.3	4.0	29	Ⅶ－3	〃	—	2.5	0.6	(38.3)
37	〃	〃	5.2	1.1	0.2	4.6	30	Ⅴ－3	〃	5.7	2.1	0.4	21.9
38	〃	〃	5.4	1.3	0.4	6.8	31	Ⅴ－3	俵形	4.6	3.5	0.9	43.7
39	〃	〃	5.7	1.5	0.4	11.0	32	Ⅶ－3	球形	3.6	4.4	0.7	66.2
40	〃	〃	5.6	1.5	0.4	8.8	16－33	Ⅵ－2	紡錘形	4.3	1.3	0.4	5.8
41	〃	〃	6.2	1.5	0.5	9.4	34	〃	〃	4.1	1.4	0.3	6.1
42	〃	〃	5.2	1.3	0.3	11.4	35	〃	〃	4.6	1.0	0.4	3.6
43	〃	〃	4.0	1.6	0.3	7.7	36	〃	〃	4.6	1.0	0.3	6.0
44	〃	〃	4.2	1.7	0.5	9.0	37	Ⅶ－2	〃	4.5	1.5	0.4	6.7
45	〃	〃	5.1	1.8	0.4	12.1	38	Ⅵ－2	〃	4.4	1.4	0.5	6.0
46	〃	〃	5.0	2.2	0.4	23.0	39	〃	〃	4.4	1.3	0.3	5.9
47	〃	〃	—	2.3	0.6	—	40	〃	〃	4.8	1.4	0.4	7.6
48	〃	〃	—	1.9	0.6	—	41	〃	〃	4.6	1.9	0.5	12.2
49	〃	〃	5.3	2.3	0.6	22.4	42	〃	〃	4.8	1.5	0.5	8.6
50	〃	〃	—	2.3	0.5	—	43	〃	〃	5.0	1.3	0.4	6.7
51	〃	〃	6.6	2.0	0.5	19.0	44	Ⅶ－2	〃	4.0	1.9	0.5	15.5
52	〃	管形	—	1.9	0.4	—	45	Ⅵ－2	〃	6.2	1.6	0.4	13.8
53	〃	紡錘形	—	1.6	0.6	—	46	〃	〃	4.5	2.1	0.5	17.4
13－45	Ⅵ－9	〃	3.9	0.9	0.3	3.0	47	〃	〃	5.8	1.4	0.3	13.3
46	〃	〃	4.9	1.2	0.3	8.2	48	〃	〃	6.1	1.6	0.4	14.4
47	〃	〃	3.8	1.7	0.5	9.0	49	〃	〃	5.2	1.8	0.6	16.8
48	〃	〃	5.2	1.4	0.3	6.2	50	〃	〃	5.0	2.0	0.3	15.1
49	〃	〃	5.4	1.7	0.4	13.1	51	〃	〃	5.7	2.1	0.5	21.0
50	〃	〃	5.7	2.1	0.4	22.2	52	〃	球形	3.0	3.4	0.5	33.2
51	〃	〃	6.1	2.0	0.5	23.3							
52	〃	球形	2.5	3.0	0.4	23.3							
53	〃	〃	3.5	4.2	0.6	—							

調査区域は住居区であったと考えられる。

(2) 骨角器（図版17－11～14）

11は鹿角製で、中央に錆が付着しており、刀子の柄である。丁寧に磨かれ、やや湾曲する。13は鹿角を切断したもので、大きさからみて、刀子の柄の未成品とも考えられる。12～14は鹿の骨で鋭利な切断痕が残る。用いられた時期は鉄器と同時期のものと考えられる。

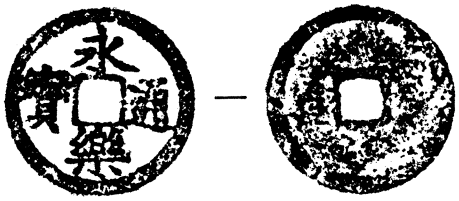
(3) 鞴の口と鉄塊（鉄滓（てつさ））（表8、挿図8、図版7－25）

Ⅵ区北貝層から鞴の口の破片が2個出土した。うち実測しえたもの（25）は、外径約6㎝、内径2.2㎝、厚み2.2㎝を測る。一端が焼けて黒色に変化している。

鉄塊は挙大のものがこの層から1個、Ⅶ区11層から1個、Ⅴ区4層（下層）から1個の3個出土している。出土した層の時期から判断して、古墳時代後期（7世紀）のものと考えられる。鉄塊の分析調査を、新日本製鐵株式会社名古屋製鐵所へ依頼した。その分析結果は第6章のとおりである。

表4　松崎貝塚鉄器・骨角器一覧

図版番号	用　途	出土区・層位	材質	備　　考
17－1	紡錘車	Ⅶ－11	鉄	長さ25.2㎝、心棒径0.5㎝、円盤径4.1㎝、円盤厚み0.3㎝。心棒の一端が尖る。
17－2	刀　子	Ⅵ－北貝層	〃	刃の部分が研ぎ減っている。
17－3	〃	Ⅶ－2	〃	同　上。
17－4	〃	Ⅵ－9	〃	同　上。
17－5	鉸　具	〃	〃	留金具が帯側の方を向いたまま錆化している。
17－6	鋤　先	〃	〃	断面は「V」形をなす。
17－7	鏃	Ⅶ－2	〃	全長10.1㎝。
17－8	〃	Ⅶ－8	〃	一方の断面は円形で、もう一方は方形に変化している。
17－9	〃	Ⅵ－9	〃	先端部欠損。折れまがっている。
17－10	環	Ⅶ－11	〃	径4㎜の鉄棒を使用している。
17－11	刀子の柄	Ⅵ－9	鹿角	全面が磨かれている。中央部に孔がうがたれ、錆が付着。
17－12	未成品	Ⅶ－10	〃	切断痕が残る。
17－13	〃	Ⅵ－2	〃	切断痕が残る。刀子の柄の未成品か。



挿図7　永楽通宝拓影（1：1）

3　石器類（表5、図版15－33～42、37）

石器は砥石を主体にしている。用途・石材および特徴については表5に示すとおりである。

4　貨幣（挿図7、図版30）

永楽通宝が1個出土している。出土場所は、Ⅶ区北西角の2層で、直径25㎜、厚み 1.8㎜、中央の四角形の孔の一辺 5.2㎜をはかる。

表5　松崎貝塚石器一覧

図版番号	用　途	出土区・層位	石　材	備　考
15－33	(支柱)	Ⅵ－北貝層	泥岩	面取りされている。
15－34	砥石	Ⅶ－2	流紋岩	扁平な両面と側面を使用。
15－35	〃	Ⅴ－4	砂岩	一部に細い条痕がある。
15－36	不明	Ⅶ－10	〃	扁平な面の片面中ほどに方形の突起がある。側面はすり減っている。加熱を受けた痕跡がある。
15－37	砥石	Ⅶ－11	〃	長径方向の両端は、中央がふくらみをもってすり減っている。短径方向の四角が2～3箇所凹む。
15－38	〃	Ⅴ－4	凝灰岩	断面が台形状をなすものとみられ、使用面が3面残る。
15－39	〃	Ⅶ－2	砂岩	扁平な両面とその周囲の面が使用されている。
15－40	〃	〃	凝灰質砂岩	一部に細い条痕がある。
15－41	〃	Ⅴ－4	片岩～片麻岩	断面が台形状をなすものとみられ、使用面が2面残る。
15－42	〃	Ⅵ－9	玄武岩	全面が平滑で、特に片面はなめらかである。この面に細い条痕がある。

第2節　自然遺物

1　貝類（表6、図版39）

表6　松崎貝塚Ⅵ区北および南貝層の貝類組成

種名＼ブロック		北貝層 個体数	北貝層 %	南貝層 個体数	南貝層 %
二枚貝類	ハマグリ	441	59.92	73	17.68
	マテガイ	70	9.51	3	0.73
	マガキ	65	8.83	36	8.72
	オキシジミ	43	5.84	8	1.94
	シオフキ	23	3.13	12	2.91
	オオノガイ	2	0.27	1	0.24
	サルボウ	2	0.27	1	0.24
	カガミガイ	1	0.14		
	小計	647	87.91	134	32.46
腹足類	ニナの類	56	7.61	258	62.47
	キセルガイ	24	3.26	5	1.21
	ツメタガイ	3	0.41	6	1.45
	アカニシ	2	0.27	6	1.45
	タマキビの類	2	0.27	1	0.24
	マイマイの類	2	0.27	1	0.24
	スガイ			2	0.48
	小計	89	12.09	279	67.54
計		736	100.00	413	100.00

Ⅵ区北および南貝層の中央でバケツ1杯分（約0.005㎥）採集したものの貝類組成は表6に示すとおりである。二枚貝類については殻の合せ目の数を二分して個体数とした。マテガイの実数はもっと多いとみられる。ハマグリは殻長50㎜ほどの中形が主体である。マガキは小形のものが多い。北貝層からはウニを微量検出した。

2　獣骨類（図版39）

総数で36点ある。うちⅥ区21点、Ⅶ区15点である。全体に鹿の骨が多くみられる。主なものをあげると次のようである。

鹿の角（Ⅵ区＝2層・6層・9層・北貝層、Ⅶ区＝8層・10層・11層）、馬の歯（Ⅵ区＝北貝層、Ⅶ区＝2層・10層）、いのししの歯（Ⅶ区＝2層）、犬の歯（Ⅵ区＝9層、南貝層、Ⅶ区＝10層）、鳥の骨（Ⅵ区＝北貝層）、海亀の甲ら（Ⅶ区＝11層）などがある。この他、Ⅵ区北および南貝層中から小魚骨片を微量検出した。

この分野に関しては、今後さらに検討を加えたい。

3　人骨出土状況

昭和54年8月6日に名鉄常滑線の踏切工事に伴い人骨らしいものが出土した旨、工事業者から教育委員会へ連絡が入った。出土した場所（図版2の●印）が、松崎貝塚の範囲内とみられることから、担当職員がすぐに現場へ向ったが、人骨は現場の作業者の手によって埋めもどされていた。そこで、その地点を再度掘り下げたところ、現地表面下約50cmのところから、まとめて埋めもどされていた人骨を収集した。人骨は水の湧出する灰色の砂層中から出土したものであるが、当初の出土状態については全く不明である。伴出遺物としては、同層から製塩土器（4類）の小片が出土している。

以上のような出土状況であり、人骨の出土状況や遺構等を明確にできないが、時期としては一応、製塩土器4類の用いられた時期（8世紀）以後のものと考えている。

表7　松崎貝塚土器類一覧

図版番号	器　種	器　形	出土区・層位	色　調	備　　考
5 － 1	須恵器	坏　蓋	Ⅶ － 11	青灰色	口縁部と天井部の境で段をなして、稜をわずかに作り出す。胎土は砂礫が混入する。
2	〃	〃	〃	灰　色	口縁部と天井部の境の沈線間に稜を作り出す。口端は丸みをもつ。天井部は丸く、上半はへら削り。
3	〃	〃	〃	黄灰色	同　上。
4	〃	〃	〃	灰　色	口縁部と天井部の境で段をなし、稜を作り出す。口端は丸い。
5	〃	坏　身	〃	白灰色	たちあがりは内傾し端部は丸い。受部は外上方にわずかにのび端部は丸い。底部下半はへら削り。
6	〃	〃	〃	灰　色	たちあがりは内傾し、中ほどで屈折し、口縁部は直立気味となる。底部下半はへら削りで、底面径が大きい。
7	〃	〃	〃	〃	たちあがりは内傾してのび、短い。受部は、わずかにのび、下方に沈線が1条めぐる。底部は丸みをもち、全面に茶色の自然釉がかかり、一部剝離している。
8	〃	〃	〃	〃	たちあがりはわずかに内傾してのび、短く、端部は丸い。受部は横にのび端部は丸い。底部も丸みをもつ。厚手のもので、器高が高い。
9	〃	無蓋高坏	〃	青灰色	坏部は外方にひろがり、中ほどに稜を作り出す。端部は丸い。
10	〃	高　坏	Ⅵ － 11	暗灰色	脚部は細く、ゆるやかな曲線を描いて端部に至る。中ほどに沈線が2条めぐる。端部は垂直の面をなす。胎土は砂礫が多く混じる。
11	〃	無蓋高坏	〃	青灰色	坏部中ほどに沈線が1条めぐり、口縁部は直立気味にたちあがる。脚部は大きく開き、短い。中ほどに丸味をもった稜を作り出し、端部は丸い。
12	〃	〃	Ⅶ － 11	暗灰色	坏部の中ほどに浅い沈線が2条めぐる。口縁部は横に張り出してのびる。内底面に三角形の刻印がある。
13	〃	高　坏	〃	青灰色	脚部は長脚で、下方に至り大きく開く。中ほどに2条の沈線をめぐらし、上下2段長方形の透しを三方に配す。
14	〃	短頸壺	Ⅵ － 11	黒褐色	小型で低く横に張った体部に直立する口頸部がつく。体部中ほどに沈線が1条めぐる。
15	〃	〃	Ⅶ － 11	白灰色	低く横に張った体部に、やや外方にのびる口頸部がつき、端部は尖がる。
16	〃	〃	〃	青灰色	肩の張った体部に、やや外方にのびる口頸部がつき、端部は内側に屈曲し、丸みをもつ。
17	〃	瓶	〃	白灰色	接合できないが同一個体とみられる。体部は丸みをもち、沈線が2条めぐる。口頸部は上方で大きく外反し二重口縁に至る。沈線が口縁部の屈折部に1条と、頸部中ほどに2条めぐる。薄緑色の自然釉がかかる。
18	〃	甑	〃	青灰色	口縁部はわずかに外方に開き、断面三角形のふくらみを2条形成する。胴部に斜めの叩きを施し、中ほどに沈線が1条めぐる。
19	〃	〃	〃	灰　色	胴部外面に叩きを施し、内面は指なでによって調整する。底部内外面はへら削りを施す。底は半月形の孔を相対してうがち、中央に1本の橋部を残す。
20	〃	〃	〃	〃	底面片で、中央に円形の孔をうがち、その周囲の四方向に凸レンズ状の孔をうがつもののようである。

図版番号	器　種	器　形	出土区・層位	色　調	備　　考
5 －21	須恵器	盤	Ⅶ －11	褐　色	脚部に長方形の透しを配す。
22	〃	甕	Ⅵ －11	灰　色	口頸部上方でわずかにふくらむ稜を形成し、口縁部に至る。
23	〃	蓋　坏	Ⅶ －11	暗灰色	口縁部を下方に折り曲げる。
24	〃	〃	〃	〃	口縁部を内側にむけて小さく折り曲げる。天井部上半はへら削り。
25	〃	鉢	Ⅵ －11	青灰色	口縁部をわずかに直立させ、口端に斜めの平坦面を作り出す。体部はやや張り出す。
26	〃	無台坏身	Ⅶ －11	黒　色	体部は直線的に斜め上方にのびる。底部は回転へら削り調整。
27	〃	坏　身	〃	暗灰色	体部はほぼ直線的に斜め上方にのびる。ろくろ引きのひだがのこる。
28	〃	〃	〃	黒褐色	体部は直線的に斜め上方にのびる。底部は回転糸切りで、直線の刻印がある。
29	〃	（皿）	〃	灰　色	回転糸切りの底部から腰部が斜めにたちあがり、口縁部は直立する。
30	〃	坏　身	〃	黒　色	体部は直線的に斜め上方にのび、口端がわずかに外反する。
31	灰釉陶器	碗	〃	白灰色	底部はへら削り調整を施す。高台は断面が菱形をなし、外方に開く。
32	〃	〃	〃	〃	底部はへら削り調整を施す。高台はわずかに外反し、端部は丸い。
33	〃	〃	〃	〃	底部はへら削り調整を施す。高台は外反し、端部は丸みをもち、高い。
6 － 1	土師器	高　坏	〃	褐　色	坏部と脚部の接する部分に刷毛調整を施す。脚部は筒形をなし下半に至り大きく横にのびる。脚部はへら削りの後なで調整を施す。
2	〃	〃	〃	明褐色	脚部の裾が横にのび円盤形をなす。中ほどに円形の透し穴を１個うがつ。脚内面はへら削りで、他はなで調整を施す。
3	〃	甑	Ⅵ －11	淡褐色	把手。円形のものを斜め上方にむけてつける。
4	〃	〃	Ⅶ －11	〃	把手。先端がやや尖がり気味の、太目のものをつける。胎土は砂礫が多く混じる。
5	〃	〃	〃	白灰色	把手。三角形のものを斜め上方にむけてつける。内外面とも刷毛調整を施す。
6	〃	壷	〃	褐　色	胴部は扁球形をなす。輪積み成形で、外面は丁寧ななで調整を施す。
7	〃	〃	〃	赤褐色	胴部は扁球形をなす。胴部下半はへら削りを施す。胎土は砂粒が多く混じる。
8	〃	〃	Ⅵ －11	淡褐色	底部が直立して突出する。内面はへら削りを施す。

図版番号	器種	器形	出土区・層位	色調	備考
6 － 9	土師器	壷	Ⅶ －11	褐色	底部がわずかに張り出す。全面なで調整。
10	〃	〃	〃	淡褐色	底部は直立して突出し、下端は押さえつけられ粘土が外方へはみ出す。底面に植物繊維圧痕付着。内底面はへら削り。
11	〃	甕	Ⅵ －11	〃	口端がわずかに突出し、直立する口縁帯を作り出す。口頸部内外面は横なで調整を施す。胴部は細かい刷毛調整を施す。
12	〃	〃	〃	黒褐色	口端がわずかに突出する。口頸部外面は横なで、内面は横の刷毛調整を施す。胴部外面は縦の刷毛調整、内面はなで調整を施す。
13	〃	〃	〃	淡褐色	口端が上方に突出し、端部は鋭い。口頸部内外面は横なで調整、胴部は細かい刷毛調整を施す。
14	〃	〃	Ⅶ －11	〃	内外面とも横なで調整を施す。
15	〃	〃	〃	〃	口端がわずかに肥厚する。口頸部内外面とも丁寧な横なでを施す。
16	〃	〃	〃	暗褐色	直線的に外方に大きく開く台脚で、端部は押さえつけられ、粘土がはみ出す。なでによる調整を施すが雑である。
17	〃	（甕？）	〃	淡褐色	小型の台脚。外面はなで調整、内面は指頭痕が残り、下端は押えつけられ、内側に粘土がはみ出る。
18	〃	（〃？）	〃	〃	同　上。
7 － 1	須恵器	坏蓋	Ⅵ－北貝層	黒褐色	全体に丸みをもつ。天井部と口縁部の境にわずかに稜を作り出す。天井部上半はへら削りを施す。
2	〃	〃	〃	青灰色	天井部が扁平で、口縁部との境にわずかに稜を作り出し、口縁部は直立する。天井部上半はへら削り。
3	〃	坏身	〃	白灰色	たちあがりは内傾して短くのび、口端は丸い。受部はわずかに横に突出し、端部は丸い。底部は丸みをおびる。底部外面にこげ茶色の自然釉がかかる。
4	〃	無蓋高坏	〃	黒色	坏部底面が横にのび、口縁部は直線的に外方に開く。口端は丸い。口縁部外面下方に２条の凸線がめぐり、その間に７本か８本組の櫛描波状文を施す。内面に暗緑色の自然釉がかかる。坏部外底面に残る痕跡からみて、脚部は透しをもつもののようである。
5	〃	〃	〃	黄灰色	坏部は丸みをもってたちあがり、口端は丸い。口縁部内面に沈線が１条めぐり、外面に稜を作り出す。
6	〃	高坏	〃	青灰色	上半は細身で直立し、下半は外方に大きく開き、下端を折り曲げ縁帯を作り出す。中ほどに２条の沈線がめぐる。胎土は砂粒が混じる。
7	〃	〃	〃	暗灰色	裾部が大きく直線的に開き、斜めの縁帯を作り出す。
8	〃	〃	〃	灰色	下方で折り曲げられ、その部分に稜を作り出す。下端はわずかに肥厚し、外方へ張り出す。
9	〃	坏蓋	〃	淡黄色	宝珠形のつまみをつける天井部から丸みをもって口縁部に至り、内面にかえりをもつ。天井部上半はへら削り。
10	〃	〃	〃	黄灰色	擬宝珠形のつまみをもち、口縁部が長くのびる。天井部内面に直線の刻印がある。
11	〃	無台坏身	〃	褐色	回転糸切りの底部から、ゆるやかな曲線をもってたちあがる体部をもつ。

図版番号	器種	器形	出土区・層位	色調	備考
7 －12	須恵器	甕	Ⅵ－北貝層	青灰色	大型のもの。口頸部は外方に開き、口縁部はわずかに肥厚して縁帯部を作り出す。２条１組の沈線をめぐらし、その間に櫛状刺突文を配す。内外面とも暗緑色の自然釉がかかる。
13	〃	坏蓋	〃	暗灰色	口縁部を下方に折り曲げる。
14	〃	鉢	〃	茶褐色	体部は半円形をなし、口縁部がわずかに外反し、口端に平坦面を作り出す。
15	〃	〃	〃	黒褐色	底部が円盤状に張り出すもの。底面は糸切りで、半円形の刺突を全面に施す。
16	〃	碗	〃	灰色	高台の下方が肥厚し、丸みをもつ。
17	土師器	甑	〃	淡褐色	把手をつける。口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸い。外面は刷毛、内面はなでによる調整を施す。外面に煤が付着する。胎土は砂粒が混じる。
18	〃	〃	〃	〃	把手。斜め上方にのびる大きなものをつける。
19	〃	甕	〃	茶褐色	口頸部がわずかに外反し、口端は丸い。胴部外面と内面中ほどに刷毛調整を施し、他は横なで調整である。
20	〃	〃	〃	淡褐色	口部が大きく外反し、口端はわずかに上方に突出する。口頸部内外面は丁寧な横なで調整を施し、胴部内面は刷毛調整である。
21	〃	〃	〃	〃	器形は同上。胴部外面に太い刷毛目がわずかに残る。
8 － 1	須恵器	坏身	Ⅵ－南貝層	黒色	たちあがりは内傾してのび、口端は丸い。受部は斜め上方にのびる。受部下方に沈線が１条めぐる。底部はへら削り調整を施す。胎土は砂粒が多く混じる。
2	〃	〃	〃	青灰色	たちあがりは内傾してのび、口縁部は直立気味である。受部は斜め上方にのびる。下底部はろくろ引きのひだが目立つ。
3	〃	〃	〃	黒灰色	たちあがりは内傾してのび、短い。受部は斜め上方にのびる。受部下方は直立気味となり、下底部に至る。
4	〃	〃	〃	〃	たちあがりは内傾してのびる。受部はわずかに張り出す。深さが浅く高坏かもしれない。
5	〃	坏蓋	〃	灰色	丸みをもった形態で、天井部上半はへら削り。
6	〃	短頸壺	〃	黄灰色	小型で、体部上方が横に張り出し、沈線が１条めぐる。直立した口頸部をつける。底部はへら削りを施す。底面に「Ｎ」の刻印がある。
7	〃	〃	〃	黒色	扁球形の体部に沈線が２条めぐる。底部はへら削り。
8	〃	無蓋高坏	〃	灰色	坏部はゆるやかにたちあがり、外方に開く。口縁部内面に浅い沈線が１条めぐり、外面には稜を作り出す。脚部は上方が直立気味で下方は直線的に大きく開き、縁帯に至る。
9	〃	甑	〃	白灰色	底面。中央に円形の孔をうがち、その周囲4箇所を凸レンズ形に切り取る。
10	〃	壺蓋	〃	黄灰色	上端がわずかにくぼんだ台形状のつまみをつけ、口縁部は長く直立気味にのび、口端はわずかに外反する。外面中ほどに櫛状刺突文をめぐらす。天井部および内面にへら削り調整を施す。外面に薄緑色の釉がかかる。
11	〃	〃	〃	灰色	扁平な天井部に直立する口縁部を作り出す。外面に暗緑色の釉がかかる。

図版番号	器種	器形	出土区・層位	色調	備考
8 －12	須恵器	瓶	Ⅵ－南貝層	黒褐色	底部はへら削り調整を施す。高台は外方に張り出し、断面が菱形をなす。胎土は砂礫を含む。
13	土師器	甕	〃	淡茶色	長胴形で、口頸部は直線的に外方に開く。胴部外面および口縁部内面に細かい刷毛調整を施し、口縁部内外面はなで調整である。胴部内面に輪積みの痕がみられる。外面に煤が付着する。
14	〃	〃	〃	淡褐色	口部は直線的に外方にのび、口端が突出し、口縁帯を作り出す。口頸部内外面は丁寧な横なで調整を施し、胴部内外面は細かい刷毛を施す。
15	〃	〃	〃	褐色	口部は直線的に外方にのび、口端は丸い。器壁が剝落し、調整具合は不詳。胎土は砂粒が多く混じる。
16	〃	（高坏？）	〃	淡褐色	坏部は丸みをおび、口端はやや尖がり気味である。厚手で、輪積みの痕が内外面に残る。全面なで調整を施す。外面の一部に煤が付着する。胎土は砂粒が多く混じる。
17	〃	甑	〃	褐色	把手。斜め上方にのびる太目のものをつける。胎土は砂粒が多く混じる。
18	〃	〃	〃	淡褐色	把手。斜め上方にのびる三角形状のものをつける。
19	〃	（壷）	〃	暗褐色	手づくね土器で、内外面とも指頭痕が残る。胎土は砂粒が多く混じる。
9 － 1	須恵器	坏蓋	Ⅴ － 4	青灰色	天井部と口縁部の境に断面三角形の鋭い稜を作り出し、口縁部は直立してのび、長い。口縁内面を面取りし、口端は尖がる。天井部は稜近くまでへら削りを施す。
2	〃	坏身	〃	〃	たちあがりはわずかに内傾し、長くのびる。口端内側に段を作り出す。受部は斜め上方にのびる。
3	〃	〃	〃	〃	たちあがりは内傾し、短い。受部は斜め上方にのび、端部は鋭い。底部はわずかに丸みをもち、底面はへら削りを施す。胎土は砂礫が混じる。
4	〃	〃	〃	黒灰色	たちあがりは直立気味である。底部にへら削りを施す。器表面に黒色粒の溶出がみられる。
5	〃	〃	〃	灰褐色	たちあがりは短かく、口縁部は直立気味にのび、口端は尖がる。底部にへら削りを施す。
6	〃	無台坏身	〃	青灰色	糸切りした後手持ちへら削りを施した底部から、ゆるやかに外反してたちあがる体部をもつ。内底面には指頭痕が残る。
7	〃	〃	〃	暗褐色	底面は糸切りの後回転へら削り調整を施す。
8	〃	〃	〃	茶褐色	体部は直線的にたちあがり、口縁部はやや外反し、端部は丸い。底面は糸切りの後刷毛調整を施す。
9	〃	有台坏身	〃	青灰色	体部は直線的に斜め上方にのび、口縁部はややくびれる。底面はへら削り調整を施す。高台は外方に張り出し、断面台形状をなす。
10	〃	坏蓋	〃	白灰色	扁平な擬宝珠形のつまみをつける。天井部は全面へら削りを施し、ゆるやかに下がり、口縁部を下方へ折り曲げる。
11	〃	〃	〃	黄灰色	宝珠形のつまみをつける。天井部はへら削り。
12	〃	〃	〃	暗灰色	口縁部を下方へ折り曲げる。天井部はろくろ引きのひだが目立つ。
13	〃	〃	〃	〃	ゆるやかな丸みをもつ天井部に、下方へ折り曲げた口縁部をつける。天井部上半はへら削り。

図版番号	器種	器形	出土区・層位	色調	備考
9 －14	須恵器	甑	Ⅴ － 4	白灰色	把手。先端の尖がる棒状のものを斜め上方にむけてつける。胴部は叩きを施す。
15	土師器	高坏	〃	淡褐色	台脚裾部が横に広がり円盤形をなす。内面はへら削りを施し、他は丁寧ななで調整を施す。
16	〃	甕	〃	白灰色	口部は直線的に外方に開き、端部は丸みをもつ。内外面とも横なで調整を施す。
17	〃	〃	〃	淡褐色	球形の胴部に、外方に開く口部をつける。口頸部外面は横なで、内面は太目の刷毛整形の後横なで調整を施す。胴部外面は細かい刷毛調整、内面は上部が指頭による整形、下部がへら削り、中ほどはなでによって調整する。胎土は砂粒が多く混じる。
22	須恵器	坏蓋	Ⅵ － 6	黒灰色	扁平な天井部に丸みをもった口縁部がのびる。その境に段をなして稜を作り出す。天井部上半はへら削り。
23	〃	〃	〃	〃	扁平な天井部と外方に開く口縁部の境に沈線を１条めぐらす。天井部上半はへら削り。
24	〃	坏身	〃	灰色	たちあがりは直立し、口端は尖がり気味である。受部は横にのび、端部は鋭い。底部は扁平で、へら削りを施す。
25	〃	〃	〃	青灰色	たちあがりは内傾し、口縁部は直立気味である。受部は斜め上方にのびる。受部下方に稜を作り出し、底部は屈折する。高坏ともみられる。
26	〃	〃	〃	褐色	たちあがりは短い。受部は横にのびる。底部は扁平である。
27	〃	高坏	〃	青灰色	低い台脚で、外方に大きく開き、縁帯に至る。
28	〃	短頸壷	〃	黒褐色	肩の張った体部に、やや外方に開く口頸部をつける。
29	〃	細頸瓶	〃	灰褐色	球形の胴部に、ラッパ状に開く細頸をつけ、口縁帯を作り出す。胴部は一側面に別の粘土をあてて成形し、一孔をうがち、頸部をつける手法である。外表面に茶色に変化し剝落した釉がかかる。
30	土師器	甕	〃	黒色	口縁部の中ほどが肥厚し、口端は上方に突出し縁帯をつくる。外面は横なで、内面は細かい刷毛調整を施す。堅い。
31	〃	〃	〃	淡褐色	太目の刷毛調整を施す。
10－ 1	須恵器	坏蓋	Ⅶ －10	灰色	全体に丸みをもち、天井部と口縁部の境に段をなして稜を作り出す。口縁部はゆるやかに曲線を描いてのび、口端内面を面取りする。天井部上半はへら削り。
2	〃	〃	〃	灰褐色	同上で、口端は丸みをもつ。
3	〃	〃	〃	暗灰色	天井部上半は扁平で、そこからゆるやかに丸みをもって口端に至る。天井部と口縁部の境に、わずかに稜を作り出す。
4	〃	〃	〃	黒色	天井部上半はへら削りされ扁平で、口縁部は屈折し直立気味にのび、端部は丸い。
5	〃	坏身	〃	灰色	たちあがりは内傾してのび、受部は斜め上方に張り出す。受部下方に幅太の沈線がめぐる。底部はへら削り。
6	〃	〃	〃	黒褐色	たちあがりは直立気味で、受部下方に沈線を１条めぐらす。底部はへら削り。胎土は砂礫が混じる。
7	〃	〃	〃	灰色	たちあがりは内傾し、受部は凸帯状に作り出す。底部はへら削り。

図版番号	器　種	器　形	出土区・層位	色　調	備　　考
10－8	須恵器	坏　身	Ⅶ－10	暗灰色	たちあがりは内傾し、短かい。受部はわずかに突出し、下方に沈線を2条めぐらす。
9	〃	〃	〃	青灰色	たちあがりは直立気味で、受部は斜め上方にのびる。受部下方に沈線を1条めぐらす。
10	〃	〃	〃	黒灰色	たちあがりはわずかに内傾し、受部は横にのびる。底部は扁平である。
11	〃	〃	〃	灰　色	たちあがりは短く、口縁部内面を面取りする。底部は扁平で、へら削りを施す。
12	〃	〃	〃	灰褐色	たちあがりは内傾し、口端は丸い。底部は扁平である。
13	〃	高　坏	〃	暗灰色	中ほどに沈線を2条めぐらし、上下2段長方形の透しを三方向に配す。
14	〃	〃	〃	青灰色	裾部が横にのび、端部を折り曲げ縁帯を作り出し、縁帯上方に凸線を1条めぐらす。
15	〃	無蓋高坏	〃	黒灰色	坏部はゆるやかに丸みをもってたちあがり、口縁部内側に沈線を1条めぐらす。外面に稜を作り出す。脚部はゆるやかに開く。胎土は砂粒が混じる。
16	〃	〃	〃	〃	同　上。
17	〃	高　坏	〃	青灰色	坏部中ほどと脚部との境に沈線をめぐらす。脚部は細身である。
18	〃	〃	〃	〃	裾部は大きく開き、端部をわずかに折り曲げ縁帯を作り出す。中ほどに沈線がめぐる。
19	〃	〃	〃	黄灰色	裾部は大きく開き、縁帯に至る。
20	〃	〃	〃	〃	裾部は大きく開き、斜めの縁帯を作り出す。
21	〃	〃	〃	灰　色	同　上。
22	〃	〃	〃	〃	裾部は大きく開き、斜め下方にひろがる縁帯を作り出す。中ほどに沈線がめぐる。
23	〃	〃	〃	〃	同　上。
24	〃	短頸壺	〃	黒灰色	肩の張った扁球形の体部に、直立する口頸部をつける。頸部と体部に浅い沈線がめぐる。
25	〃	甕	〃	暗灰色	口頸部がゆるやかな曲線を描いて外反し、口縁帯を作り出す。
26	〃	甑	〃	白灰色	把手。断面が円形の棒状のものをつける。
27	〃	〃	〃	〃	同　上。
28	〃	〃	〃	〃	把手。つけ根が横にのびる板状のものをつける。

図版番号	器種	器形	出土区・層位	色調	備考
10－29	須恵器	甑	Ⅶ－10	白灰色	把手。断面が円形のものをつける。
30	〃	〃	〃	暗灰色	底部。中央に幅太の橋部を1本残すものとみられる。
31	〃	坏蓋	〃	青灰色	扁平な低いつまみをつける。天井部と口縁部の境に稜を作り出す。天井部上半にへら削りを施す。
32	〃	〃	〃	黒灰色	円盤形のつまみをつける。口縁部内側にかえりを有する。
33・34	〃	〃	〃	〃	扁平な円盤形のつまみをつける。
35	〃	〃	〃	〃	擬宝珠形のつまみをつける。天井部は丸味をもち、口縁部を下方へ折り曲げる。天井部上半はへら削り。
36	〃	〃	〃	黒色	擬宝珠形のつまみをつける。天井部上半はへら削り。
37	〃	〃	〃	暗灰色	扁平な円盤形のつまみをつける。
38	〃	〃	〃	〃	口縁部を下方へ折り曲げ、口端は鋭い。
39	〃	〃	〃	〃	扁平な形態で、口縁部を下方へ折り曲げる。
40	〃	無台坏身	〃	茶褐色	底面は回転へら削りを施し、腰部が横に張り出し、直線的に外方へ開く口縁部を作り出す。
41	〃	〃	〃	褐色	同上で、底部が下方へわずかに突出する。
42	〃	有台坏身	〃	黒灰色	底部は回転へら削りを施す。体部は直線的に外方に開く。高台は、下端が外方へ張り出す。
43	〃	〃	〃	黒褐色	同上。
44	〃	〃	〃	暗灰色	底面は回転へら削りを施す。体部は直線的に外方に開き、端部は鋭い。断面菱形の外方に開く高台をつける。器高は低い。
45	〃	〃	〃	白灰色	底面は糸切りの後回転へら削り調整を施す。体部は稜をなしてたちあがり、直線的に外方に開き、口端に平坦面を作り出す。高台は断面四角形をなす。
46	〃	〃	〃	黒褐色	底面は回転へら削り調整を施す。体部は稜をなして、斜め上方へ直線的にたちあがり、深い。高台は断面台形をなし、下端内側は鋭く尖がる。
47	〃	〃	〃	灰褐色	器高の低いもので、底面は回転へら削り調整を施す。高台断面は四角形をなす。
48	〃	〃	〃	黒灰色	底面は回転へら削り調整を施す。体部は鋭く屈折してたちあがる。高台端面に内外両方向からへら削りを加え、三角形状に作り出す。
11－1	〃	無台坏身	〃	黒褐色	糸切り底の底部から斜め上方にたちあがる体部をもつ。
2	〃	〃	〃	淡褐色	糸切り底。体部はわずかに丸みをおびたちあがる。上半はろくろ引きのひだが目立つ。底面に直線の刻印がある。

図版番号	器種	器形	出土区・層位	色調	備考
11－3	須恵器	平瓶	Ⅶ－10	黄灰色	口頸部が斜め上方に直線的に開き、口縁部がわずかに外反する。
4	灰釉陶器	蓋	〃	白灰色	扁平な天井部に、下方へ折れ曲がってのびる口縁部をつける。天井部に淡緑色の灰釉がかかる。
5	須恵器	細頸瓶	〃	灰色	口頸部は斜め上方に開き、口縁部はさらに丸みをもって外反し口縁帯を作り出す。
6	灰釉陶器	広口瓶	〃	白灰色	口縁部はゆるやかに丸みをもって外反し、口端下方がわずかに突出し、口縁帯を作り出す。内外面に淡緑色の灰釉を施す。
7	須恵器	瓶	〃	灰色	耳（把手）の部分。断面円形の粘土を丸くつける。胴部に叩き目が残る。胎土は砂礫が混じる。
8	灰釉陶器	〃	〃	白灰色	底部はへら削り調整を施す。高台は外方に張り出し、下端内側は鋭く尖がる。
9	〃	〃	〃	青灰色	胴部と高台が屈折し、直線的である。底部はへら削り調整を施す。
10	〃	〃	〃	白灰色	同上で、灰釉を刷毛塗りによって施す。
11	須恵器	盤	〃	黒褐色	底面は回転へら削り調整を施す。体部は扁平で、口縁部を折り曲げ縁帯を作り出す。高台は外反し断面が菱形をなす。
12	〃	〃	〃	淡褐色	底面は回転へら削り調整を施す。高台断面は四角形をなし、下方が外へ張り出す。
13	〃	〃	〃	灰褐色	10－11と同じ。
14	〃	〃	〃	黒褐色	同上。
15	〃	〃	〃	黒灰色	体部は扁平で、口縁部がわずかに屈折し、端部は鋭い。高台は外反し、断面が菱形をなす。
16	〃	坏	〃	黒色	糸切りの底部から、斜め上方にのびる体部をもち、口縁部内側を面取りする。器高は低い。胎土は砂粒が混じる。
17	〃	高盤	〃	黄灰色	直立する筒状の台脚部分で、厚みがある。
18	〃	〃	〃	黒灰色	同上。盤の底部は薄い。
19	〃	鉢	〃	黒褐色	丸みをもつ胴部に、直立する口頸部をつける。口端は丸みをおびてわずかに外方に突出し、平坦面を作る。
20	〃	碗	〃	灰色	体部は丸みをもち、口端が肥厚し丸くなる。外面はへら削り調整を施す。
21	〃	〃	〃	黒褐色	体部は斜め上方にたちあがり、口縁部が屈折し外反する。
22	灰釉陶器	〃	〃	白灰色	底部はへら削り調整を施す。高台断面は四角形。内面に灰釉が厚くかかり、他の口縁部片が付着している。
23	〃	（碗）	〃	〃	底部はへら削り調整を施す。高台断面は菱形をなし、端部は鋭い。

図版番号	器　種	器　形	出土区・層位	色　調	備　　考
11－24	灰釉陶器	碗	Ⅶ －10	白灰色	底部はへら削り調整を施す。高台は内外面ともに丸みをもつ三日月高台がつく。内底面に重ね焼きの痕が残る。
25	〃	有段皿	〃	〃	縁帯が広く、裏面にも段を有する。高台は内外面とも丸みをもつ三日月高台がつく。底面へら削り。
26	〃	碗	〃	〃	底面はへら削り調整を施す。高台は内側に丸みがなく、外側が屈折して稜をなす三日月形をなす。灰釉を刷毛塗りによって施す。
27	〃	〃	〃	灰　色	底面はへら削り調整を施す。高台は下方が屈折し稜をなす。灰釉を刷毛塗りによって施す。
28	〃	〃	〃	白灰色	同　上。
29	〃	広口壷	〃	〃	糸切り底で、わずかに肩の張る体部を有する。
12－1	土師器	（甕？）	〃	淡褐色	小型の台脚。外面はなで調整し、内面は指頭痕が残り、下端は押えつけられ平坦で、内側に折り返し状に粘土がはみ出る。胴部内底面はへら状器具による削り調整を施す。
2	〃	高　坏	〃	褐　色	台脚が斜め下方に開き、裾部が円盤形をなすものとみられる。内外面ともへら削りし、外面はなで調整を施す。
3	〃	（凸帯）	〃	淡褐色	口縁部の剝離片で、断面が四角形状の凸帯がめぐる。
4	〃	甑	〃	〃	断面がほぼ円形の把手をつける。胴部外面は太目の刷毛調整を施す。内面には輪積みの痕が残り、なで調整を施す。外面に煤が付着する。
5	〃	甕	〃	〃	斜め上方に開く口頸部をつける。内外面ともなで調整を施し、頸部内側に横の刷毛目がみられる。
6	〃	〃	〃	〃	口径が胴部径よりも大きくなるもののようである。口縁部内側と胴部外面に荒くて深い刷毛調整を施す。器体は薄手である。
7	〃	〃	〃	〃	頸部が直立気味にたちあがり、口縁部は外反し、口縁帯を作り出す。口縁部は横なで、他は細かい刷毛調整を施す。
8	〃	〃	〃	褐　色	断面三角形状の口縁帯を作り出す。胴部は細かい刷毛調整で、他は丁寧な横なでを施す。堅い。
9	〃	〃	〃	灰　色	口縁部が肥厚し、胴部は薄手である。胴部に荒い刷毛調整を施す。胎土は砂粒が多く混じる。内面黒色。
10	〃	〃	〃	淡褐色	シャープな口縁帯を作り出す。
11	〃	〃	〃	暗褐色	口頸部が斜め上方に大きく開く。胴部に細かい刷毛調整を施す。器体は薄い。
12	〃	〃	〃	淡褐色	内外面に指頭痕の残る手づくね土器。外面全体に煤が付着する。胎土は砂礫を多く含む。
13	〃	〃	〃	褐　色	口縁部が肥厚し、断面円形の凸帯をつける。口端は幅広で凹凸を作り出す。胎土は砂粒を含む。堅い。
14	〃	〃	〃	淡褐色	口縁部が横に開き、端部は鋭く尖がる。内外面ともなで調整を施す。胎土は砂粒を多く含む。器体は薄い。
15	須恵器	坏　蓋	A地点付近	青灰色	扁平な天井部と長い口縁部との境に断面三角形の稜を作り出す。口縁部は直立気味にのび、端部に面を作り出す。天井部は稜近くまでへら削り調整を施す。

図版番号	器種	器形	出土区・層位	色調	備考
12－16	土師器	広口坩	支水溝	褐色	肩の張った球形の胴部に、斜め上方に長くのびる口頸部をつける。口縁部外面に断面三角形の凸帯をめぐらす。全体に横なで調整を施し、底部は手持ちへら削りによって整形する。
13－1	須恵器	坏蓋	Ⅵ－9	灰色	扁平な天井部と口縁部の境に断面三角形の稜を作り出す。口縁部は直立気味に長くのび、口縁部内側に段をつける。天井部は稜近くまでへら削りを施す。
2	〃	〃	〃	〃	天井部と口縁部の境に稜を作り出し、口縁部は斜め下方にのびる。天井部上半はへら削り。
3	〃	〃	〃	白灰色	扁平な天井部から、口縁部が折り曲げられて下方にのび、境に沈線を1条めぐらす。天井部上半はへら削り。外面に暗緑色の釉がかかる。
4	〃	坏身	〃	黒褐色	たちあがりは内傾してのび、端部は丸い。受部はほぼ横に張り出す。受部下方に稜を作り出し、底部は扁平である。
5	〃	〃	〃	〃	たちあがりは短く、肥厚し、端部は丸い。受部は横にのび端部は丸い。底部はへら削りを施す。底部下半はろくろ引きのひだが目立つ。胎土は砂粒が多く混じる。
6	〃	無蓋高坏	〃	暗灰色	坏部は丸みをおびてたちあがり、口縁部が屈折し外反する。
7	〃	高坏	〃	白灰色	裾部が丸みをおびて外反し、端部を下方へ折り曲げ縁帯を作り出す。縁帯の少し上に断面三角形の凸帯を1条めぐらす。長方形の透しを四方向に配すものとみられる。
8	〃	〃	〃	〃	裾部が丸みをもって外反し、下方で段を作り出し、端部を下方へ折り曲げる。
9	〃	〃	〃	青灰色	裾部はゆるやかに外反し、端部を上方にのばし縁帯を作り出す。中ほどと下方に2条1組の沈線をめぐらし、上下2段長方形の透しを相対して配す。
10	〃	横瓶	〃	灰色	外面を叩きによって調整した俵形の胴部に、斜め上方にのびる口頸部をつける。口縁部は断面三角形の縁帯を作り出し、その下方にもう1条凸帯をめぐらす。内面は丁寧ななで調整を施す。口頸部内外面と胴部に暗緑色の釉が厚くかかる。
11	〃	坏蓋	〃	灰褐色	扁平な天井部に円盤形のつまみをつける。口縁部を下方に折り曲げる。天井部上半はへら削り。
12	〃	〃	〃	黒褐色	扁平な擬宝珠形のつまみをつける。天井部上半はへら削り。
13	〃	〃	〃	青灰色	宝珠形のつまみをつける。天井部はへら削り。
14	〃	〃	〃	黒灰色	扁平な天井部に宝珠形のつまみをつける。口縁部を強く内向きに折り曲げる。天井部上半はへら削り。
15	〃	有台坏身	〃	灰色	器高の低いもので、底面が盛り上がったようになっている。底部はへら削り調整を施し、断面が菱形をなす高台をつける。
16	〃	〃	〃	灰褐色	口径の小さいもので、体部は直線的に斜め上方へのびる。体部の屈折する部分近くに、断面四角形の高台をつける。底面はへら削りを施す。
17	〃	長頸瓶	〃	黒灰色	球形の胴部に、直立する口頸部をつけ、口縁部はゆるやかに外反し、口端を下方にのばし口縁帯を作り出す。胴部と口頸部を接続する2段構成である。暗緑色の釉がかかる。
18	〃	瓶	〃	灰色	底部にへら削りを施す。高台は断面四角形で外方に張り出す。
19	土師器	高坏	〃	灰褐色	器体の厚いもので、斜め下方にのび、裾部は大きく外反し縁帯を作り出す。内外面ともへら削りの後、横なで調整を施す。
20	〃	〃	〃	赤褐色	斜め下方にのび、下端は円盤形に横に張り出す。下端をわずかに折り曲げる。外面はへら削りの後、なで調整を施す。器体は厚い。堅い。

図版番号	器　種	器　形	出土区・層位	色　調	備　　考
13－21	土師器	甕	Ⅵ－9	茶褐色	口頸部が斜めに直線的にのびる。口縁部内外面と胴部はなで調整し、頸部内側に横の細かい刷毛目がみられる。
22	〃	〃	〃	灰褐色	内外面とも荒い刷毛調整を施す。外面に煤が付着する。
23	〃	〃	〃	褐　色	口縁帯を作り出す。胴部外面と口縁部内面は細かい刷毛調整で、他はなで調整を施す。外面に煤付着。
24	〃	〃	〃	淡褐色	頸部が肥厚し、口端を上方へわずかに突出させ口縁帯を作り出す。外面は丁寧ななで調整、内面は横の太い刷毛調整を施す。
25	〃	〃	〃	明褐色	口縁部内側に稜を作り出す。内外面とも横なで調整を施す。外面に煤付着。
26	〃	甑	〃	灰褐色	横長の板状の把手をつける。胴部内外面に刷毛調整を施す。
27	〃	台付甕	〃	茶褐色	外方に開く台脚で内外面に指頭痕が残る。下端内側に折り返しがある。胴部は刷毛調整を施す。
28	〃	〃	〃	淡褐色	器高の低い台脚で外面に指頭痕が残るが内外面ともなで調整を施す。
29・30	〃	（甕？）	〃	〃	器高の低い台脚。下端に折り返しがみられ、内外面ともなで調整を施す。胴部内底面は指頭によって整形している。
14－1	須恵器	高　坏	Ⅶ－8	灰　色	裾部が大きく外反し、縁帯に至る。縁帯上部に凸線を1条めぐらす。
2	〃	〃	〃	青灰色	坏部はゆるやかに丸みをおびてたちあがり、口縁部は屈折して外反する。口縁部外側に稜を作り出す。脚部は大きく下方にひろがり、端部上方を突出させ縁帯をめぐらす。本品の台脚は、第1次調査のⅡ区中トレンチの住居址とみられる面から出土（杉崎ほか1977、第13図－22）したもので、接合することができた。
3	〃	坏	〃	茶褐色	体部は丸みをもつ。底面はへら削り調整を施す。胎土は砂礫を混じる。
4	〃	無台坏身	〃	黒褐色	厚手の底部に斜め上方にのびる口縁部をつける。底面はへら削りを施す。胎土は砂粒が多く混じる。
5	〃	〃	〃	〃	糸切り底で、腰部が丸味をもつ体部をなす。
6	〃	〃	〃	暗灰色	糸切り底。底部は厚く、体部は直線的に斜め上方にのびる。外面にろくろ引きのひだが目立つ。
7	〃	甑	〃	灰　色	断面円形で先端の細くなる把手を斜め上方にむけてつける。
8	〃	〃	〃	淡褐色	扁平な板状の把手をつける。
9	〃	坏　蓋	〃	黒　色	扁平な天井部に宝珠形のつまみをつける。口縁部を下方へ折り曲げる。天井部上半はへら削り。天井部に黒色の釉がかかる。
10	〃	〃	〃	〃	丸みをおびた天井部に円盤形のつまみをつける。口縁部を下方へ折り曲げる。天井部上半へら削り。
11	〃	有台坏身	〃	青灰色	器高の高いもので、体部は直線的に斜め上方にのびる。高台は外反し、断面が菱形をなす。底部はへら削り調整を施す。
12	〃	〃	〃	灰　色	同　上。

図版番号	器種	器形	出土区・層位	色調	備考
14－13	土師器	坏身	Ⅶ－8	褐色	底径が大きく、斜め上方にのびる低い体部をもち、口縁帯を作り出す。内外面とも丁寧な回転なで調整を施す。
14	須恵器	坏蓋	〃	暗灰色	天井部は平らでへら削りを施す。口縁部は端部の鋭いかえりを作り出す。
15	〃	盤	〃	黒灰色	底部はへら削り。浅く斜め上方に開く体部に丸く折り曲げた口縁帯を作り出す。高台断面は四角形をなし外反する。
16	〃	〃	〃	青灰色	体部は浅く直線的に開き、口縁部外面に稜を作り出す。高台断面は四角形で端部はシャープである。底部はへら削り。
17	〃	碗	〃	黒灰色	体部はわずかに丸みをもち、口縁部は直立気味である。断面四角形の高台をつける。底部は糸切りで直線の刻印がある。内底面に重ね焼きの痕がみられる。
18・19	土師器	甕	〃	淡褐色	口頸部は大きく外反し短い。口端上部が突出し、口縁帯を作り出す。口頸部内外面は丁寧ななで調整を施し、胴部は荒くて太い刷毛調整を施す。
20	〃	〃	〃	黒褐色	口縁部内側と胴部外側に刷毛調整を施す。口縁部のものは太い刷毛である。
21	〃	〃	〃	〃	短かく外反する口頸部を作り出す。胴部は荒い刷毛調整を施し、内面にも刷毛目がみられる。
22	〃	〃	〃	淡褐色	小型のもので、胴部に荒くて深い刷毛調整を施す。
23	〃	〃	〃	黒色	胴部に刷毛調整を施す。胎土は砂粒が多く混じる。外面に煤が付着する。
24	〃	〃	〃	灰色	頸部と胴部に荒くて深い刷毛調整を施す。
25	〃	〃	〃	淡褐色	球形の胴部に直立する口頸部をつける。口縁部内側と胴部外面は刷毛調整で、胴部内面はへら削りによって整形する。
36	灰釉陶器	碗	〃	白灰色	底部はへら削り調整を施す。高台断面は四角形。内面に灰釉を刷毛塗りによって厚く施す。
37	〃	〃	〃	灰色	底部はへら削り。三日月形の高台をつける。刷毛塗りによって灰釉を施す。
38	〃	〃	〃	〃	底部はへら削り調整を施す。三日月形の高台をつける。漬け掛けによって施釉する。
39～41	〃	皿	〃	白灰色	口端はわずかに外方に張り出す。口縁部がわずかに折り曲げられ稜をなす。底部はへら削り調整を施し、高台は外方が屈折する三日月形のものをつける。施釉は刷毛塗り。
42・43	〃	〃	〃	〃	口縁部を欠くが、他は同上。
44	〃	瓶	〃	灰色	底部はへら削り調整を施す。高台下端をシャープに作り出す。
45	〃	碗	〃	〃	体部は丸みをもち、口端は丸い。底部はへら削り調整を施し、三日月形の高台がつく。施釉は漬け掛け。
46	〃	皿	〃	白灰色	口縁端部がわずかに外反する。高台は下端の丸いものがつく。底部はへら削り。
47	〃	〃	〃	〃	底部はへら削り調整を施し、三日月形の高台がつく。施釉は刷毛塗り。

図版番号	器種	器形	出土区・層位	色調	備考
14－48	灰釉陶器	碗	Ⅶ－8	白灰色	底部はへら削り調整を施し、三日月形の高台がつく。施釉は刷毛塗り。
49	〃	〃	〃	〃	体部と高台のつけ根にえぐりを入れる。底面は糸切りのまま。
15－1	須恵器	坏身	Ⅴ－3	灰色	たちあがりはわずかに内傾し、端部は丸い。底部は丸みをもち浅く、底面はへら削りを施す。
2	〃	坏蓋	〃	〃	円盤形のつまみをつける。天井部上半はへら削り。
3	〃	〃	〃	〃	口縁部を下方へ折り曲げる。
4	〃	〃	〃	暗灰色	宝珠形のつまみをつける。天井部上半は扁平でへら削り調整を施し、下半はゆるやかに丸みをおび口縁部に至る。口縁部を下方内側にむけて折り曲げる。
5	〃	鉢	〃	褐色	扁球形の丸みのある体部に、わずかに外反する短い口縁部をつける。
6	〃	〃	〃	青灰色	へら削り調整され、ややふくらみをもった底部から、胴部が斜め上方に直立気味にのび、口縁部はわずかに内側に折り曲がり、端部は丸い。
7	〃	有台坏身	〃	暗灰色	口縁部を欠くが、器高の低いものとみられる。底部はへら削り調整を施し、断面が四角形をなす高台をつける。
8	〃	〃	〃	青灰色	体部は斜め上方にのび丸くおさまる。高台は外側に張り出し、丸みをもつ。
9	〃	無台坏身	〃	淡褐色	静止糸切り底で、腰部は丸みをもち、口縁部は斜め上方に開く。
10	〃	甑	〃	灰褐色	体部上半はわずかに丸みをもつ。口縁部に平坦面を作り出し、外側にえぐりを入れる。胴部中ほどに叩きを施し、他は丁寧な横なで調整を施す。把手欠損。
11	灰釉陶器	碗	〃	白灰色	底部はへら削り調整を施す。高台断面は三日月形をなす。
12	〃	〃	〃	〃	同上。内底面に刷毛塗りによる施釉がみられる。
13	〃	〃	Ⅶ－3	〃	高台端部が丸い。
14	〃	皿	〃	〃	底部へら削り。高台と体部の境にえぐりを入れる。
15	〃	耳皿	〃	〃	口縁部の相対する2面を内側へ強く折り曲げる。糸切底である。内底面に淡緑色の釉が厚くかかる。
18	土師器	高坏	〃	淡褐色	脚部は斜め下方に開き、裾部は円盤形をなすものとみられる。中ほどに円形の透しを1個うがつ。外面はなで、内面はへら削りを施す。
19	〃	〃	〃	〃	高坏台脚の裾部とみられる。裾部で段をなしてひろがり、端部は丸い。内外面とも丁寧ななで調整を施す。
16－1	須恵器	坏蓋	Ⅶ－2	黒灰色	扁平な天井部に直立する口縁部をつける。その境にわずかに段をなして稜を作り出す。天井部上半はへら削りを施す。口端は尖がる。
2	〃	坏身	〃	青灰色	たちあがりは内傾し、丸くおさまる。受部の端部は丸い。

図版番号	器種	器形	出土区・層位	色調	備考
16－3	須恵器	坏身	Ⅵ－2	灰褐色	たちあがりは内傾し、口縁部は屈曲して直立する。口縁部内側に沈線を1条めぐらす。受部は横に張り出し、受部下方に稜を作り出す。底部は扁平で、器高は低い。
4	〃	高坏	Ⅶ－2	灰色	坏部は直線的に斜め上方にひろがり、上方で屈折し、そこに沈線を1条めぐらし、上方は直立し、口縁部は外反して張り出す。脚部は低く、大きくひろがり縁帯に至る。
5	〃	〃	〃	青灰色	器高の低い台脚で、中ほどで段をなし稜を作り出す。
6	〃	〃	〃	黄灰色	裾部が大きくひろがり、端部を上方にわずかに突出させ、縁帯を作り出す。
7	〃	短頸壷	〃	茶褐色	扁球形の胴部に短く直立する口頸部をつける。胴部上方に沈線を2条めぐらす。下半は手持ちへら削りを施す。
8	〃	横瓶	Ⅵ－2	青灰色	俵形の胴部に、ゆるやかに外反する短い口頸部をつける。口縁部はシャープである。胴部は叩きを施し、内面はなで調整。
9	〃	盤	Ⅶ－2	灰色	把手付の大型盤。断面楕円形の把手を相対して2箇所につける。平らな底部から、斜め上方に直線的にたちあがり、口端は面を作り出す。体部下半および底面はへら削り調整を施す。
10	〃	坏蓋	〃	〃	円盤形のつまみをつける。天井部はわずかに丸みをおびる。口縁部内側にかえりをもつ。
11	〃	〃	〃	黒褐色	宝珠形のつまみをつける。天井部は丸みをもち、口縁部を下方へ折り曲げる。天井部上半へら削り。
12	〃	〃	〃	青灰色	扁平な擬宝珠形のつまみをつける。天井部はへら削り。
13	〃	〃	Ⅵ－2	黒灰色	同　上。
14	〃	甑	〃	黄白色	斜め上方にのびる棒状の把手をつける。
15	〃	坏身	Ⅶ－2	灰褐色	体部中ほどで屈曲して、たちあがり、丸くおさまる。胎土は砂粒が混じる。
16	〃	有台坏身	〃	黒色	体部は斜め上方にのびる。底部はへら削り。高台は外方に張り出し、端部内側が上がる。
17	〃	盌	Ⅵ－2	青灰色	体部はゆるやかな曲線を描いてたちあがり、口縁部が大きく開き、丸くおさまる。底部で屈折し稜をなす。
18	〃	盤	Ⅶ－2	茶褐色	体部はわずかにたちあがり、直線的にのび縁帯に至る。体部と脚部の境にえぐりを入れる。底面はへら削り。
19	〃	〃	〃	黒色	口縁部を上方に折り曲げ、縁帯を作り出す。高台は外方に張り出し、端面内側が上がる。底面は糸切りのまま。黒緑色の釉が内面全体にかかる。
20	〃	〃	〃	黒褐色	口縁部を上方に折り曲げ、縁帯を作り出す。体部はろくろ引きのひだが目立つ。高台は外方にひろがり、断面菱形をなす。
21	〃	〃	〃	黒灰色	口縁部をわずかに折り返す。体部はろくろ引きのひだが目立つ。高台は外方に張り出し、断面台形をなし、端面内側が上がる。胎土は砂粒が多く混じる。
22	〃	〃	Ⅵ－2	〃	口縁部を上方に折り曲げ、縁帯を作り出す。高台断面は四角形である。
23	〃	鉢	〃	白灰色	底面が円盤形に張り出し、胴部下方に沈線が1条めぐる。底面中央に直径3㎜の1孔をうがつ。

図版番号	器　種	器　形	出土区・層位	色　調	備　　考
16－24	須恵器	盤	Ⅶ－2	褐　色	扁平な坏部に、わずかに外方に開く高目の台脚をつける。脚部には、上下2個一対の孔を四方向に配すものとみられる。底面へら削り調整を施す。
25	〃	碗	〃	黒褐色	体部はわずかに丸みをもち、口縁部はわずかに外反する。
26	灰釉陶器	有段皿	〃	白灰色	体部内側に段を作り出し、口縁部を4箇所折り返す。高台外側下方に稜を作り出す。底面はなで調整を施す。漬け掛けによる施釉。
27	〃	碗	〃	黄灰色	体部は丸みをもち、口端は丸くおさまる。底部はへら削り調整を施す。高台外面はふくらみをもち、端部は丸い。体部と高台の境にえぐりを入れる。刷毛塗りによる施釉。
28	〃	〃	〃	白灰色	底部へら削り調整を施す。高台外面に稜を作り出す。刷毛塗りによる施釉。
29	〃	〃	〃	〃	底部へら削り調整。高台は斜め外方に張り出す。
30	土師器	広口壷	〃	褐　色	小型のもので、指頭痕ののこる扁球形の胴部に、直線的に斜め上方に長くのびる口頸部をつける。口頸部内外面は横なで調整を施す。
31	〃	甑	〃	〃	棒状の斜め上方にのびる把手。胴部へ差し込む円形の突起がある。
32	〃	〃	Ⅵ－2	黄灰色	直立気味の胴部で、口端は平坦である。口縁部内側は横なで、他は刷毛調整を施す。胎土は砂礫が混じる。

第5章　松崎貝塚出土の人骨について

京都大学・霊長類研究所　　教授　江原昭善
技官　木下　実

1　人骨の出土状況

人骨のみ届けられたもので、出土状況については第4章第2節の3によられたい。

2　人骨の保存状態

人骨の骨質保存状態は、かならずしも良好とはいえないが、収集されたものは破損・そう失しているにもかかわらず、かなりしっかりしている。

頭骨では下顎骨左半部がほぼ完全に残っており、骨質保存がよく、割面が新鮮であること、それにひきかえ、頭骨の他の部分は、本来残りやすいにもかかわらず、その骨片すら見当らない。

椎骨は破損しやすい部分であるが、胸椎（Th_3）、腰椎（L_2）のみ完全で、他は破損もしくはそう失している。

肩甲骨および寛骨などの扁平部はそう失し、関節部分が1部残っているにすぎない。

その他、手足の諸骨は、もともと保存されやすい部分であるが、小骨であるため、これらもすべてそう失。

以上総合すると、当人骨は発見・出土時から収集時までのあいだに、かなり破損・そう失したと考えざるを得ない。

3　人骨同定

すでに述べたように、当人骨はかなり散逸的であるが、重複部分がないこと、性別が一定していること、年令的に大きなくい違いがないことなどから、同一個体とみなしてよいであろう。つまり一体分の人骨である。

4　性・年令について

下顎骨では、I_1　I_2 は脱落そう失しているが、C　P_3　P_4　M_1　M_2　M_3 がそのまま残存している。すでにM_3（俗に親知らず）は完全に萠出し、かすかに咬耗がみられることから、すでに思春期後に多少の年月を経過したものと考えられる。

右鎖骨の胸鎖関節部では、まだ軟骨部が残存していたらしいが、その他の骨の部分は、すでに壮

年期に近かったことがうかがえる。

腰椎（L_2）、寛骨臼などには少量の石灰沈着がみとめられる。

鎖骨・肩峰・長管骨の筋付着部の発達などから、ほぼ男性とみなしてさしつかえない。

以上総合すると、「思春期を２～３年経過した男性」ということになろう。

5　人骨の特徴と時代決定（図版37）

頭骨では、残念ながら下顎骨左半部が残存しているのみである。

歯列弓に乱れはなく、第３大臼歯は歯列弓上にある。歯牙の咬耗はあまりつよくないが、鋏状咬合だったことを示す。齲歯は見当らない。

下顎骨下縁の形態は、Keiter Ⅲ型で古墳時代から江戸時代にかけて、とくに多いタイプである（５０％以上）。

切歯部上面観は、Keiter Ⅲ型で、とくに古墳（５８.８％）、鎌倉期（６４.５％）に多い特徴である。

下顎角はSchultz Ⅲ型に属し、このタイプは室町時代でもっとも多い（６２.５％）。

下顎枝後縁はSchultz Ⅱ型で、各時代で５０％以上を占めるが、とくに古墳～室町期は７０％以上においてみられるタイプである。

頤三角の形状はSchultz Ⅴ型で、古墳（５２.９％）・鎌倉期（５１.０％）に多くみられる特徴である。

下顎前内面部ではFovea incisivaがやや発達して、Torus transversus superior、（上横行隆起）の上縁部に少し入り込んでいるが、Torus 自体は左右連続しているものと思われる。以上の特徴からみれば、この下顎骨は縄文時代と現代を除外して考えてよい。

下顎枝は相対的にかなり大きく（枝高６２㎜、枝幅４２㎜）、これに匹敵する時代群としては古墳時代がこれに該当する。

躯幹・四肢骨については、保存不良のため十分に形態学的吟味に耐えることができないが、肩甲骨の肩峰部、鎖骨などの発達はよく、男性的であることを示しているが、とくに左右の発達度がいちじるしく違っていることは特筆に値しよう。つまり、右側の発達がつよく、単に右利きというだけでなく、かなり右手を多く使用したものと考えられる。

なお、右上腕骨の遠位・近位両端が破損しておらず、最大長２７８㎜、これを基に身長を推定すると１５７６.９±４２.５㎜となる。

以上総合すると、考古学的知見とも照合して、奈良時代の２５才前後の男性と考えても、矛盾しないといえよう。

第6章　松崎貝塚出土鉄塊分析結果

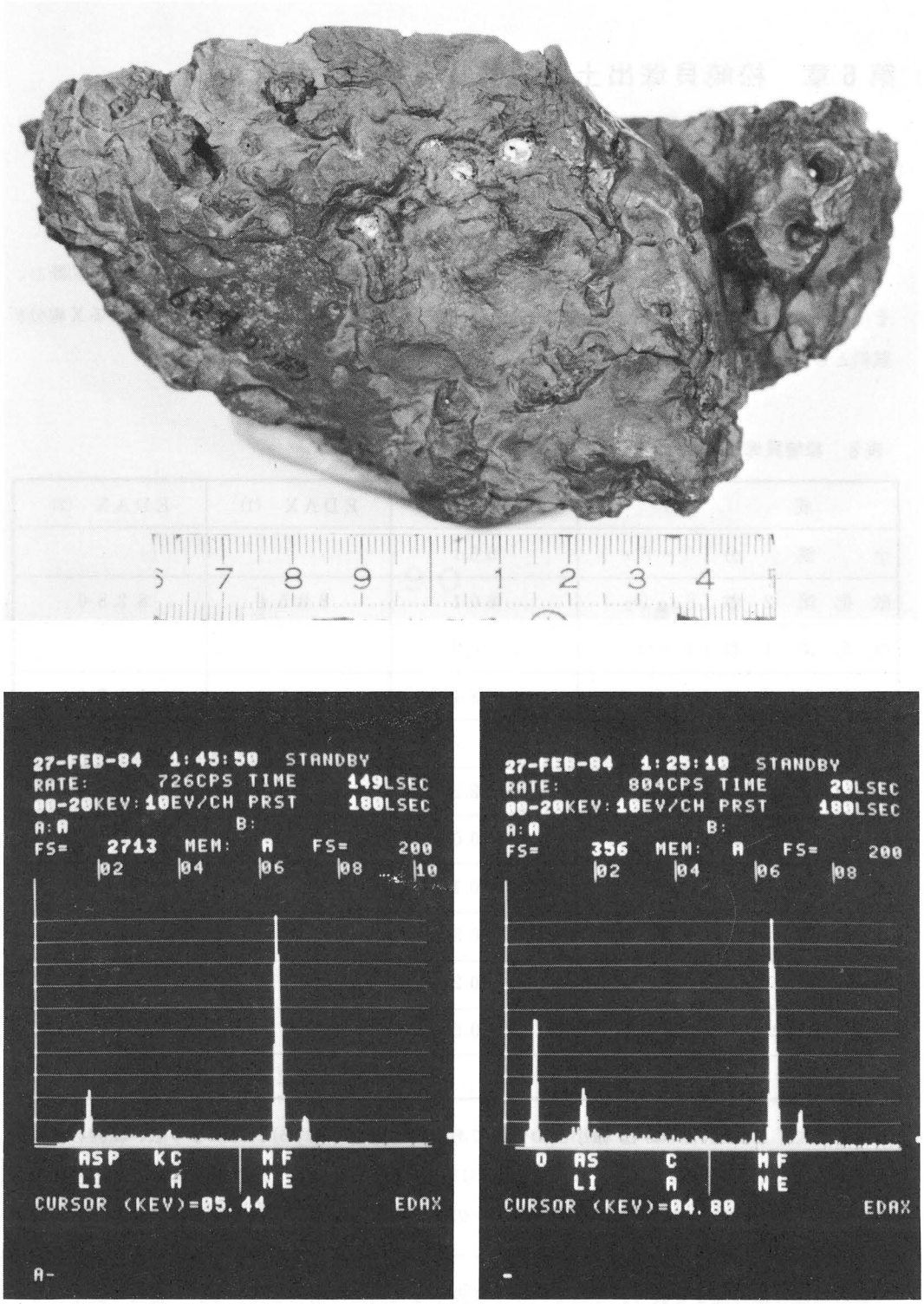
新日本製鐵株式会社　中央研究本部　名古屋技術研究部

東海市大田町所在の松崎貝塚より出土した鉄塊のうちⅥ区北貝層よりの塊（挿図8）を切断し、その一部を粉砕して化学分析に供し、他の一部を樹脂に埋め込み研磨してEDAXによるX線分析試料とした。結果は、次表の通りである。

表8　松崎貝塚鉄塊の化学組成

成　　分	化学分析結果	EDAX (1)	EDAX (2)
全　鉄　分（T－Fe）	56.1		
酸化第2鉄（Fe_2O_3）	80.1	80.54	82.80
酸化第1鉄（FeO）	0.3		
二酸化珪素（SiO_2）	8.4	12.72	11.86
酸化アルミニウム（Al_2O_3）		3.20	2.76
二酸化マンガン（MnO_2）	2.2	1.98	1.53
硫　黄（S）	0.008		
二酸化チタン（TiO_2）	－0.1		
燐　（P）	0.33		
酸化カルシウム（CaO）	0.2	0.87	0.48
酸化マグネシウム（MgO）	0.5		
カリウム（K）		0.28	0.26

ここで、EDAX(1) (2) は微小部の分析であるのに対し、化学分析はかなり広い範囲の平均的な値とみることが出来るが、この三者の値がほぼ一致していることは鉄塊全体がこの程度の成分といえる。古代の鉄は砂鉄起原と考えチタンの検出を試みたが、何れも検出されなかった。参考として挿図8にEDAXの特性X線チャートを添付する。このチャートのピークは、含有元素の特性X線の強さを表し、それぞれの下に表示した元素に相当している。一番右の表示のないピークはFeの$K-\beta$線であり、主要な元素は上の表でほぼ網羅されている。



挿図８　松崎貝塚Ⅵ区北貝層出土鉄塊およびＥＤＡＸ特性Ｘ線チャート

第７章　松崎貝塚の調査を終えて

1　松崎製塩遺跡

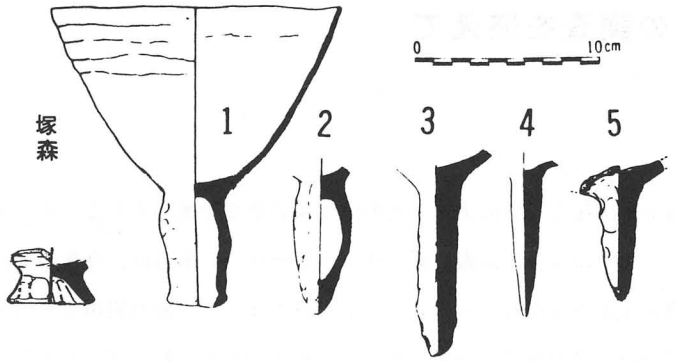
本報告書は東海市教育委員会が昭和５１年に実施した松崎貝塚の第２次報告である。その年の７・８月の調査については、すでに昭和５２年に報告書（注１）が刊行してあるが、今次の報告は昭和５１年の年末に発掘した第２次調査の報告である。そして本書には、その後の昭和５６年９月に発見された東海市名和の塚森遺跡の資料報告も併載したが、それも合わせて総括することにしたい。

昭和５１年の冬の調査は、遺跡のある松崎砂堆の内陸側について設定された発掘区でおこなわれ、この点、報告者が指摘しているように、砂堆の外側にあたる海岸側について実施した昭和５１年夏の発掘にくらべ、調査についての所見は対象的である。すなわち夏の調査が生産の主体であった製塩の生産関係の領域に対する調査であったのに対し、冬の調査は、その後背地である生活関係の部分の調査である。

今次の調査においては、３区の調査区を設けた。第１次調査の４区につづきⅤ・Ⅵ・Ⅶの各区とそれぞれ名づけている。そしてⅥ区から１基とⅦ区から３基と、報告者は４基の炉址を検出したといっており、とくにⅥ区でみとめられた炉址からは、平面プランのくぼんだ部分には焼土もみられ、その中央に上面が平らで側面が面取りされた泥岩製の棒が立てられて、下半部は砂中に埋めこまれたままであった。そして棒の上面あたりに胴部の長い土師質の甕が一個体みうけられたいといっている。この炉址は周囲を高く側壁でかこまれているが、あるいは天井部も構築された可能性もある。用途について報告者は「煮炊き用のかまど」としながらも、第１次調査において検出され宮川芳照・立松彰の報告に対して杉崎も総括の中で、堅塩（かたじお）生産の炉址と推定した遺構との類似面を幾つか指摘しており、Ⅶ区で検出された３基の炉址についても同様の可能性をのこしている。

こうした報告者の謙虚な考え方を評価しながらも、杉崎は泥岩製の支柱棒とともに胴が目立って長い土師器の甕を伴出していることから、やはり堅塩生産のための炉址と推定したい。口径２０㎝前後に対して器高３５㎝もある薄手の土師質容器で、これこそ粗塩（あらじお）をつめて前述したように天井を架けた炉で焼くことにより、いわゆる延喜式大膳の調の品にみられて知多郡東浦町生路に地名をのこす生道（いくじ）塩が、大甕のような形で粉状に突きほぐすと一斗ほどになるといっているごとく、こうした堅塩を焼くための容器であろうとしているものである。粗塩を生産する炉址とはやや場所を異にして、精製塩を焼く炉が築かれたものであろう。

2　製塩の炉址と土器

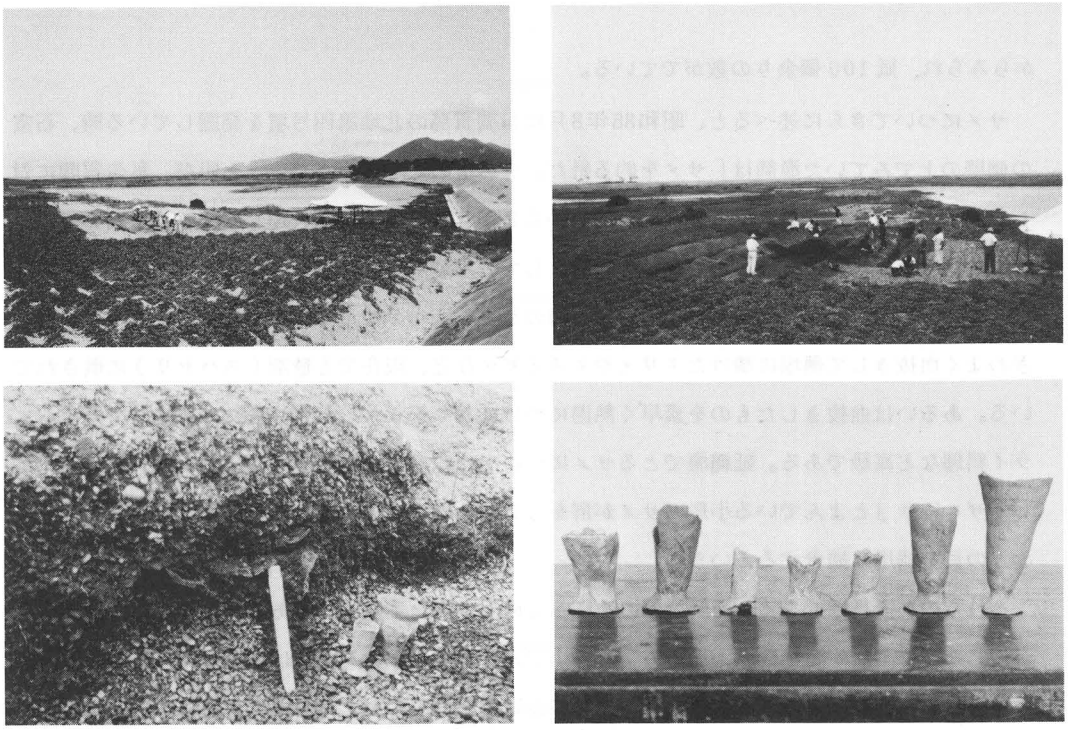


塚森 ― 塚森様式
1 ― 第1様式
2 ― 第2様式
3 ― 第3様式
4 ― 第4様式
5 ― 第5様式

挿図9　知多式製塩土器の変遷

一般的な粗塩生産については、第1次調査において、Ⅱ区から5基、Ⅲ区から1基、Ⅳ区から1基と計7基の炉址を検出して報告しており、とくにⅣ区では炉址の焚口の横と考えられる部分に、丸太材をくり抜き石膏質のもので内面を塗り、濃縮塩水をいれるための鹹水溜と推定し、水槽と推定して学界へ紹介した。

そして粗塩用の製塩土器については、知多式の第1～第5様式にわけて報告したが、上につく鉢形の坏部はそれ程の変化はないが、脚部の器形に変遷がある。第1様式の脚台は袋形あるいは筒形をしているが、第2様式になると脚台の先端をとじて中空の角形（つのがた）とし、第3様式は第2様式と外形は似ているが内部の充実した脚台である。そして第4様式になると小形となり表面も整えられているものが多い。最も新しい第5様式は粗製で太い第3様式の脚台をそのまま小形にした形であり、この第5様式の様式は松崎貝塚の第1次調査の成果として新しく追加した様式で、平安時代の灰釉陶器と伴出したものである。ところで本書に付載として報告した塚森遺跡は、ほとんど工事で出土した資料を採集したような形であるが、製塩土器は3様式にわかれ、第3・第4様式のそれとともに最も数の多いものは、本書において塚森式と仮称した古式のもので、知多式製塩土器の第1様式の直前に比定する様式である。これに類した例としては松崎貝塚の第1次調査で1区で3例出土し、今次の調査でも5～6個の出土例があり、渥美様式類似としているものであるが、２０個をこえる量がかたまって出土したことははじめてである。報告者は瀬戸内海の喜兵衛島南東浜遺跡のそれに類似したものとのべているが、それほど遠くにもとめなくても古く芳賀陽が発掘（注２）し、昭和41年に杉崎と久永春男・斉藤嘉彦が日本考古学協会生産技術特別委員製塩部会の事業として調査した渥美郡渥美町伊川津の青山貝塚（注３）から出土した渥美式土器のＡ類に比定すべきもので、この程度の器形変化は、同じ知多半島の他の様式の土器においてもみられる。例えば知多式製塩土器の第1様式においても松崎貝塚のそれと南知多町内海でみられるものとの間には大きな差異がみ



挿図10　渥美町青山貝塚　上段・調査状況，下段左・出土状況，
下段右・渥美式製塩土器　（両側4個はA類，中央3個はB類）

とめられる。これら知多式製塩土器の6様式については、第1様式に先行する塚森様式は5世紀終末から6世紀初頭に、そして第1様式のつかれた年代は6世紀前・中葉に比定しており、第2様式は過渡的な様式であるが、第3様式については6世紀後葉から7世紀代にもとめている。第4様式については8～9世紀、第5様式は10～11 世紀の年代が与えられている。

昭和38年8月の平城宮址第13次調査のおりに、「尾張国智多郡贄代郷朝倉里戸主和尓部色夫智調塩三斗天平元年」、「尾張国智多郡番賀郷花井里丸部龍麻呂・調塩三斗神亀四年十月七日」などの木簡が発見されたのである。朝倉里は知多市朝倉であるが、花井里の土地はいまだ不詳である。しかし番賀郷であり、製塩の土地となると、知多市寺本から北で東海市名和にいたる海浜地域であり、本書の図版1に紹介されている諸遺跡の中の1地点であり、松崎貝塚の位置もその大きな候補地である。

3　海浜集落の生活

生産址として紹介している中で、以上は製塩関係を強調したのであるが、同じく海についての生産の中で漁撈についてのべると、塚森遺跡からも釣針が出土しているが、松崎貝塚の第1次調査においては、われわれが日間賀島の古墳の調査で北地第四・第五号墳の副葬品の中から検出したサメ釣針の遺存状態よりもよい好例が出土している。銛の他にも、大小の土錘のごときはほとんどの層

からみられ、延100個余りの数がでている。

サメについてさらに述べると、昭和35年8月に日間賀島の北地第四号墳を発掘している時、石室の側壁の上でみていた漁師は「サメを釣る針だ。今のものとそっくりだ。」と叫び、私の質問に対し「イイダコを餌にする。」と答えた。それから3年すぎた昭和38年に遠くはなれた奈良の平城宮址において、篠島・佐久島海部が毎月の御贄として佐米楚割を貢納しているという木簡が発見されてきたのである。サメは種類が多く普通は一種の異臭をもつのであるが、臭いのは皮と血であり手ぎわよく血抜きして薄塩に漬けたスザメやネズミザメなど、現在でも楚割(スハヤリ)に供されている。あるいは血抜きしたものを素早く熱湯につけて薬味をきかした醤油または酢味噌でたべるアライ料理など高級である。延縄漁でとるサメについては志摩半島付近で最近まで「猫の手」とか「サザエワリ」とよんでいる小形のサメが群をなしており、このサメは俗名のようにサザエ・ニシなどの貝を器用に捕食するという。

これらの漁撈具はもちろん海浜集落の地域から検出された生産民具であるが、次第に生活の臭みがにじんでくる。生活の場所も海のみでなく山であり畑であり、あるいは家庭の中の副業でもあるのである。こうしたものにも意外と鉄製道具が良好な形でのこっており、まず鉄鏃があって狩猟道具である。一般的にみるシカ・イノシシのほかにも馬・犬・鳥・亀の骨がみられる。さらに鋤先があるが農具である。知多半島では近世・近代の海浜集落にあっても専業の漁業の家は割りと少く、半農半漁が圧倒的であったが、古代の製塩集落においても相当の農仕事を兼ねたものであろう。つぎは紡錘車であるが、これは織物道具であり婦人の仕事である。綿を栽培しワタクリで実を区別し、糸車に紡錘車をつけて糸をつむいでいき、やがてハタゴにのせていく一連の仕事が連想できるのである。ここで注目されるのはフイゴの口(くち)が2個もタタラ塊をともなって検出されていることである。釣針・銛・鉄鏃・鋤先・紡錘車と紹介してきた鉄製道具は自家製の道具であろうか。それを磨くための砥石もみられる。

さらに馬具として紹介した鉄製の鉸具がある。馬具の革帯をとめる鈎でバンドのバックルのようなものである。刀子もあって鹿角装である。装飾品としては滑石製の勾玉もみられる。

そして最後になってしまったが正真正銘の生活道具は土器であり、古墳時代から奈良時代の土師器・須恵器から、平安時代の灰釉陶器まである。中でも1片であるが緑釉陶器もふくまれている。

4　海浜集落と万葉集

松崎貝塚を代表とし東海市名和にいたる奈良時代の海浜集落を紹介した資料に万葉集の歌がある。巻七の雑歌の中の羈旅作としてあげられた「あゆち潟潮干にけらし知多の浦に朝こぐ舟も沖による見ゆ」(1163)の1首で、東海市高横須賀町の諏訪神社の奥まったところに万葉仮名で刻まれた石

碑があり、碑の裏には「文化十五歳春吉田定興建并書」とある。この歌のよまれた場所を具体的にきめる資料はないが、すでに150年の前の建立であることも特筆される。この歌「羈旅にて作れる」とあるから知多地方の人ではない旅行者がよんだものであるが、この道をはじめて通る人ではなく、あゆち潟がここからは展望できないことも知っており、満潮のおりには岸近く舟が進み、干潮のおりは沖の方を通ることも承知の、土地感とか道筋の地理にも明るい人の作である。恐らくは三河方面からやってきて東海市高横須賀町に1泊し、朝早く次の旅に立つ人の心をとらえた知多の浦の朝景色といえよう。旅人が目ざしているのは北の方、あゆち潟の方向である。万葉時代に知多の浦とよばれた今の東海市の海岸には、本書に報告者のいうように東海市名和の一番畑・長光寺・塚森おなじく大田町の松崎・下浜田とつづいている。そして松崎貝塚をすぎて間もなく今も加家という地名があるが、古代の加家はさらに南方へのびて大田町や高横須賀町まで及んでいたと考証されており、もう一つの万葉集巻十七の東歌の中にある相聞の歌「味鴨の可家の湊にいる潮のこてたずくもか入りて寝まくも」(3553)がある。

旅人があゆち潟さして歩いていった浜辺の道筋にそって、海の男が海上はるか沖合で働きながら、港に待っている妻の肌を思いえがいた海浜集落の労働や生活の具体的な内容を物語るものが、ここに紹介した出土資料である。

(杉崎　章)

注

1　杉崎章・立松彰・磯部幸男・宮川芳照・山下勝年・石川玉紀『松崎貝塚』東海市教育委員会・昭和52年

2　芳賀陽「青山貝塚－渥美半島における古代漁村の土器－」古代学研究20所収・昭和44年

3　久永春男・杉崎章「愛知県渥美町青山貝塚」日本考古学年報19所収・昭和46年

付載　塚森遺跡

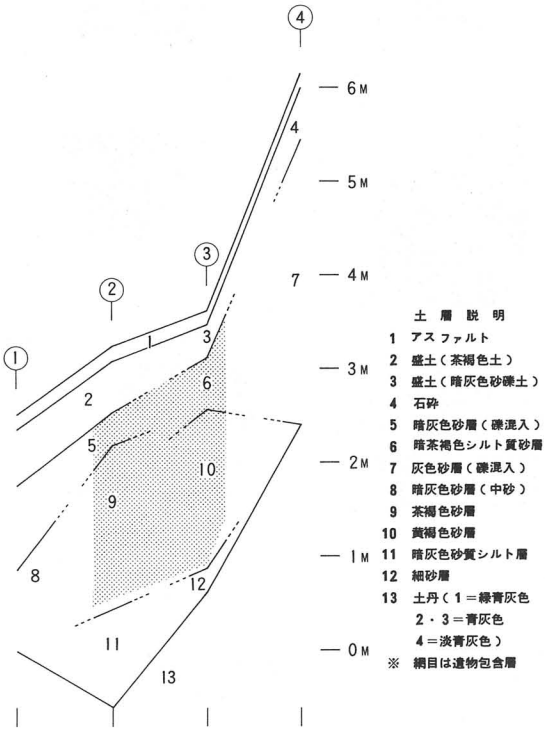
Ⅰ はじめに

塚森遺跡は、愛知県東海市名和町塚森一帯に所在する。この地域は、知多半島の伊勢湾に面する基部にあたり、松崎貝塚から丘陵地をはさんで北東に約3㎞離れた一帯に開けた海岸平地である。遺跡は、松崎貝塚同様に砂堆上に立地している。

本遺跡の存在は明確ではなかったが、付近にある長光寺や妙法寺には製塩土器が散布しており、また、約100㎞東方には堂ノ前貝塚〔吉田　1972〕があることから注意されていた〔池田 1973〕。

昭和56年9月から塚森地区内の道路下に排水暗渠(あんきょ)設置工事（注1）が行われることになり、市教育委員会の担当課が立ち会った。当該地区は、砂上の緩い地盤上に家屋が密集し、道路幅もせまく、家屋倒壊等の危険を防ぐため、トレンチシールド工法がとられた。そのため、遺物包含層検出後も、土層の観察と機械の方向転換溝（図版18－A地点）および水道バルブ取付溝（図版18－B地点）の部分しか調査出来なかった。

ここに掲げる遺物の一部は、当時の市文化財調査委員池田陸介氏、市立緑陽小学校教諭加古兼敬氏および同校児童から排土内採集品としてとどけられたものである。また、危険な作業のなか、工事請負業者の磯部組の献身的な協力を得ることができた。ここに厚く感謝の意を表したい。



挿図11　塚森遺跡土層模式図

Ⅱ 遺　跡

本遺跡は標高3㎞前後の砂堆東縁にあり、さらに、東に水田をはさんで堂ノ前貝塚が立地する。この貝塚の東部は丘陵地である。

遺物包含層の範囲は遺物出土区域からみて図版18に示すように約150㎞にわたる。遺跡の層序は、挿図11（注2）に示したとおりである。工事に伴う掘削の深さは約2.6㎞であり、遺物は標高2㎞～2.5㎞に堆積する暗茶褐色シルト質砂層（6層）、茶褐色砂層（9層）、黄褐色砂層（10層）から混在して出土し、遺構は検出し得なかった。この他、水道バルブ取付溝の西端に、「塚森式」と仮称する製塩土器の混在する破砕貝層を検出した。

Ⅲ 遺　物

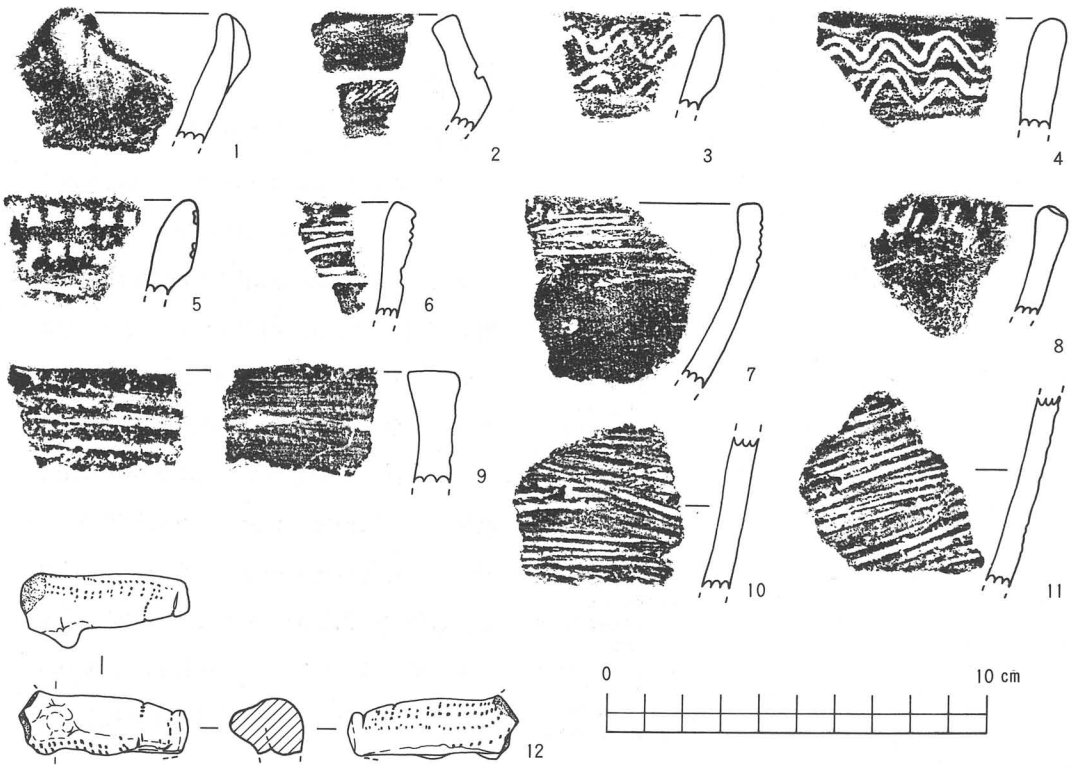
遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓷器系中世陶器（行基焼）・貝殻等があり、総数は整理箱に10箱ほどである。以下、各遺物の特徴について述べる。

1　人工遺物

(1)　縄文土器と土偶（挿図12、図版40）

1は波状口縁の深鉢とみられ、無文で波頭部には外側からの押え込みがある。2は口縁が内折する深鉢とみられ、内折した外面の沈線下に縄文を施す。3・4は肥厚した口縁に半截竹管で波文を描く。5は肥厚した口縁に半截竹管による押引文を施す。6は半截竹管による二条の平行線間に同じく弧線を描くものとみられる。7は口縁がやや屈折し、鋭利な条痕様の沈線を施す。8は口端に半截竹管による押文をめぐらす。9～11は条痕を施し、9は幅太の粗い条痕である。

縄文土器とみられるものはこの他に4片あり、合わせて15片である。これらのものは、おおまかにみて、縄文時代後期と晩期のものに類別される。うち2は西北出遺跡出土土器〔大参　1978〕に類似する。3～6は晩期中葉のいわゆる本刈谷式の特長をもつものである。



挿図12　塚森遺跡縄文土器拓影および土偶

土偶は、乳房とみられる突起部からみて左腕と考えられる破片である。腕の下半は剥離している。先端に突起を作り出し、そこのくびれた部分と肩寄りに縦の刺突文列を2条めぐらす。刺突文列は、この他に横の列が、前面の乳房の下に2条、背面の肩から腕の先端に4条認められる。色調は、外面が、淡褐色で、内部は暗灰色である。黄褐色砂層（挿図11 － 10層）から出土した。時期は特定し得ない。

(2) 弥生土器（図版19・22・41）

a 第1群土器

(ア) 壷形土器（図版19－1・2、図版22－2～10）

図版（以下同じ）19－1は頸部がくびれ、最大径を胴部下半にもち、先の極く細かい櫛歯状器具による横線、波状文および押引文をめぐらす。波状文の下方に部分的に丹塗りされたような痕跡がある。19－2は内外面とも刷毛となでによって調整する。口縁部上端にへら状器具による刺突を加えた凸帯をめぐらす。頸部には櫛描横線をめぐらす。22－2は口端上部に刺突を加え、頸部には19－1と同様の器具による横線と斜めのはね上げをめぐらす。22－3は刷毛目調整ののち櫛描横線をめぐらし、その上に縦線を加えて区画し、その間に斜めの沈線のある貼付文を置き、横線間をへら磨きする。22－4は貼付文がないほかは、先の3と全く同様の施文である。22－5・6はへら状器具によって斜格子を描き、6には櫛描きの縦と横の線を施す。22－7はへら状器具による山形の文様が縦に連なる。22－8は斜めの細かい刷毛目調整の上に、へら描きの磨消による横線をめぐらす。また、細い棒状器具による押引文を加え、この下半は丹塗りである。22－9・10は8同様に刷毛目調整の上に磨消の細い横線をめぐらす。

(イ) 甕形土器（図版22－1・11・12）

1はアナダラ属の貝殻腹縁によるとみられる条痕を外面に施し、口縁内側に押引文をめぐらす。11は内外面とも刷毛目調整され、口端と口縁内側上方にアナダラ属の貝殻腹縁によるとみられる圧痕をめぐらす。12は口端が断面三角形に面取りされ、内側の面に貝殻腹縁による押引文をめぐらし、頸部には斜めの条痕を施す。

(ウ) 無頸壷（図版22－13・14）

13は半截竹管状器具による横と縦の沈線を施す。14は口端寄りから下へむかって、棒状器具による波状線・横線、櫛描きの交互に方向の異なる斜線、半截竹管状器具による横と縦の沈線をめぐらす。

b 第2群土器

(ア) 壷形土器（図版22－15～22）

15は櫛歯状器具による斜めの刺突文帯をめぐらす。16～18は櫛描横線と波状文をめぐらす。19

はなで調整ののち2条1組の沈線をめぐらす。20は幅の太い櫛歯状器具による横線と波状文をめぐらす。21は2条1組とみられる粗雑な波状文を施す。22は縦の刷毛目調整の上に幅太の波状文をめぐらし、内面は溝の深い刷毛目調整を施す。

(イ) 高坏形土器（図版22－23）

口縁部が直立気味の器形をなすもので、口端外側に櫛歯状器具による刺突を施し、口縁部外面に6条の沈線をめぐらす。

c 第3群土器

壷形土器（図版22－24・25）

24はなで調整ののち櫛描横線とその間に板状器具による斜めの刺突文をめぐらす。25は刷毛目調整ののち磨消様の幅太の横線と鋸歯文をめぐらす。

d 第4群土器

(ア) 壷形土器（図版19－3～6、図版22－26～32）

19－3は口縁部が受口状をなし、口端に平坦面を作り出す。全面へら磨き調整を施す。19－4は口頸部が長く、口縁部がわずかに湾曲する。内外面とも丁寧なへら磨きを施す。19－5は扁球形の胴部でやや上げ底である。外面はへら磨きを施し、内面はへら削りとなでによって調整する。19－6はA地点の黄褐色砂層（挿図11－10層）の標高2.1 *m*地点から出土した。球形の胴部に斜め上方に直線的に開く口頸部をつけ、やや上げ底である。全面へら磨きを施す。胴部内面は上半が指頭となで、下半がへら削りによる調整を施す。22－26・27は19－4と同器形をなす。26はへらによる浅い沈線と連弧文をめぐらし、27は右上がりのギザギザの斜線とその下に6条の浅い沈線をめぐらす。22－28は口縁部を欠損する。内面に板状の施文具による羽状の刺突文をめぐらし、その下半の屈折した面に丹塗りを施す。22－29・30は同一個体と考えられる。29は口端が上方へわずかに突出し、口縁帯を作り出す。口縁帯には幅2.5 *mm*の刷毛原体によるとみられる羽状の刺突文をめぐらす。内面はへら磨きを施す。30は櫛描きの横線および波状の連弧文と板状の刷毛原体を用いた斜めの刺突文をめぐらし、施文部位下方は丁寧なへら磨きを施す。内面はなで調整を施す。22－31は荒い刷毛目調整の上に浅い櫛描横線をめぐらし、その間に刷毛原体による一辺2個刺突からなる山形文をめぐらし、この刺突上を丹塗りする。22－32は円形の刺突文をめぐらし、その下方を丹塗りする。

(イ) 高坏形土器（図版19－7～11）

7はへら磨き調整を施し、脚部の坏部と接する部分に櫛描横線をめぐらし、円形の透し孔を3個つける。8は裾部が内湾してのび、下端は平坦面を作り出す。外面はへら磨き、内面はへら削りと刷毛目調整を施す。円形の透し孔を3個つける。9は坏部下底部のたちあがりの稜が不明確な器形

で、脚部には浅い櫛描横線をめぐらす。全面へら磨きを施し、台脚に円形の透し孔を3個つける。10・11は台脚裾部が内湾する器形をなすものと考えられる。10はへら磨き、11はなで調整を施し、ともに円形の透し孔を3個つける。

(ウ) 甕形土器（図版19－12～17、図版22－33～36）

19－12は口縁部がわずかに屈曲して「S」字状に近い形をなし、口端は平坦面を作り出す。口頸部は横なで、胴部外面は刷毛目・内面は指頭によるなで調整を施す。19－13は口縁部が受口状に直立してのび、この部分は横なで、他は刷毛目調整で、胴部内面は幅の太い刷毛目である。19－14は口頸部が大きく外方に開き、口端に竹管状器具による圧痕をめぐらす。内外面ともなで調整を施す。19－15～17は台脚で、外面は刷毛目、内外は15がなで、17がへら削り調整を施す。22－33・34は口縁部が受口状に直立し、口端は平坦面を作り出す。33の屈曲部には櫛歯状器具による斜めの刺突を施す。22－35・36は口径が大きな器形で、口端に刺突文をめぐらし、内外面とも横なで調整を施す。

e　まとめ

第1群土器は貝田町式に属するものと考える。このうち22－1が他よりも古い様相を示している。そして、19－1、22－2・5～7・14は獅子懸式の、22－8～10は外土居式の特徴をもっている。第2群土器は小片の出土例がみられるのみであるが高蔵式に属するものと考える。第3群土器はわずかではあるが、山中式に属するものと考える。第4群土器は、当地方においては弥生後期後葉に位置づけられる欠山式に属するものと考える。

(3) 土師器（図版20～22）

a　古墳時代前期の土器（図版20－1～29、図版22－37）

1～7は壷形土器。1～3は丹塗り（図版の網目部分）の土器。1は口縁帯を作り出し、2条の浅い沈線をめぐらす。口縁部内側上方に溝の浅い櫛歯状器具（刷毛原体ともみられる）による羽状文をめぐらす。2も1と同様の部位に同器具による斜め同方向の刺突文を3条めぐらす。3の底面には木の葉痕がある。4は口端がわずかに張り出して口縁帯を作り出し、へら磨きを施す。頸部は刷毛目の上にへら磨きを施す。5は4の底部と考えられ、底面がへら削りでふくらみをもつ。外面は刷毛目とへら削きによって調整する。6は斜め上方に直線的にのびる口頸部で、口端は尖がる。内外面とも横なで調整を施す。7は口縁部が丸みをもって受口状をなし、内外面ともなで調整を施す。

8・9・11～13・22・25～28は高坏形土器。8は坏部が皿状をなして浅く、台脚はゆるやかな曲線を描いて外方へ開く。坏部および脚部外面はへら磨きを施し、脚部内面は細かい刷毛目による調整を施す。台脚に円形の透し孔を3個つける。胎土は砂粒が多く混じる。9も8と同様である。11・12は台脚の中ほどで屈曲して裾部が外反する器形をなすものである。11は坏部のたちあがりの稜が明確である。全面へら磨きで、脚部内面のみへら削りである。12は全面なで調整を施す。

ともに台脚に円形の透し孔を3個つける。13は坏部の下底部が横にのび、稜をなして屈折してたあがる器形で、大きな径の直線的に外方に開く台脚をつける。内外面ともへら削りと刷毛目整形ののちなで調整を施す。22・25～28は台脚上半が円筒状で、裾部が大きく横へ屈曲して円盤形をなす器形である。いずれもへら削りののちなで調整を施す。

10・23は器台形土器。10は受皿部を欠損する。受皿部と台脚の接する部分に孔があく。台脚は直線的に大きく開く。受皿部の内面はへら磨き、他はなで調整を施す。23は小型の受皿部をつけ、内外面ともへら磨きを施す。ともに、円形の透し孔を3個つける。

14～17・29・22－37は甕形土器。14は口縁部が「S」字形をなす。口縁部は丁寧な横なでを施し、頸部内面には荒い刷毛目が認められる。口縁部の屈曲して外方へ張り出す部分に連弧の沈線をめぐらす。15は胴部が球形をなす器形と考えられる。口縁部内外面は横なで、胴部外面は細かい刷毛目、内面はへら削り調整を施す。口端の平坦面に刷毛原体とみられる器具による刺突文をめぐらす。16・17は台脚で16は内外面とも刷毛目調整を施す。17は外面を刷毛目、内面をへら削り調整する。29は器壁が剥落し調整具合は不明。22－37は口端に平坦面を作り出し、丁寧ななで調整を施す。

18・21は小型の手づくね土器である。18は口頸部を欠くが壷形をなすものとみられる。21は鉢形をなす。

19・20は鉢形土器と考えられる。ともに底部が張り出し、やや上げ底である。底部のくびれた部分に指頭痕が残り、内面はへら削り調整を施す。

24は甑形土器。底部に一孔を作り出す。外面は刷毛目ののちなで調整し、内面は横のへら磨きを施す。

以上のうち、20－1・6・15～20は茶褐色砂層(挿図11－9層)の同一レベルから一括して出土した。

これらの型式については、20－1～20までのものが、先の弥生土器につづくいわゆる元屋敷式〔大参　1968〕の特徴をもつものと考える。そして、20－23の器台形土器が石塚式に22－21・22・24～29のものが荒新切式に比定できうると考える。

b　奈良・平安時代の土器(図版21－1～13、図版22－38・39)

1～10と24－13・14は甕形土器。1は口縁部が屈折して外反する。口縁部は横なでで、頸部内面には横の刷毛調整を施す。胴部外面は櫛状器具によるとみられる深く鋭い条痕様の斜めの調整を施す。2は口縁部がやや肥厚して横に突出する。口縁部は丁寧な横なでで、胴部外面は深い刷毛目がみられる。3は頸部がわずかにくびれ、口縁部は斜めに直に開く。口縁部内外面と胴部内面はなで調整、胴部外面は幅太の刷毛調整を施す。4・5は口縁部内側がわずかに屈折して稜を作り出し、内外面とも丁寧な横なでを施す。6～9は口頸部が「く」字形に屈曲し、薄手で、長胴形をな

すものと考えられる。胴部外面は荒い刷毛によって、内面はへら削りとなでによって調整する。6は口縁部の内外面とも横なで、7～9は口縁部内面に横の刷毛を施し、8と9には指頭の痕が残る。10はこれらのものの底部と考えられ、刷毛によって調整している。22－39は粗雑な作りで、成形時の粘土紐の痕が残る。外面に荒い刷毛調整を施し、口縁部内面は細かい刷毛によって調整している。22－38は頸部がわずかにくびれ、ややふくらみをもった口縁部がつく。胴部外面には平行の叩きを施し、内面はへら削りを施す。

11はにぎりはなしの作りの土棒である。製塩土器によく似た色調の変化が認められる。把手かもしれない。

12は把手付の壷形土器。頸部内外面は横なで、胴部外面は刷毛を施す。

13は鉢形をなすものと考えられる。薄手の土器で、口端は尖った素縁である。外面上半は粘土紐と掌の痕が残り、下半は方向を異にする刷毛を施す。内面上半はへら削りによって平滑な面を作り出している。

以上のうち、12の壷形土器は器形からみてこの期よりは古く位置づけられ古墳時代後期のうちに入るものかもしれない。4・5・10の甕形土器は後述する須恵器のうち23－9・10の坏蓋・23－14・16の無台坏身・23－17の有台坏身・23－20の盤・23－21の鉢とともにA地点（図版18参照）の暗褐色シルト質砂層（挿図11－6層）下層で黄褐色砂層の直上あたりから一括して検出したものである。これらの須恵器の編年からみて、8世紀後半から9世紀初頭の時期が求められる。

(4) 須恵器（図版23－1～24、図版24－1～4、42）

23－1は高坏。脚部が垂直り下り、裾部で水平気味に広がり、段を作り出して下端にいたり、下端は鋭い。縦長の長方形の透しを3個つけるものとみられる。

23－2・5は坏身。2は口径が大きく、立ちあがりも長い。底部下半はへら削りを施す。5は立ちあがりがわずかに内頃し、端部は丸みをもつ。受部は横にのび、受部下方が屈折して稜をなす。

23－3・4は坏蓋。3は天井部はやや丸みをもち上半はへら削りを施す。口縁部との境に稜を作り出し、口縁部は垂直にのびる。4は天井部はやや丸みをもち上半は雑多な方向からなるへら削りを施す。口縁部との境に断面三角形の稜を作り出し、口縁部はわずかに外開きにのび、端部に平坦面をもつ。

23－6～8は甕。6は沈線間に櫛状器具による波状文を描く。7は口頸部が大きく外に開き、斜めの口縁帯を作り出す。口頸部内外面および胴部内面は横なで、胴部外面は叩きの上に指による磨消し状の沈線を施す。8は胴部下半の破片で、叩きののち、それと交差する方向に刷毛調整を施す部分がある。

23－9～13は　蓋。すべて擬宝珠様のつまみをもち、天井部上半に回転へら削り調整を施す。9

は天井部が直線的に下り、口縁部は断面が三角形状に肥厚させる。10～12 は天井部下方がゆるやかにやや横にのび、口縁部を下方に折り曲げて形作る。13は天井部が丸みをもち、口縁部はやや長めに折り曲げる。

23－14～16は無台坏身。すべて回転糸切り底である。23－17・18・22は有台坏身。ともに底面はへら削りによって調整する。17の高台はやや外方に開く。18の高台は垂直につき、下端面は内外両方向からへら削りによって面取りを施す。22は坏部が垂直に立ちあがり深い。

23－19・20・24は盤。19は外縁がゆるやかに屈折して斜め外方に開き、口縁部は丸みをもつ。20は短かく直上する外縁をもち、端部は外方に屈折している。外底面はへら削り調整を施す。24は外反する高めの高台をもち、下端部はへら削りを施す。

23－21は鉢。直行する口頸部をもち、肩がやや張った体部をもつ。口縁部に丸味をもった凸帯を有し、端部は面取りを施す。底面は糸切り底で「－」形の刻印を記す。

23－23は短頸壷。外反する口頸部をもち、口端は面取りを施し、肩の張った体部をもつ。

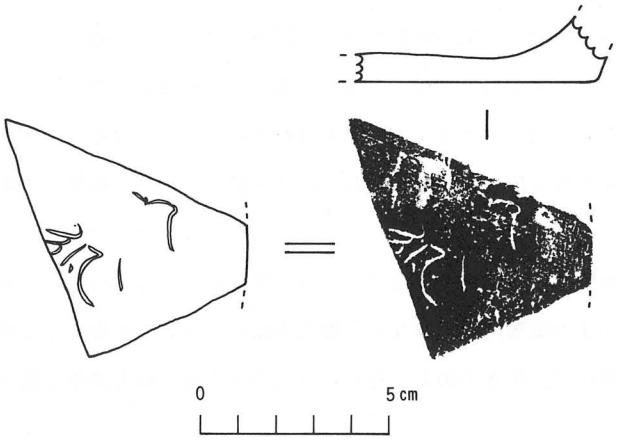
24－1は浅鉢とみられる。口縁部がゆるやかに屈曲して外反し、口縁帯を作り出し、口端が突出する。体部下方に稜をもつ。

24－2・3は甑。ともに下端に凸帯をもつ。2は凸帯中ほどに底面があり、内面はへら削りを施す。3は凸帯底面中央に沈線がめぐる。

24－4は壷か甕の胴部片で、格子状の叩きを施す。

この他、挿図13に示す文字の刻まれた須恵器片がある。この器形は盤とみられる。底面はへら削りされている。刻まれた文字については判読できない。

以上のうち、23－9・10の坏蓋・23－14・16の無台坏身・23－17の有台坏身・23－20の盤・23－21の鉢はA地点（図版18参照）の暗褐色シルト質砂層（挿図11－6層）下層の黄褐色砂層の直上あたりから一括して出土したものである。また、23－22の有台坏身はB地点（図版18参照）から出土した。



挿図13　塚森遺跡須恵器の文字

猿投窯編年からそれぞれの時期についてみてみる。本遺跡で最も古く位置づけられるものとして23－7の甕があげられる。この甕は

尾張旭市の城山第２・３号窯〔七原ほか　1978〕出土のものに類似する。５世紀後半のうちに含められるものであろう。23－1高坏と23－5の坏身は東山50号窯式に比定できよう。23－2の坏身および23－3・4の坏蓋は器形からみて前記のものより古く位置づけられ、６世紀後半のうちにその時期を求めることができるものと考える。先述したA地点一括出土のものは折戸10号窯式に比定できよう。また、24－1の浅鉢および24－2・3の甑は黒笹90号窯式に比定できよう。

この他、盤とみられる底部片に文字をへらで刻んだ破片（挿図13）がある。二文字残るが判読できない。

(5)　灰釉陶器（図版24－5～10、42）

24－5は蓋。擬宝珠様のつまみをつける口径の小さいものである。天井部上半はへら削り調整し、灰釉を施す。

24－6・7は皿。６は口端が外方にやや突出し、体部下半と底面はへら削り調整を施し、高台は内面下端に内湾がみられない三日月高台のものである。灰釉は漬け掛けである。７は底面がなで調整され内底面には直接の重ね焼きの痕跡が残る。

24－8～10は碗。８は底面がなで調整され、三日月高台をつける。内底面に直接の重ね焼きの痕跡が残る。９は断面三角形の高台をつけ、漬け掛けによる施釉である。10は底面が糸切りのままで、断面三角形の高台をつける。

24－5の蓋は黒笹90号窯式に、24－6・7の皿および24－8の碗は折戸53号窯式に、24－9の碗は百代寺窯式に比定できよう。

(6)　瓷器系中世陶器（行基焼）（図版24－10～24）

24－10～16は碗。10～13の胎土は砂粒が多く混じるものの均質精良である。ともに底面は糸切りのままで、断面が押しひずみ台形を呈する高台がつく。12の高台端部にはもみがらの圧痕が付着する。14～16の胎土は砂礫を多く混じえ、作りも粗雑である。底面は糸切りのままで、低い高台がつき、その端部にはもみがらの圧痕が全面に深くくい込んで付着する。

24－17～21は小皿。17は高台をつけ、他は無台で糸切りのままである。胎土は14～16の碗と同様である。

24－22は短頸壷。胎土は11～13の碗と同様である。体部からゆるやかな曲線を描いて、短い口頸部が直行し、口端は丸い。

24－23は甕。口端を「N」字形に折り返し幅3.6㎝の縁帯を作り出す。

24－24は三筋壷。胴部に２条１組の整った筋をめぐらす。

これらは常滑窯の編年〔杉崎　1981〕からみて、前述した灰釉陶器に引き続く時期から第３型式前期までのものが少量ながら散在して認められる。

(7) 製塩土器（図版25、43）

製塩土器が出土しているものの、出土量はわずかであり、かつ、砂層中に散在しており、製塩の場からの流れ込みかと考えられる。このうち、知多半島ではいままで類例をみない「塚森式」と仮称する一群の製塩土器が出土した。

a 塚森式（図版25－1～21）

杯を逆さにしたような形態の台脚をつけ、深鉢形をなすとみられる坏部の外面を叩きによって調整した土器である。当初、B地点の破砕貝層から数個まとまって検出したが、他の区域からも出土をみた。一個体がまとまっては出土しておらず、台脚部と坏部の細片が散在して出土した。B地点出土の遺物を主にした全遺物整理の結果、図示した坏部については、細片ではあるが他に考慮しうる器形の土器がなく、伴出した台脚と同一個体をなすものと判断した。

この器形および調整をもつ土器は、香川県喜兵衛島・南東浜遺跡出土の製塩土器〔近藤 1978〕に類似する。土器自体は、細片で、二次的な加熱をうけて色調が部分的に変化し、剥離化も認められる。このような特徴をもつことから製塩土器と考える。

土器の特徴についてみてみる。坏部の上半部分の厚みは2～3㎜で、2㎜に近いものが多い。口端は平坦に作られ、なでおよびへら磨き様の調整を施す。外面は平行叩きで、内面は丁寧に平滑に仕上げられ、口縁部に横の擦痕が認められる。内底面はへら削りとなでによって調整されている。台脚は底径3.3～4.9㎝（平均値4.1㎝）、内底面から下端までの高さ1.3～2.1㎝（平均値1.8㎝）である。台脚の坏部と接するくびれた部分に指頭の痕がよく残り、他はなで調整を施す。下端面はおおむね平坦で、砂導圧痕の付着したものが多い。色調は、坏部が主に白色を基調とし、黒色、灰色、黄色、褐色味がかる。台脚は淡褐色を基調とし、白色、褐色、紅色、灰色、黒色といった色あいの部分的な変化がみられる。胎土は砂粒が混じる。

b 知多半島製塩土器3類（図版25－22～28）

やや太目で、にぎりはなしの作りの棒脚をつけるものである。坏部は円錐形状の深鉢形をなす。坏部の口縁部は尖がり気味の素縁で圧痕を加えるもの（22）もある。外面は指紋および掌の痕が残り、内面はなでやへら削りによって丁寧に平滑に仕上げられている。脚部はにぎりはなしのままで、中実である。胎土は砂粒が多く混じる。色調は淡褐色を基調とし、黒色、灰色、黄色、褐色、白色の色あいによって部分的に変化する。

c 知多半島製塩土器4類（図版25－29～44）

3類よりも小型で、脚部に丁寧ななで調整を施すものである。坏部は口縁が尖がり気味の素縁で、外面には指紋や掌の痕が残る。内面はへら削りとなで調整によって丁寧に平滑に仕上げている。口縁部が肥厚し、口端に平坦面を作り出すもの（35・36）もある。色調は前述した3類と同様であるが灰色っぽいものが多い。胎土は砂粒が混じるものの3類ほどではない。

(8) 土錘（図版21－14～24）

すべて素焼きの土師質のものである。形態として紡錘形・管形・球形がみられる。重量をみると、紡錘形の14＝20.2 g・15＝19.9 g・17＝（10.5 g）・21＝（6.5 g）・22＝（4.2 g）・23＝（2.8 g）・24＝（0.7 g）、管形の16＝17.4 g・18＝（19.0 g）、地形の19＝31.2 g・20＝29.1 gを量る。

伴出遺物が明確ではなく、時期を限定し得ないが、茶褐色砂層（挿図11－9層）および暗茶褐色シルト質砂層（挿図11－6層）から出土しており、おおむね、奈良時代から平安時代に用いられたものであろう。

(9) 鉄製品（図版22－40、40）

断面が円形で曲線をもつ鉄製品がある。形態からみて釣針と考えられる。

(10) 石器（図版21－25～31、44）

21－25・26は叩き石と考えられる。26の長辺方向の一端（図の下方にあたる面）には打痕が明瞭に残る。ともに石英斑岩製である。

21－27～29は砥石。27・28は全面が使用されている。29は実に細かく使用された面が残る。29は両平面のみ使用されている。27・28は硬砂岩、29は砂岩製である。

21－30・31は用途不明。30は耳のような形をなし、湾曲する幅太の面がすられたようにみられる。石英粗面岩（流紋岩）製。31は周囲が盛り上がって残っている。硬砂岩製。

伴出遺物が明確ではなく、時期は特定し得ない。

(11) 瓦類（図版22－41～44）

22－41・42は丸瓦。41は凹面に約1.2 mm間隔の布目、凸面は縄叩きののちなで調整を施し、端面はへら削りされている。42は厚み1.1 cmで凹面は約1.7 mm間隔の布目、凸面は縄叩きののち、へら削り・なで調整を施すものがある。

22－43・44は平瓦。43は厚み2.4 cmで凹面に約1.5 mm間隔の布目と模骨痕が残り、凸面は縄叩きと指紋が残る。端部はへら削りされている。44は厚み1.4 cmで凹面に1.5 mm間隔の布目、凸面に縄叩きと指紋が残る。端部はへら削り。平瓦はこの他、厚み1.3 mm・1.7 mm・2.3 mm・2.6 mm・2.7 mmの先のものと同様な作りの破片がある。

丸瓦・平瓦とも色調は薄い灰色を基調とし白色ないし黄白色に部分的に変化する。胎土は砂粒が混じるものの均質精良である。瓦当がなく時期は特定し得ない。

(12) 近世陶器類（図版24－25～27）

小瓶（25）は胴部下半と底面、高台をへら削りによって整形している。白色透明の釉がかかり、さらに肩部には濃緑色の釉がかかる。地は淡黄色。托（26）は底面がへら削り整形され、全面にくすんだ飴色不透明の釉がかかる。地は黒色。皿（27）は底部がへら削り整形され、高台をつける。灰釉がかかり、内底面に絵が描かれているが破片のため全容は不明。地は灰色。

2 自然遺物

(1)　貝類（図版44）

本遺跡から出土した貝類には次のものがある。二枚貝類では、ハマグリ・マガキ・イタボガキ・サルボウガイ・ハイガイ・シオフキガイ・アサリ・オキシジミ・カガミガイ・マテガイ・オオノガイ・カゲロウガイがある。腹足類では、ウミニナ・イボウミニナ・ツメタガイ・アカニシ・フトヘナタリガイがある。

(2)　獣骨類（図版41）

鹿角をはじめとして鹿の骨が多く出土している。この他、魚骨、鳥骨、海亀の甲らなどもある。詳細については今後検討を加えたい。

(3)　B地点破砕貝層の自然遺物

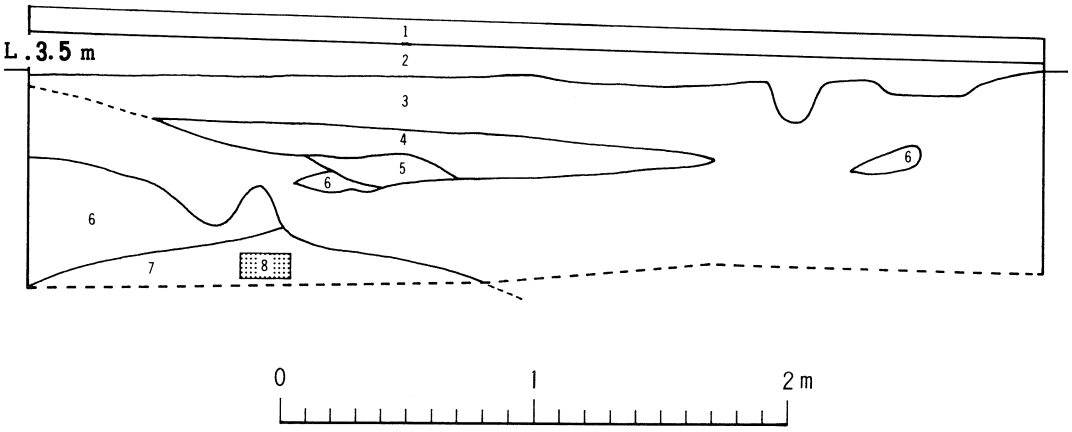
B地点の破砕貝層において、挿図14－8の場所においてブロック・サンプリング（縦20 *cm*・横20 *cm*・深さ10 *cm*）を試みた。

a　貝類

表9に示すとおりである。二枚貝類の個体数については、殻の合せ目の数を二分して得た。

b　貝殻以外の動物遺体

同定作業をしていないので、詳細については今後の検討にゆだねる。概略を述べると、獣骨はわ



土層説明

1　アスファルト
2　盛土（暗灰色砂礫層）
3　暗褐色シルト質砂層
4　黒色シルト質砂層
5　灰色土層
6　灰色土ブロック混入暗褐色シルト質砂層
7　破砕貝層
8　ブロック・サンプリング箇所（20 cm×20 cm×10 cm）

挿図14　塚森遺跡B地点（北壁）土層図

ずかで鹿や鳥などがある。魚骨が多く、微細な脊椎骨をはじめとして、小骨、歯、鱗などがある。

c　人工遺物等

「塚森式」と仮称する製塩土器の細片を多量に検出した。この他、小さな丸い軽石が3個ある。

表9　塚森遺跡B地点破砕貝層の貝類組成

種名 ＼ 数値		個体数	%
二枚貝類	ハマグリ	30	33.33
	サルボウガイ	3	3.33
	オキシジミ	2	2.22
	ハイガイ	1	1.11
	シオフキガイ	1	1.11
	カガミガイ	1	1.11
	オオノガイ	1	1.11
	小計	39	43.32
腹足類	イボウミニナ	29	32.22
	ウミニナ	8	8.89
	アカニシ	8	8.89
	ヘトフナタリガイ	5	5.56
	ツメタガイ	1	1.11
	小計	51	56.67
計		90	99.99

注

1　工事区間は、図版18に示すところの1から2・3を経て4に至る道路内である。

2　本図は、図版18に示す1～4地点のボーリング調査による土質柱状図と工事時の土層観察によって作成したものである。

引用参考文献

池田陸介（1973）東海市名和町の遺跡 ― 一部隣接地名古屋市緑区大高町の遺跡も含めて ―。文化財調査委員報告書、1～9頁。愛知、東海市教育委員会。

大参義一（1968）弥生式土器から土師器へ ― 東海地方西部の場合 ―。名古屋大学文学部研究論集XLⅦ、65～98頁。

大参義一（1978）東海地方西部における縄文時代後期前半期の土器について。名古屋大学文学部研究論集LXXⅣ、147～167頁。

荻野繁春（1981）7・8世紀の須恵器編年 ― 美濃国・尾張国 ―。老洞古窯跡群発掘調査報告書、80～105頁。岐阜市教育委員会。

近藤義郎（1965）知多・渥美地方における製塩土器の研究。日本塩業の研究第8集、35～71頁。東京、日本塩業研究会。

近藤義郎（1976）土器製塩と焼き塩。考古学研究第22巻第3号、85～91頁。岡山、考古学研究会。

近藤義郎（1978）香川県喜兵衛島・南東浜遺跡Ⅰ。日本塩業大系編集委員会編、日本塩業大系史料編考古、図19。東京。

斎藤孝正（1982）猿投窯における灰釉陶の展開。考古学ジャーナル№211、47～52頁。東京、ニューサイエンス社。

斎藤孝正（1983）猿投窯成立期の様相。名古屋大学文学部研究論集史学29、169～203頁。

杉崎　章（1956）知多半島における古代海浜集落の土器。古代学研究15・16合併、20～25頁。大阪、古代学研究会。

杉崎　章（1971）松崎貝塚。愛知県東海市柳が坪遺跡付載、32～34頁。東海市教育委員会。

杉崎　章（1981）常滑古窯製品の編年。常滑市文化財報告第10集・常滑市高坂古窯址群、52～54頁。愛知、常滑市教育委員会。

杉崎　章・磯部幸男・宮川芳照・山下勝年ほか（1977）愛知県東海市松崎貝塚発掘調査報告。愛知、東海市教育委員会。

杉崎　章・磯部幸男・山下勝年・中野晴久ほか（1982）知多市八幡細見遺跡・知多市文化財報告第18集。愛知・知多市教育委員会。

七原恵史・内山昭二・仙田作吉・木村哲雄ほか（1978）城山古窯址。尾張旭市の古窯。愛知、尾張旭市教育委員会。

楢崎彰一（1959）後期古墳時代の諸段階。名古屋大学文学部十周年記念論集、499～534頁。

楢崎彰一・斎藤孝正（1983）猿投窯の編年について。愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅲ（尾北地区・三河地区）、62～73頁。愛知県教育委員会。

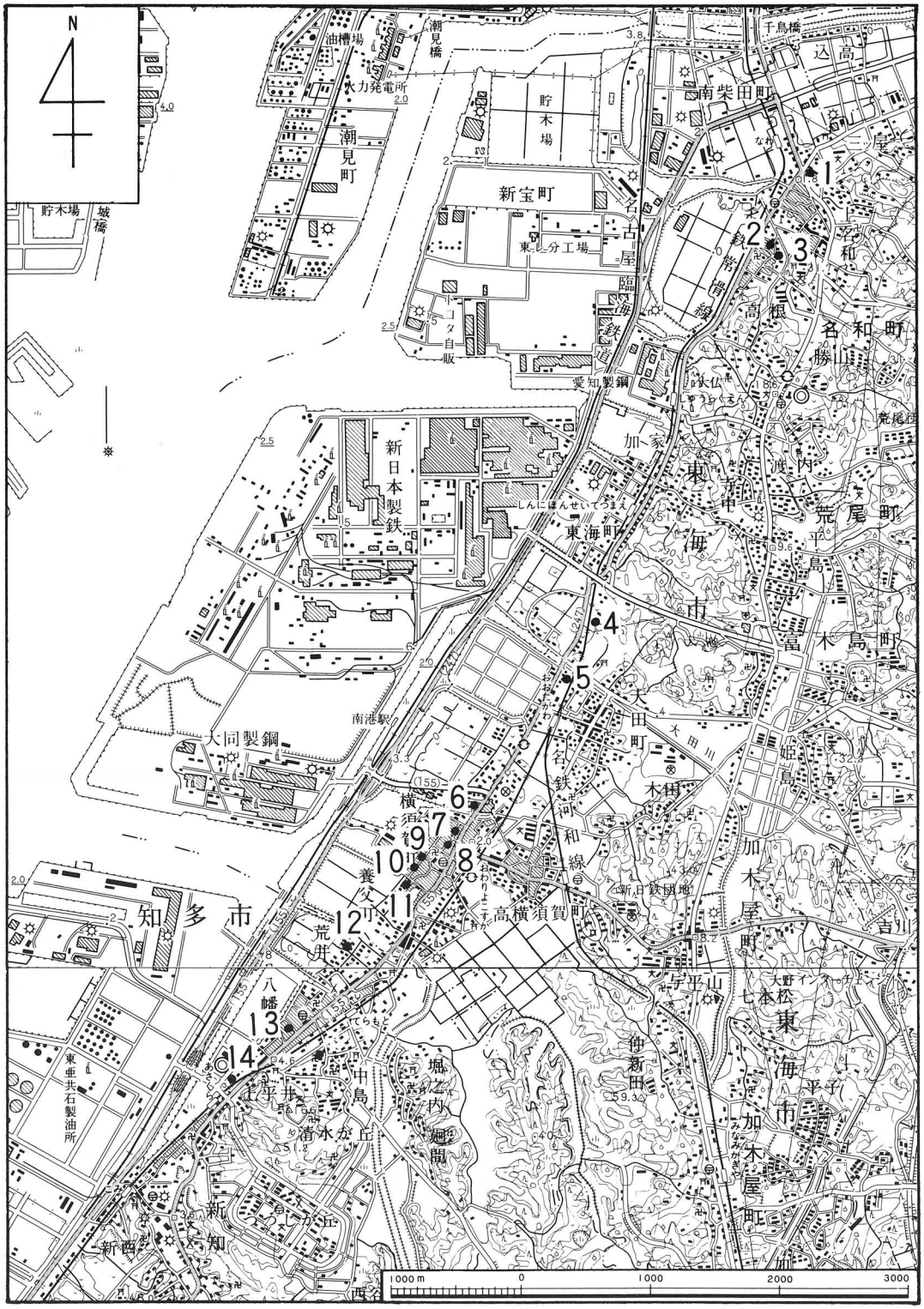
芳賀　陽（1959）青山貝塚 ― 渥美半島における古代漁村の土器 ―。古代学研究第20号、44～52頁。大阪、古代学研究会。

早川信三・池田陸介・長谷川昭二（1978）東海市名和町一番畑遺跡。文化財調査委員報告第5集、36～40頁。愛知、東海市教育委員会。

久永春男・杉崎　章（1971）愛知県渥美町青山貝塚。日本考古学年報19。

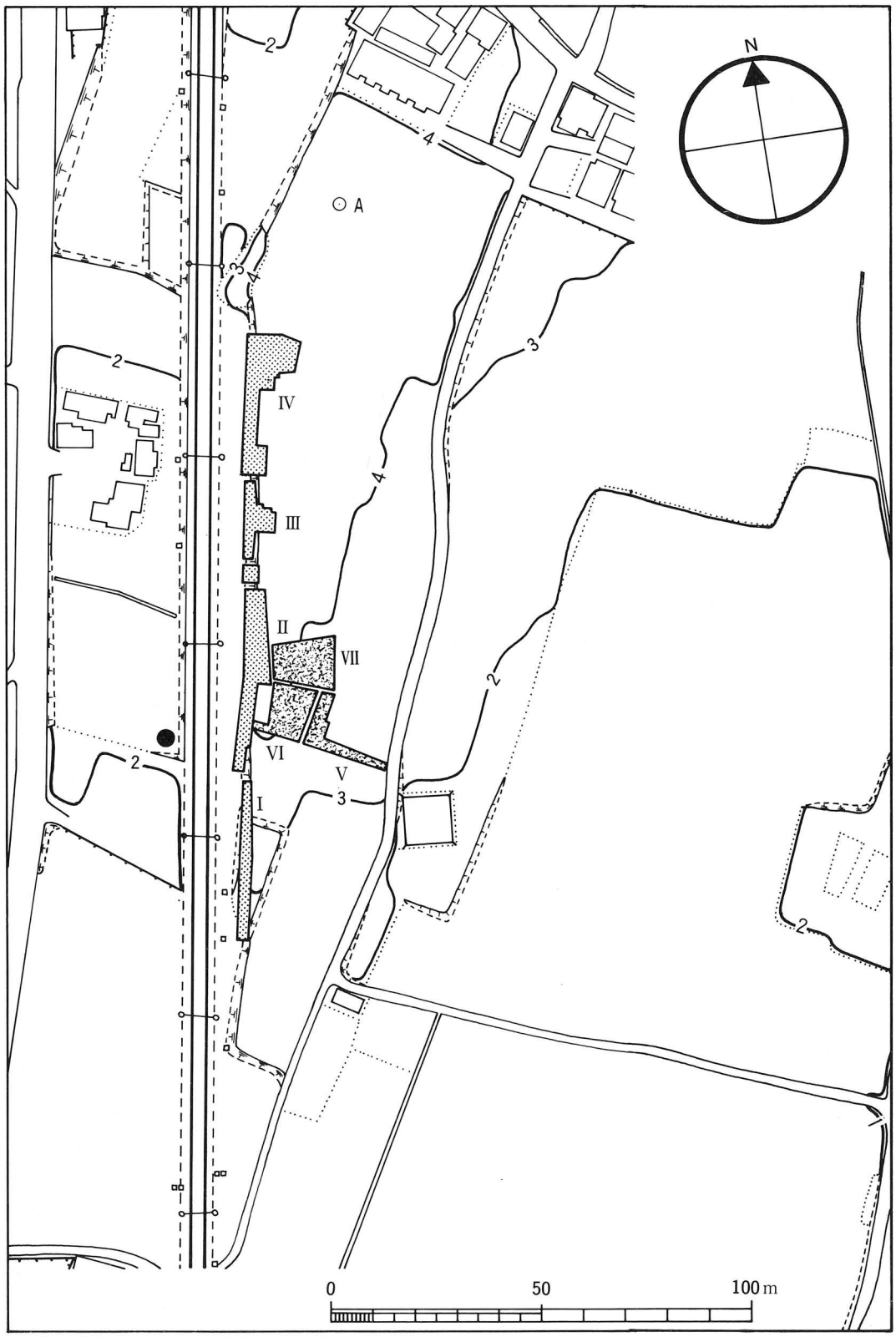
吉田富夫（1972）東海市名和町堂ノ前貝塚発掘調査報告。愛知、東海市教育委員会。

図　　版

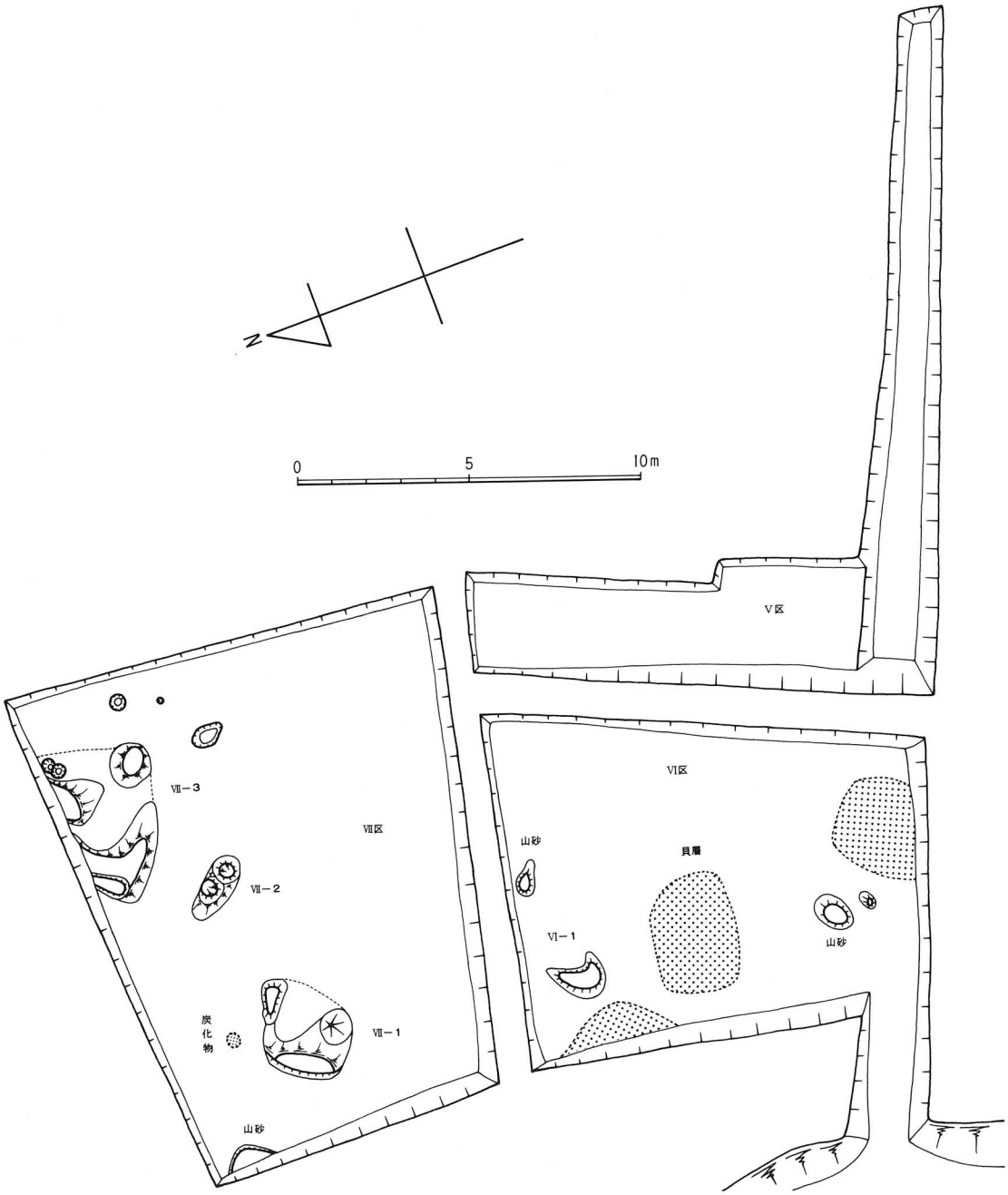


松崎貝塚周辺の製塩遺跡

図版 2

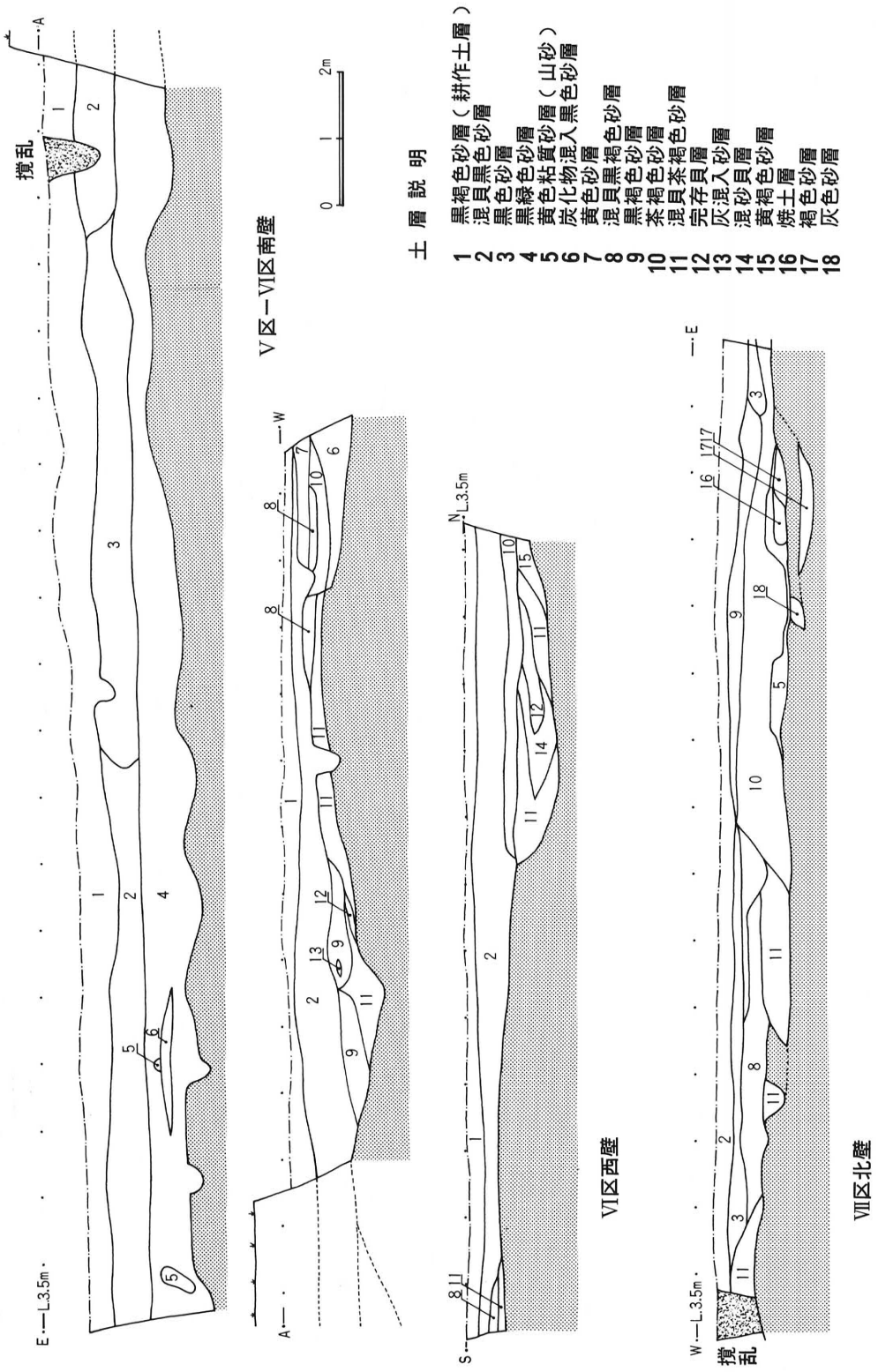


松崎貝塚調査区域図

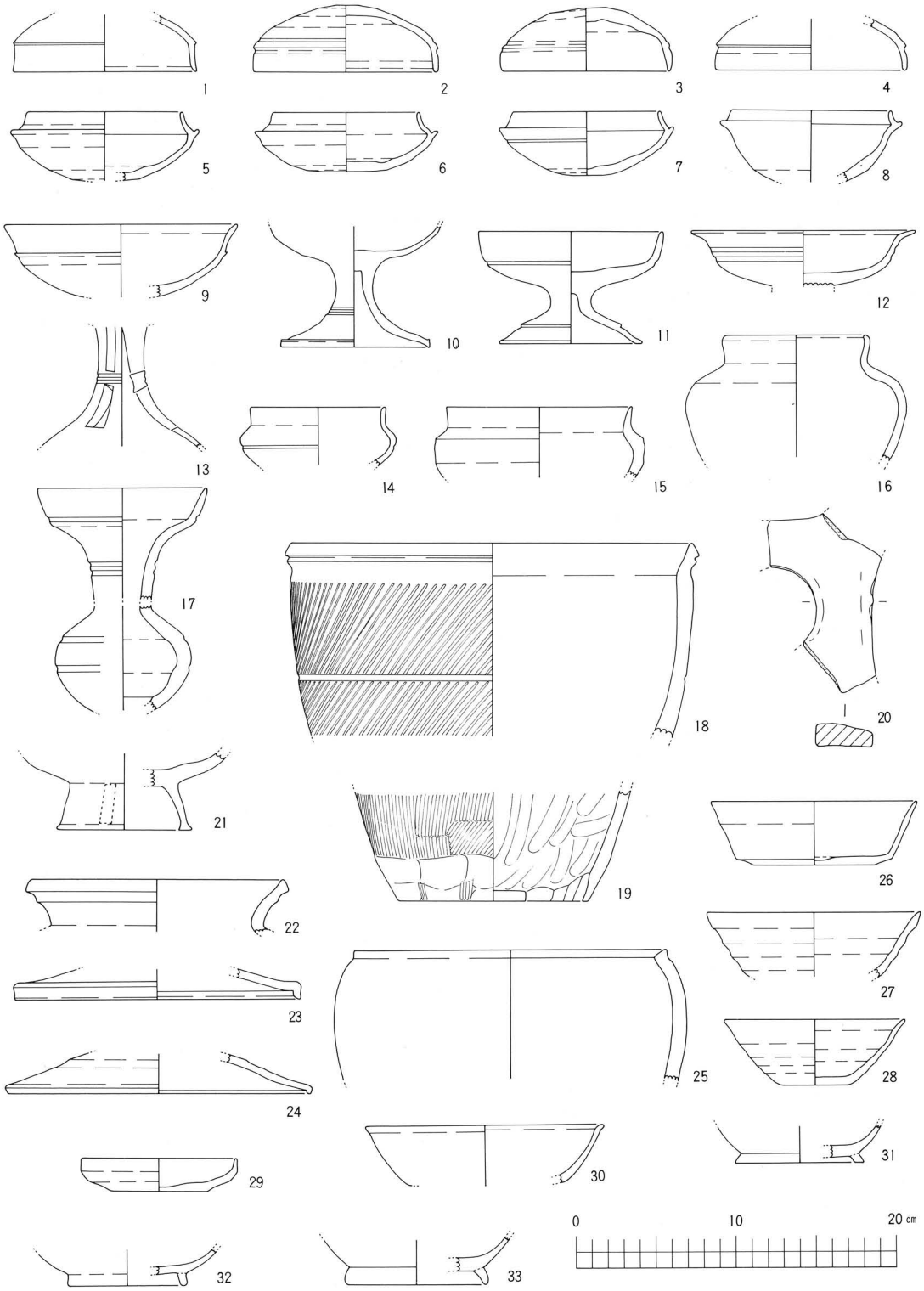


松崎貝塚発掘調査区および遺構配置図

図版 4

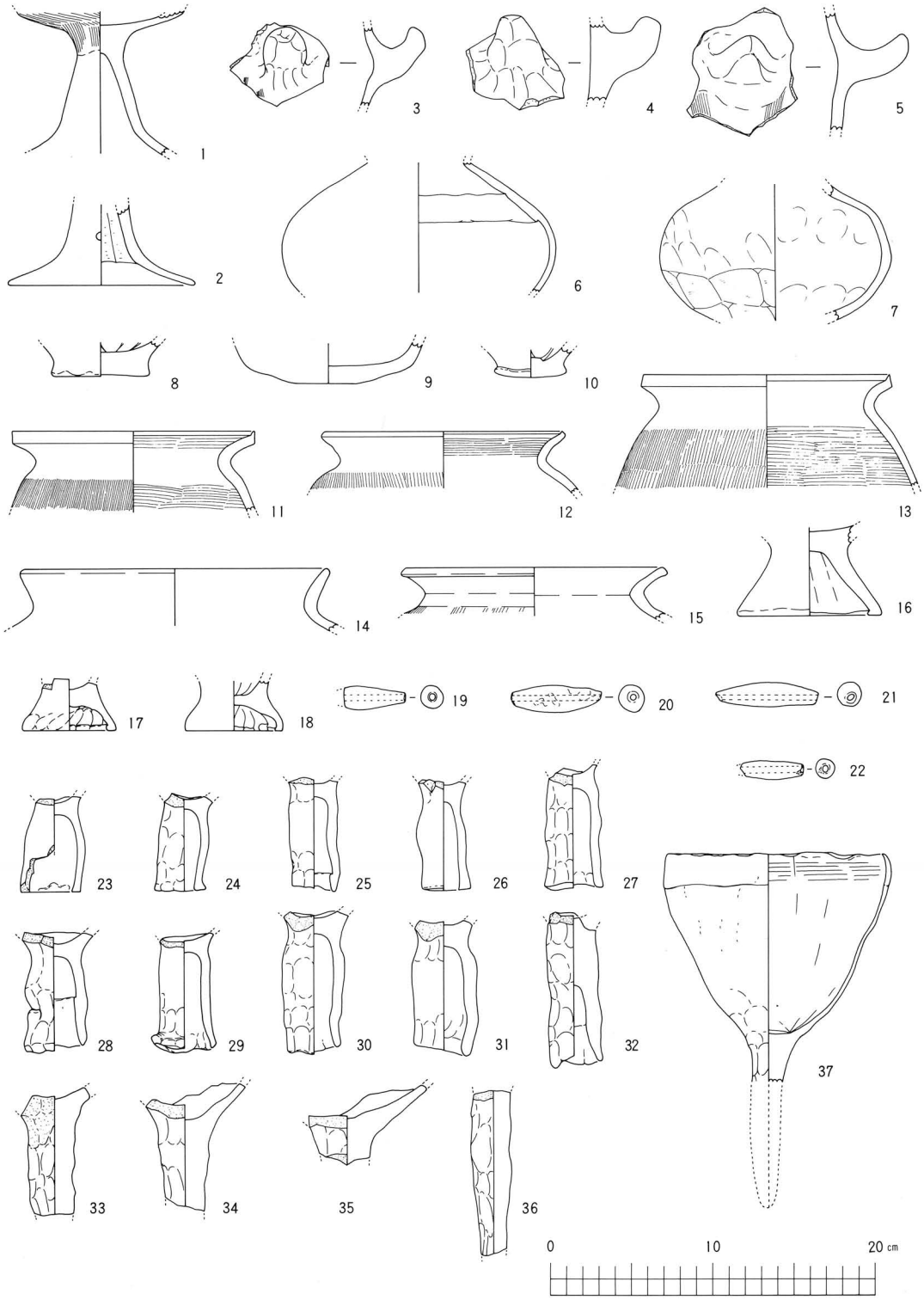


松崎貝塚発掘区土層断面図

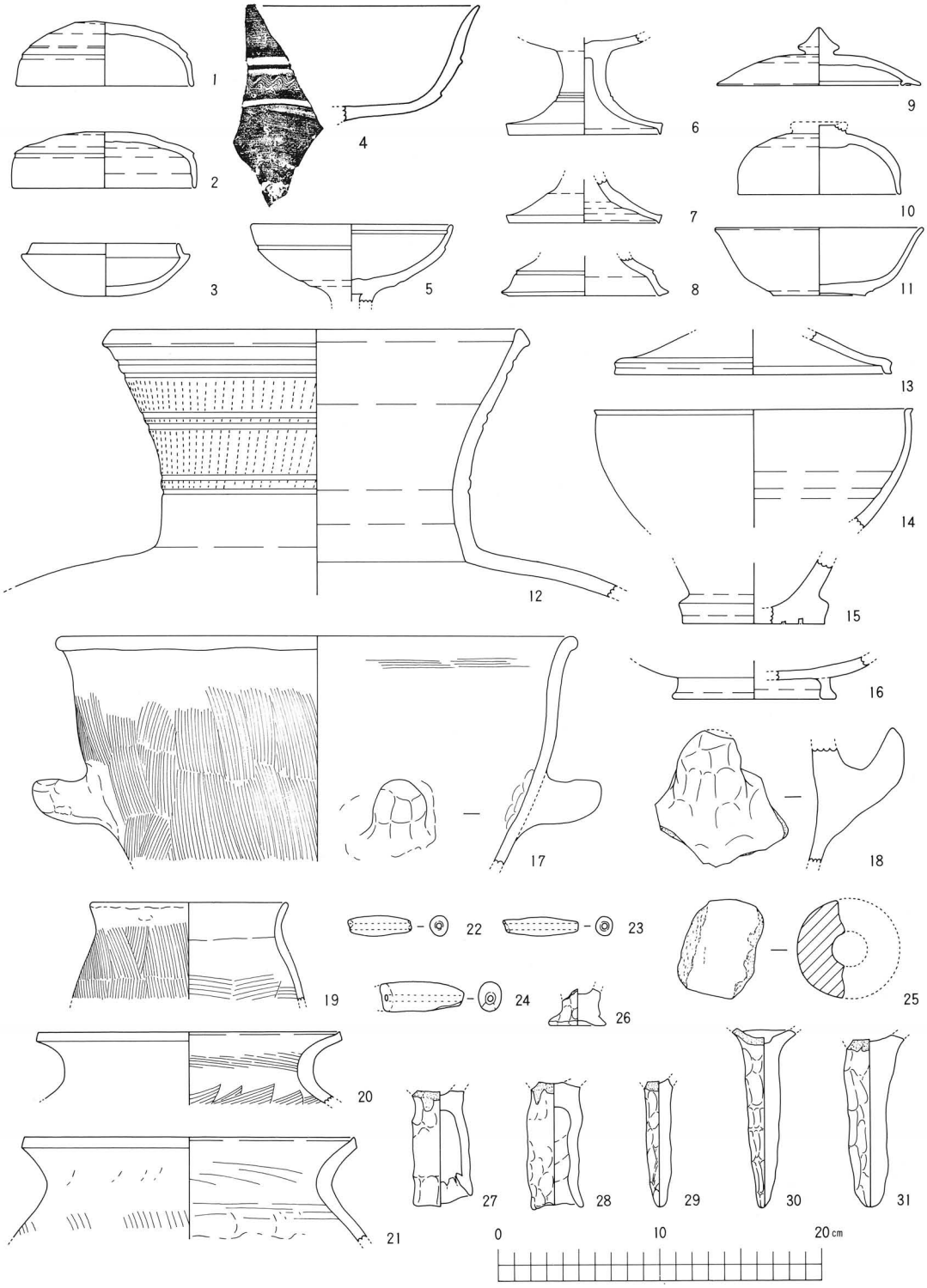


松崎貝塚 11 層出土遺物実測図 1

図版 6

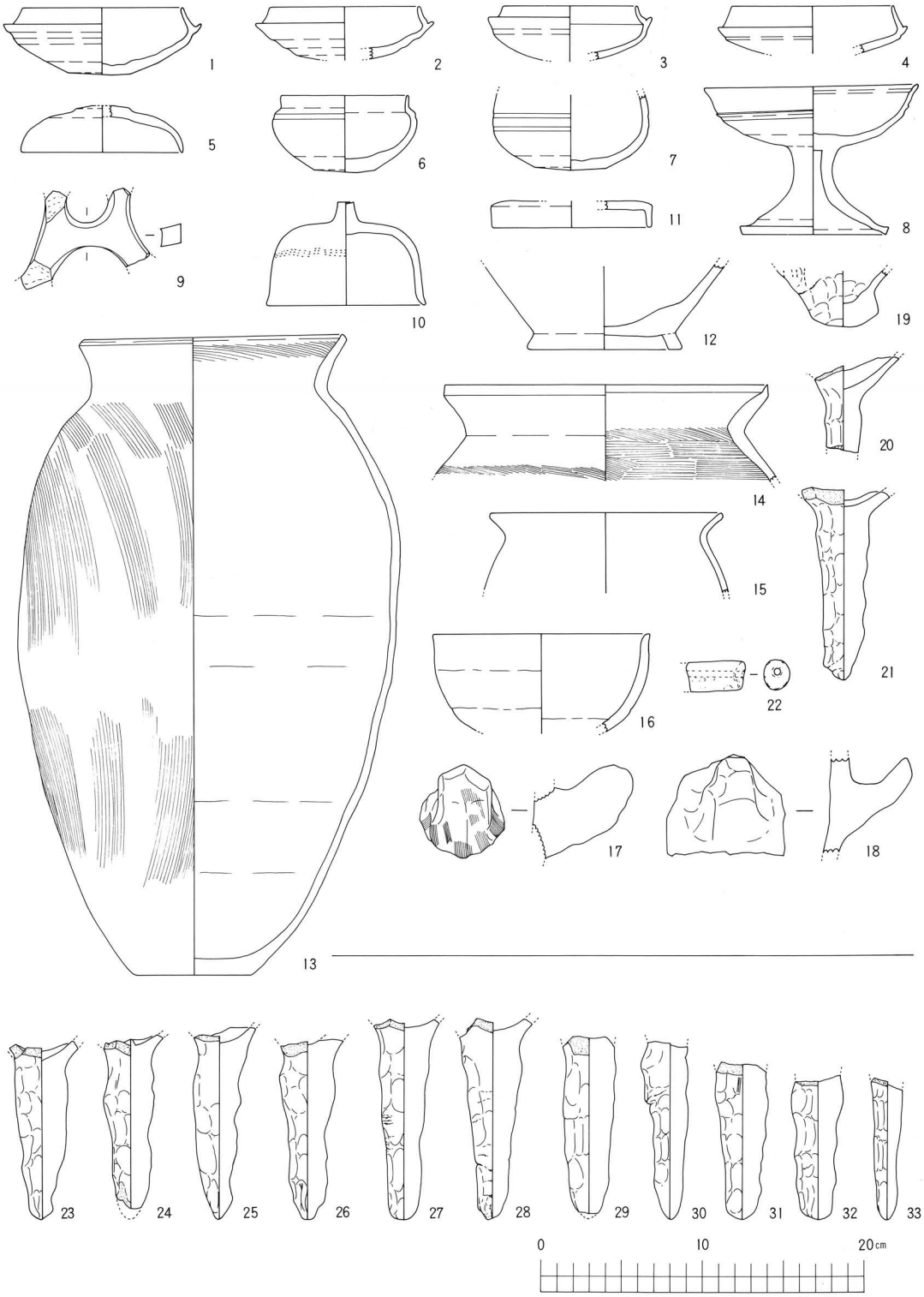


松崎貝塚 11 層出土遺物実測図 2

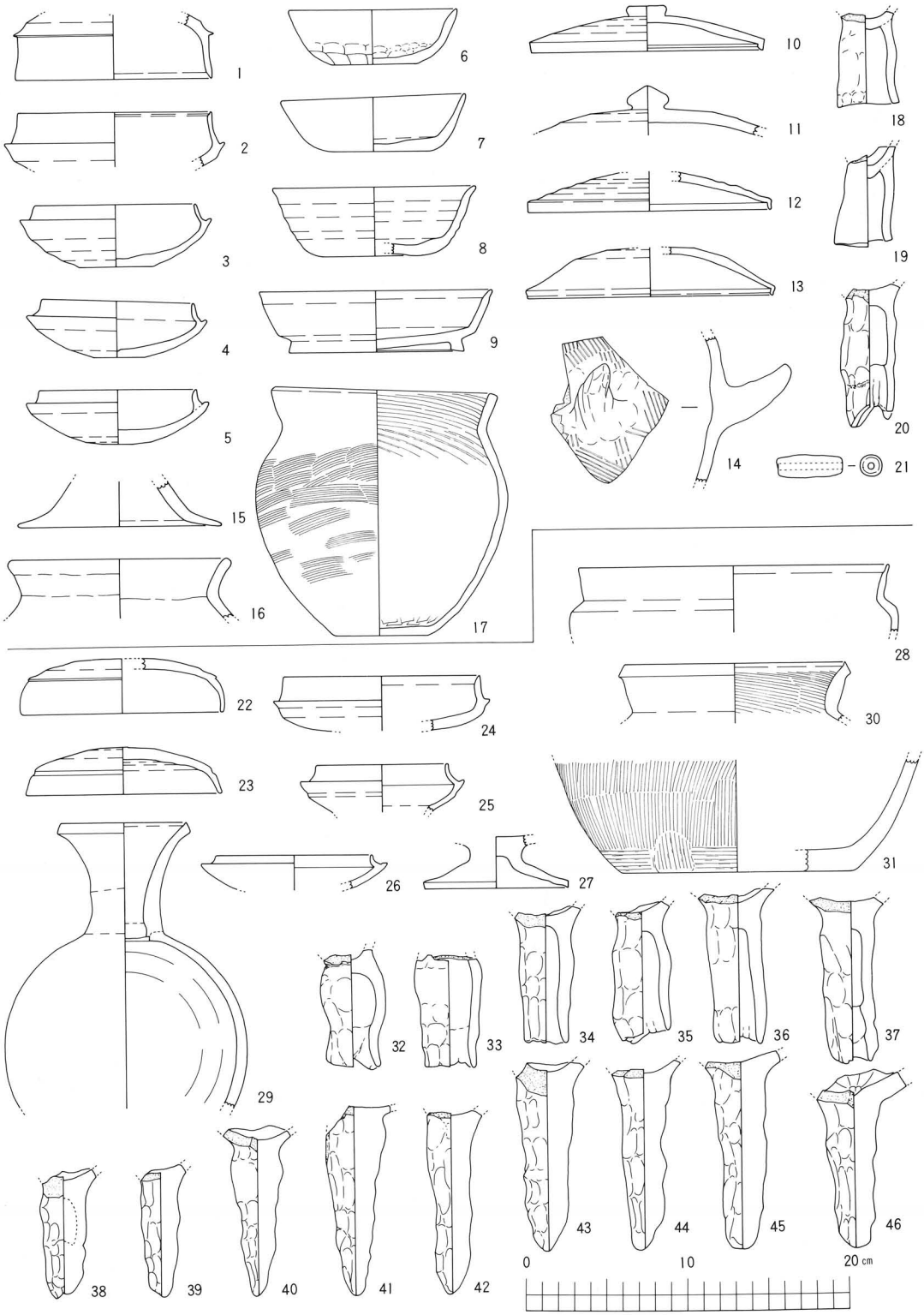


松崎貝塚Ⅵ区北貝層出土遺物実測図

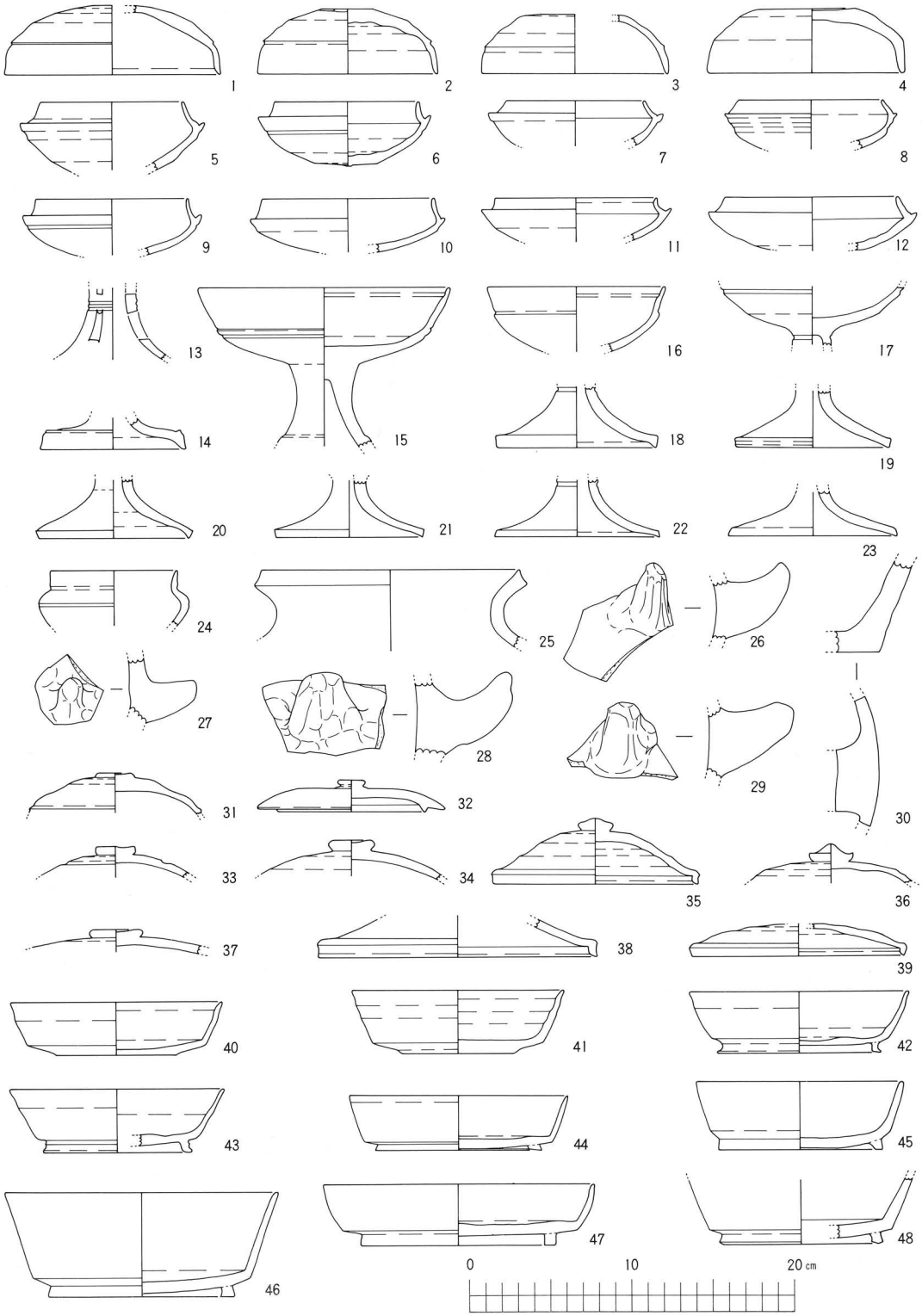
図版 8



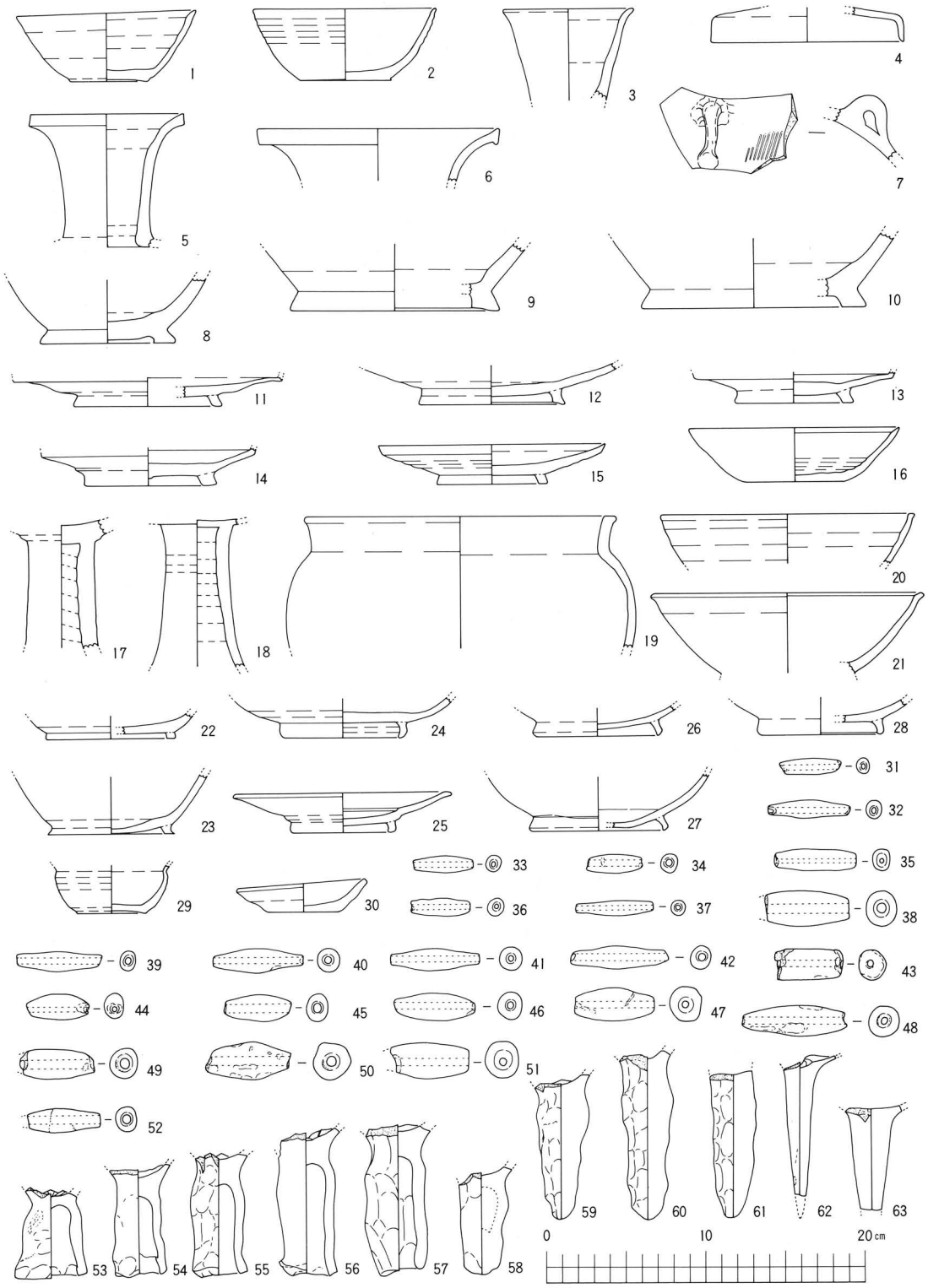
松崎貝塚Ⅵ区南貝層出土遺物およびⅥ区6層（下段）出土製塩土器実測図



松崎貝塚Ⅴ区 4 層（上段）およびⅥ区 6 層（下段）出土遺物実測図

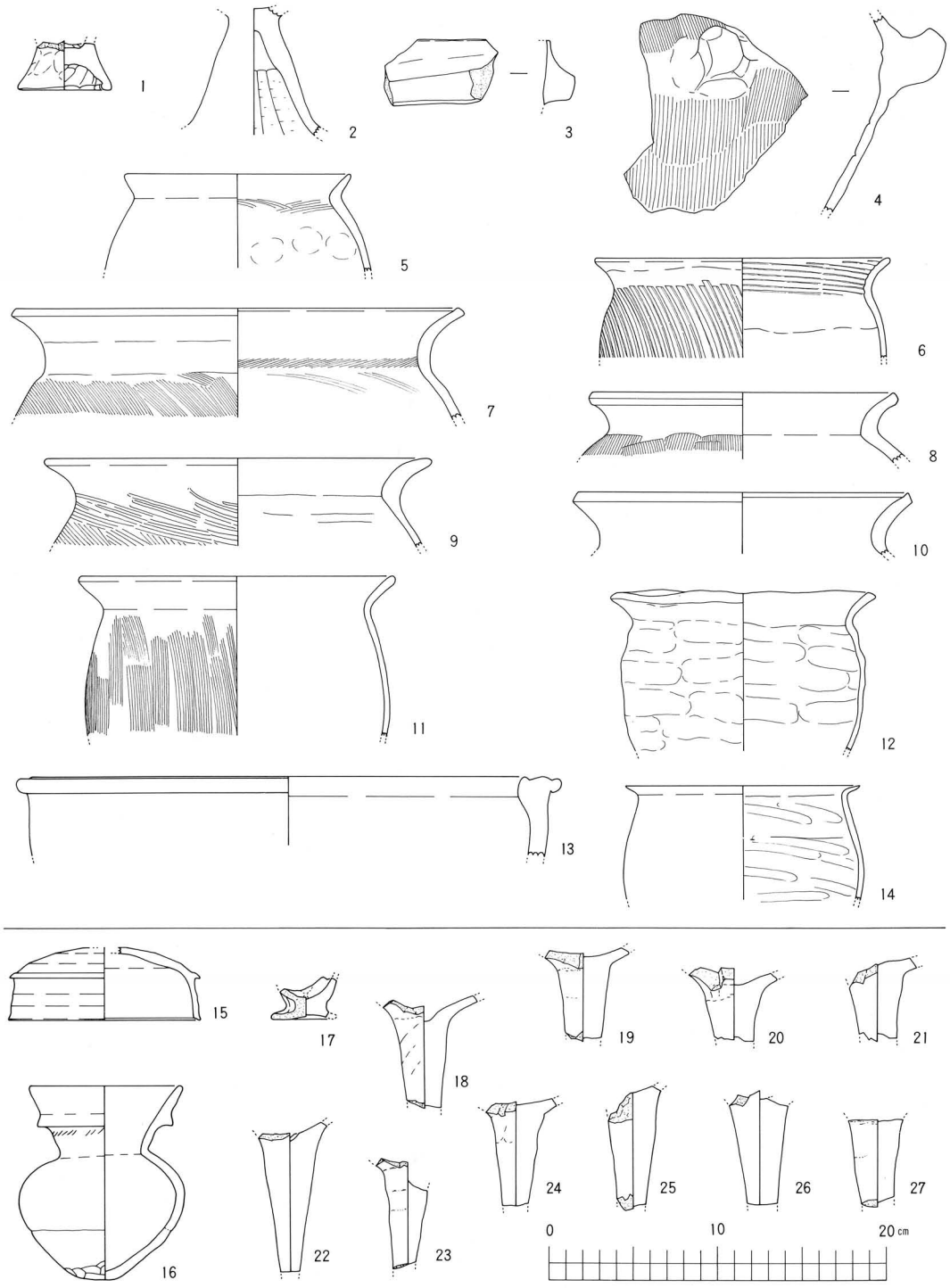


松崎貝塚Ⅶ区10層出土遺物実測図1

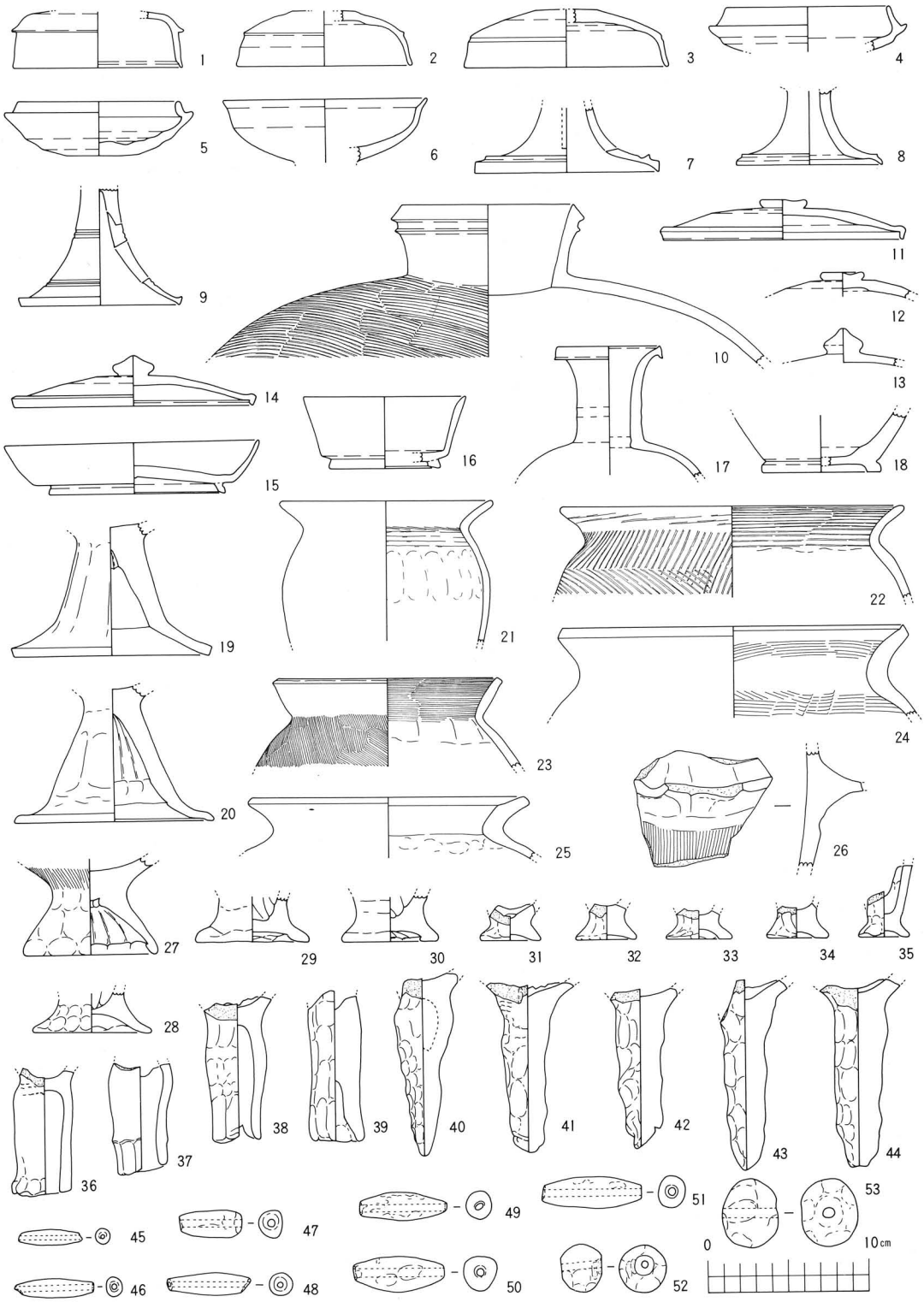


松崎貝塚Ⅶ区 10 層出土遺物実測図 2

図版12

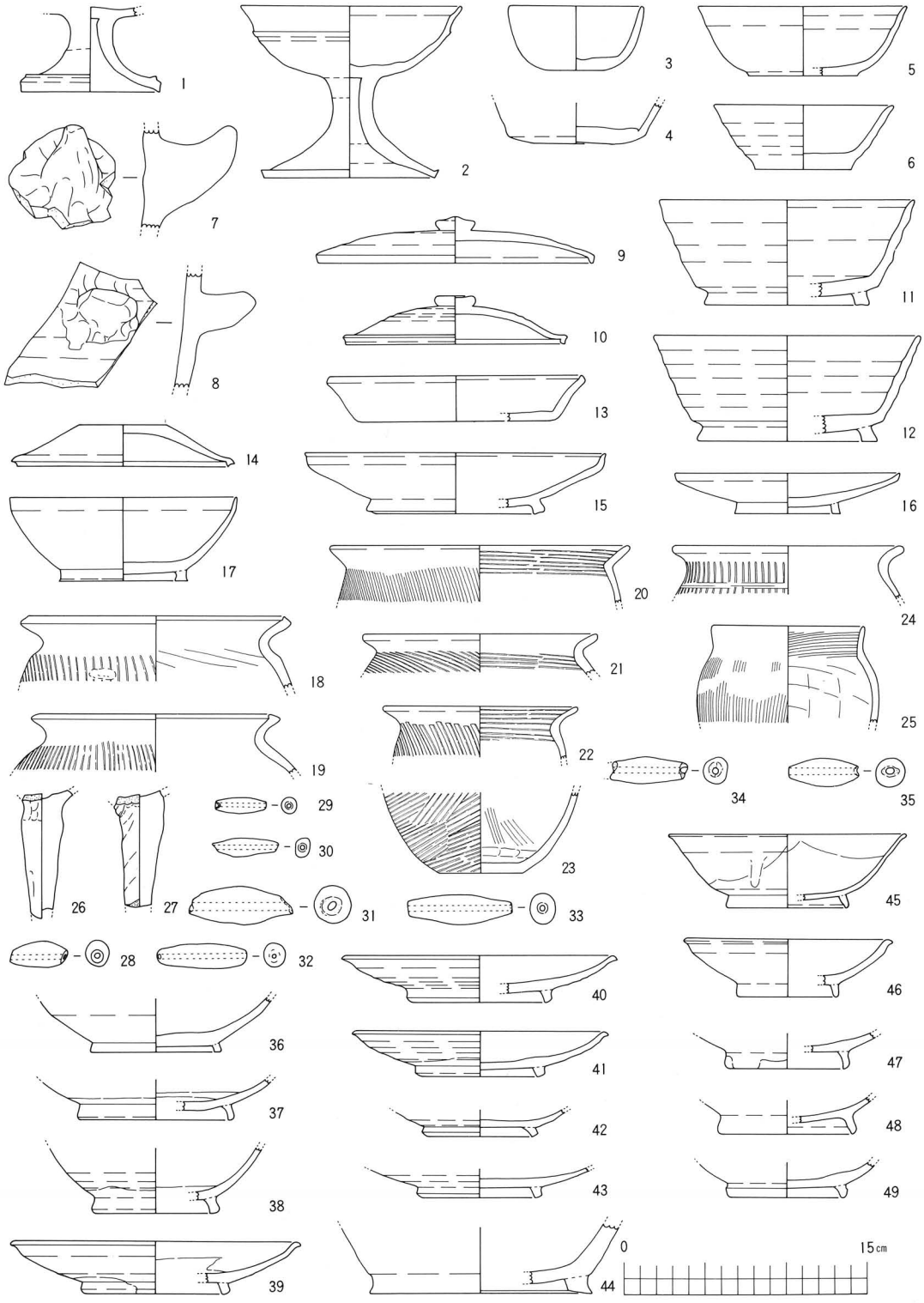


松崎貝塚10層出土および各所採集品実測図

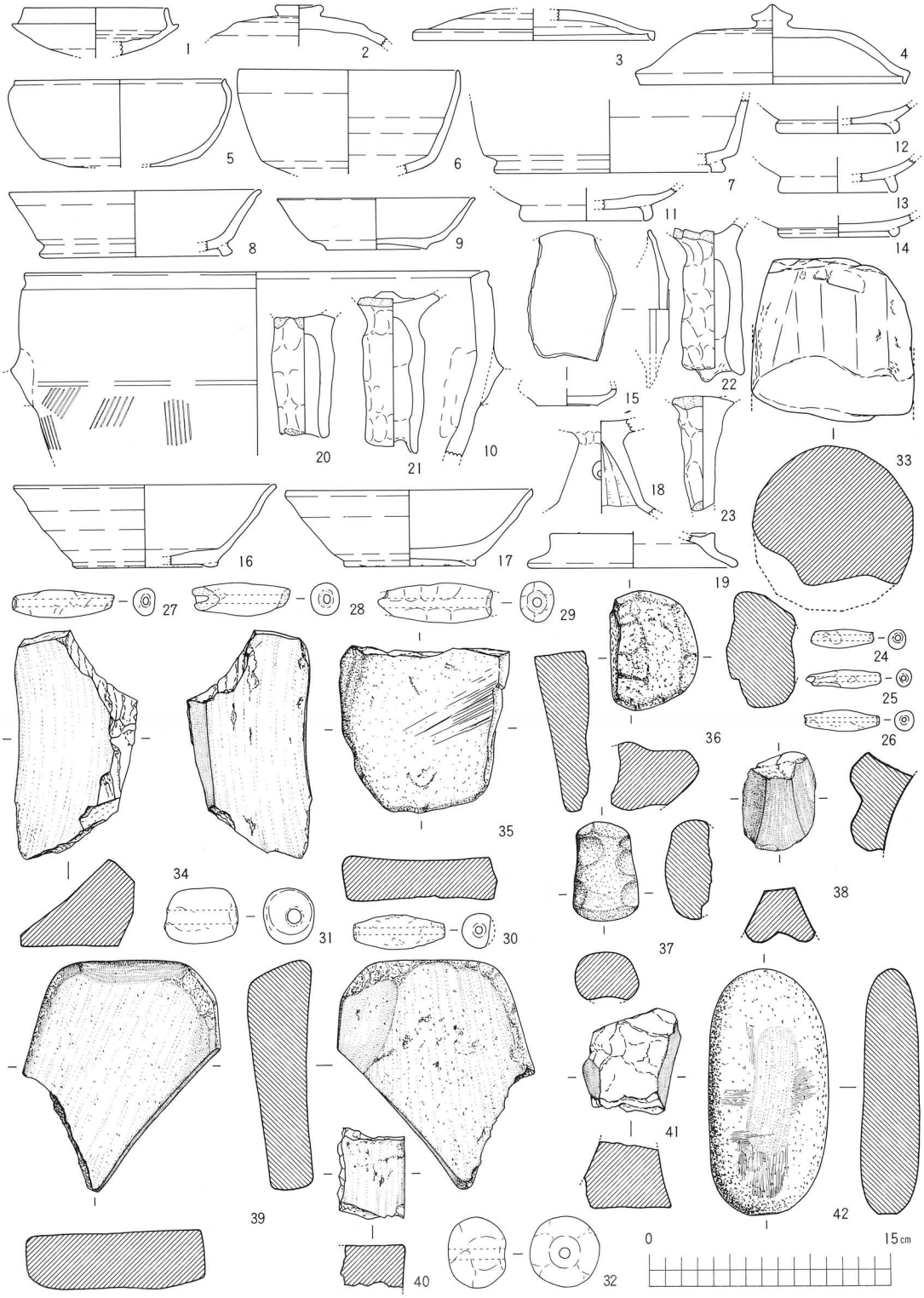


松崎貝塚Ⅵ区 9 層出土遺物実測図

図版14

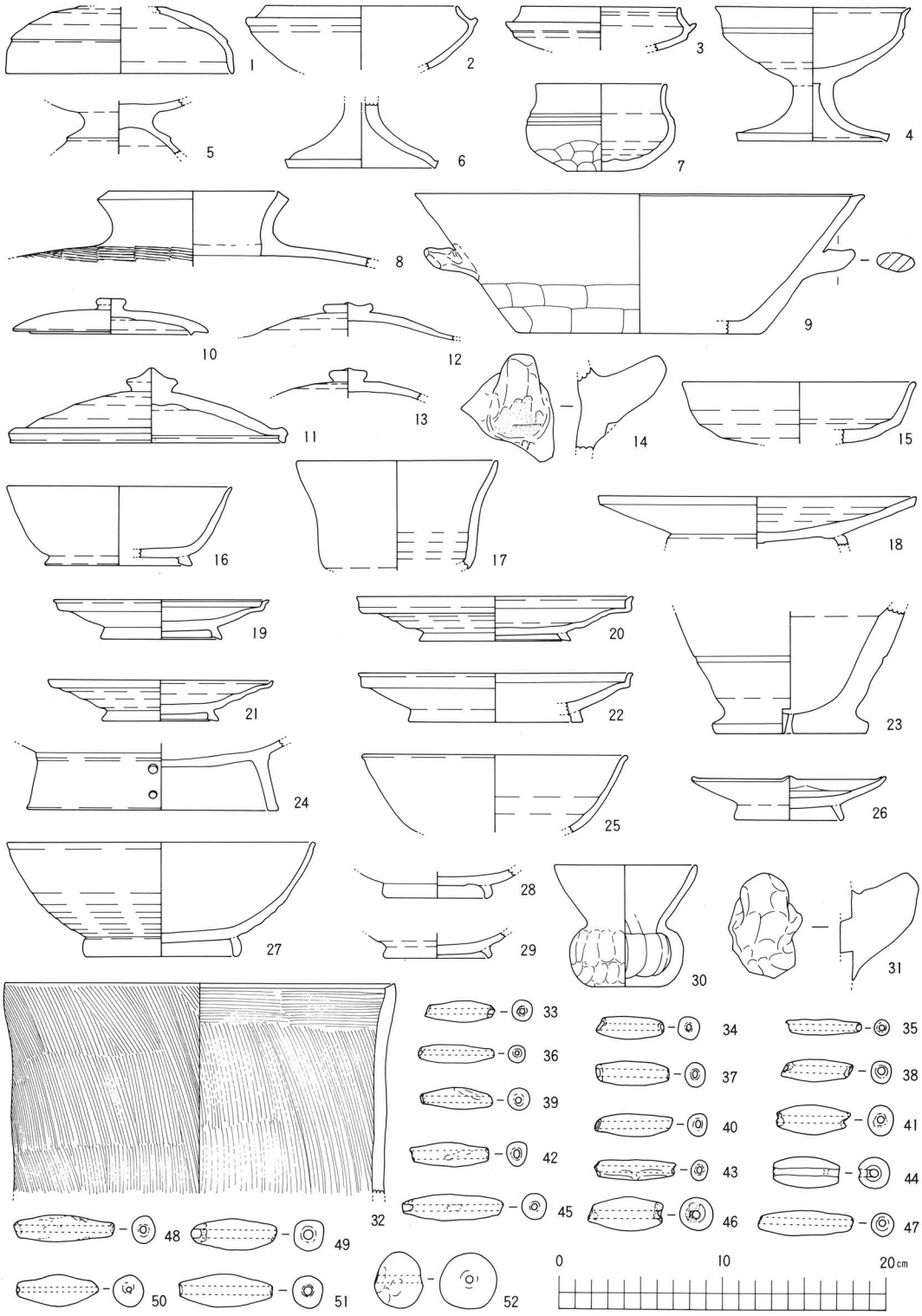


松崎貝塚Ⅶ区8層出土遺物実測図

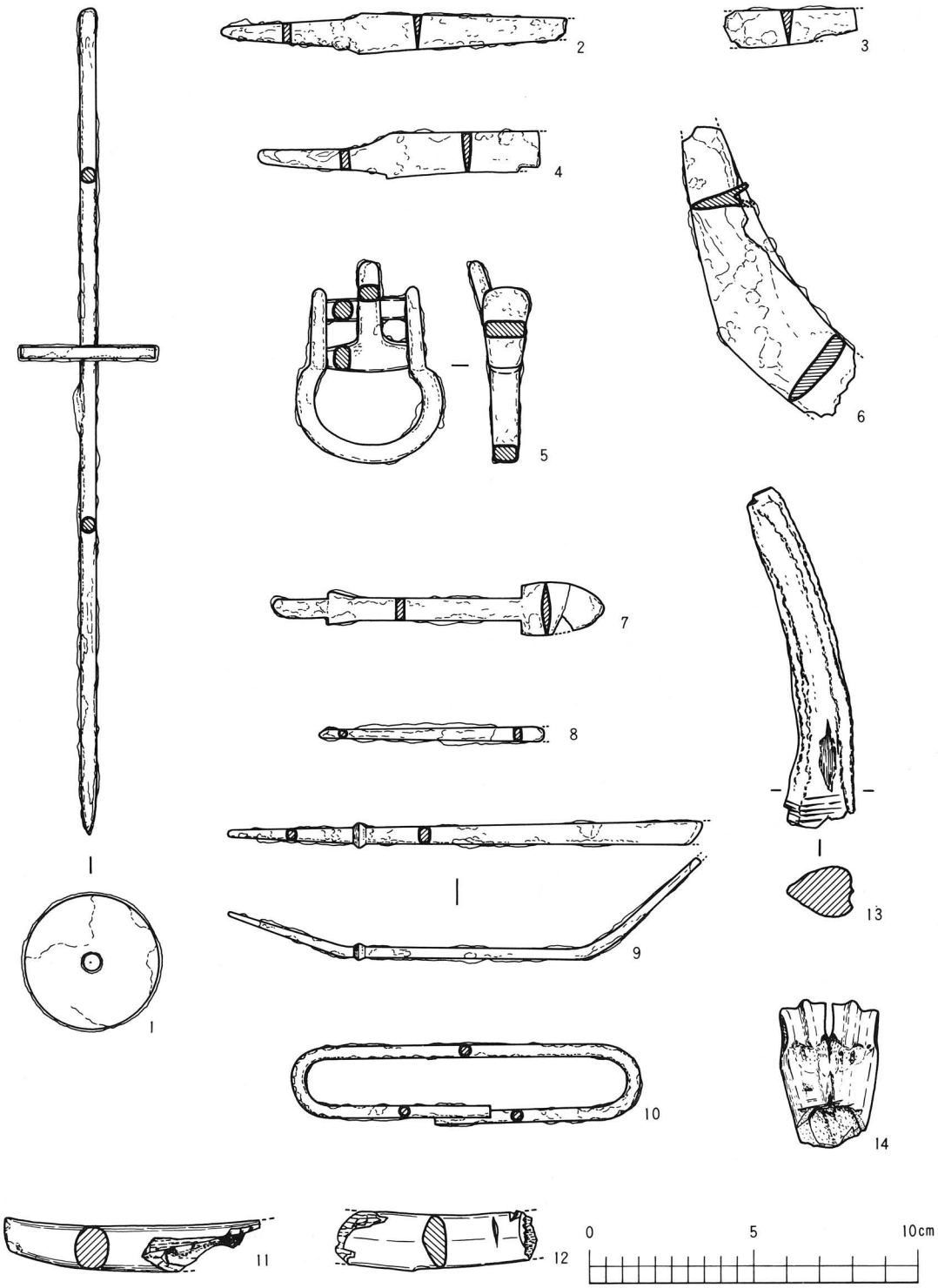


松崎貝塚 3 層出土遺物および石器類実測図

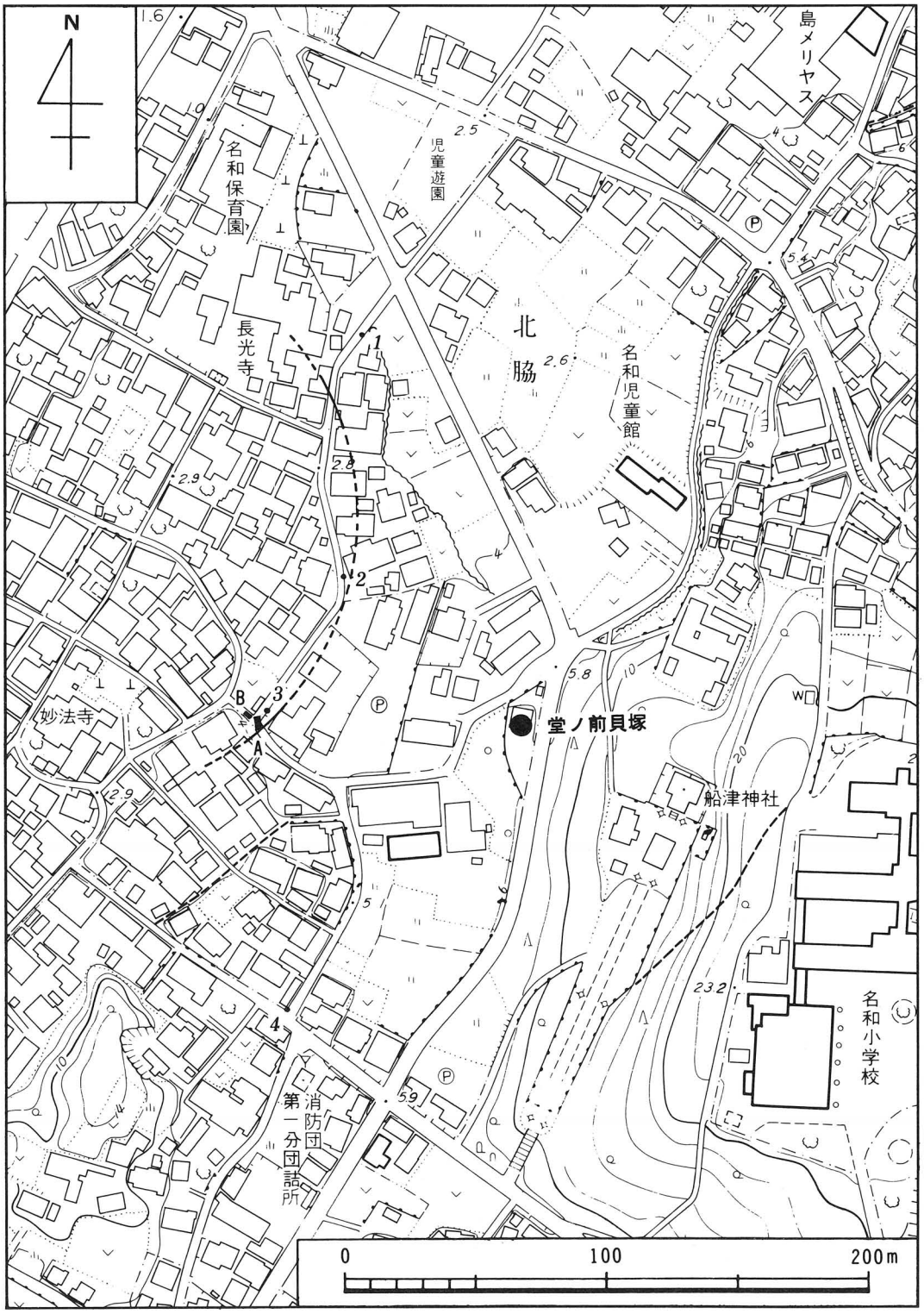
図版16



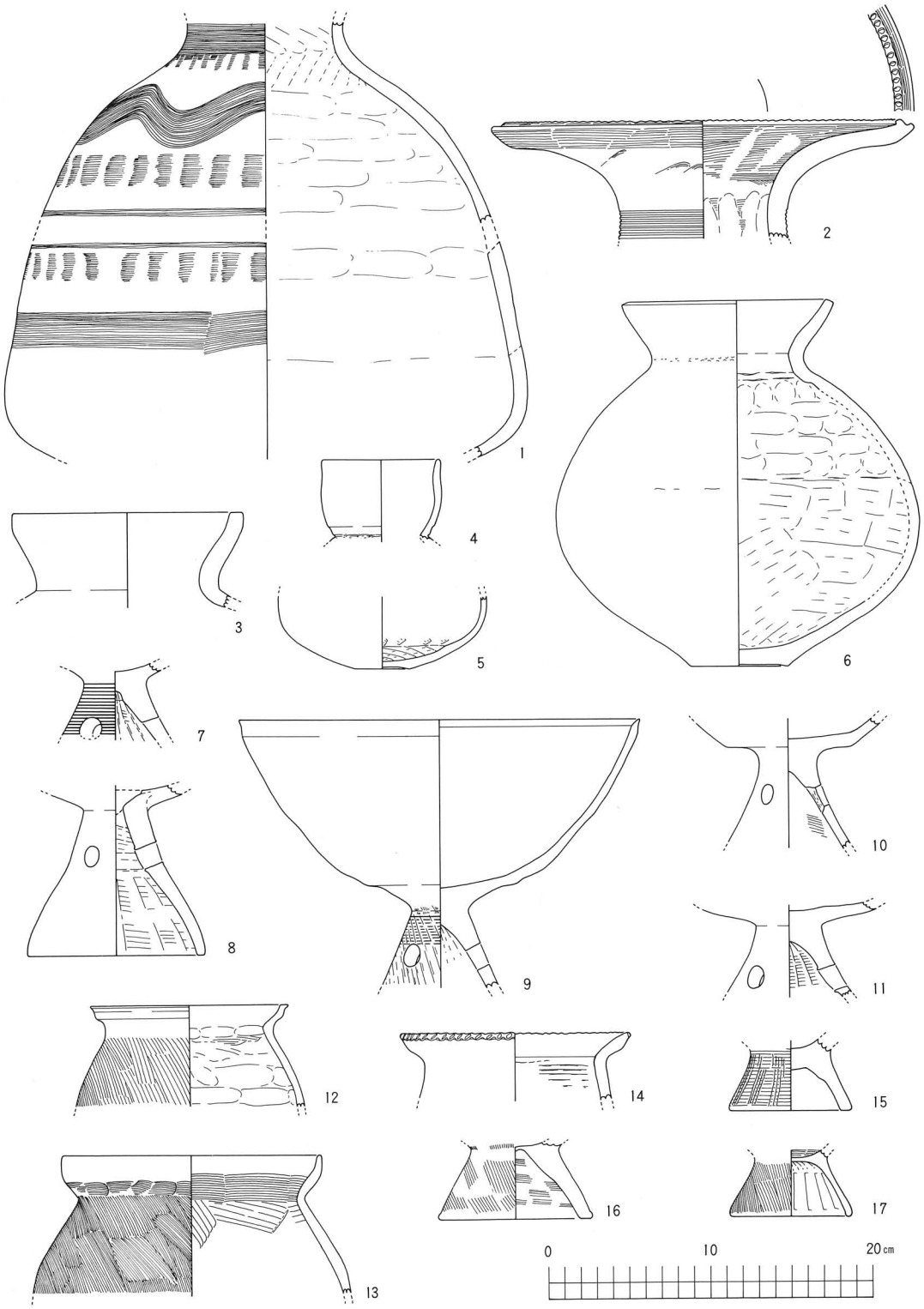
松崎貝塚2層出土遺物実測図



松崎貝塚出土鉄器・骨角器実測図

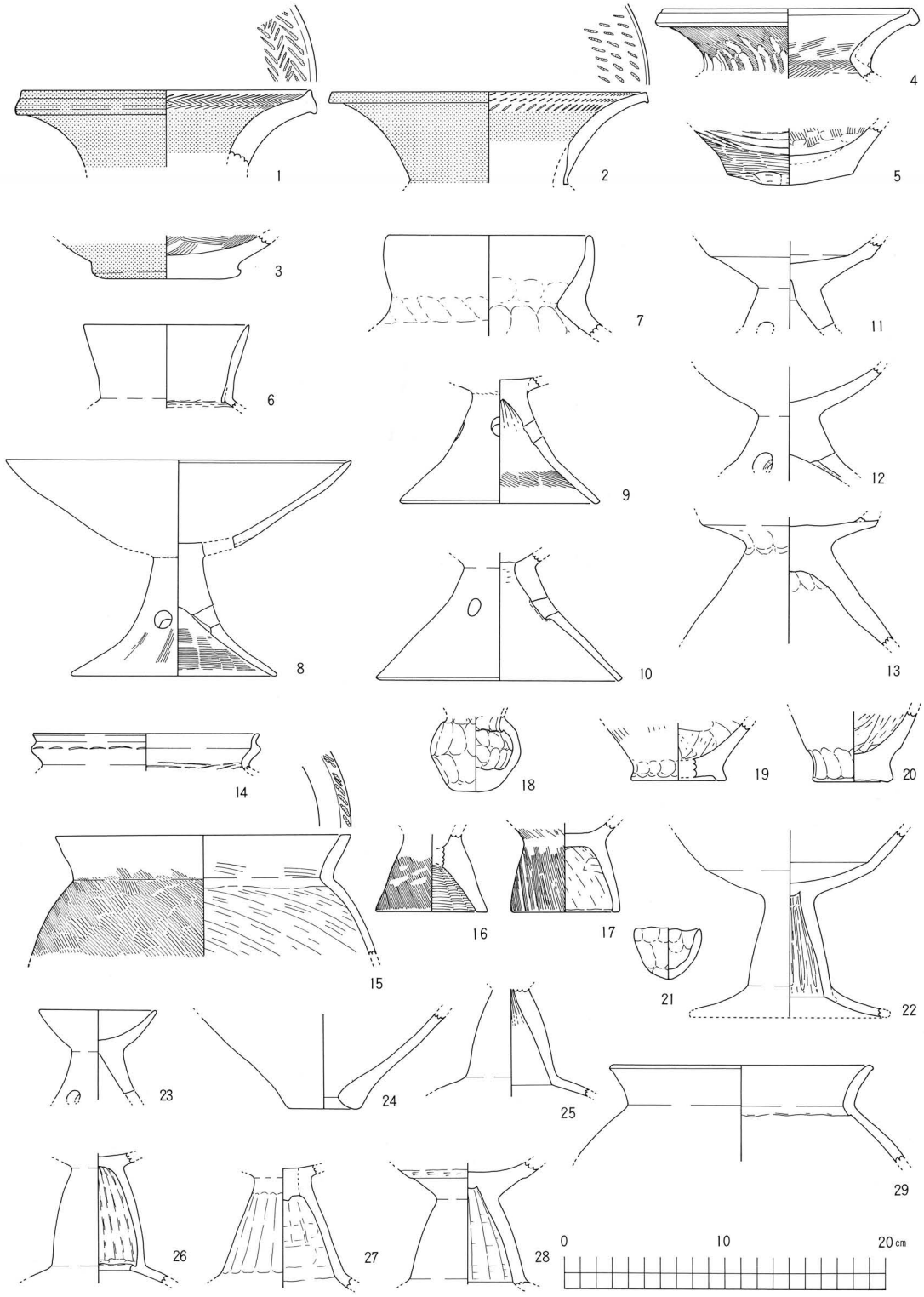


塚森遺跡地形図（1～4はボーリング地点）

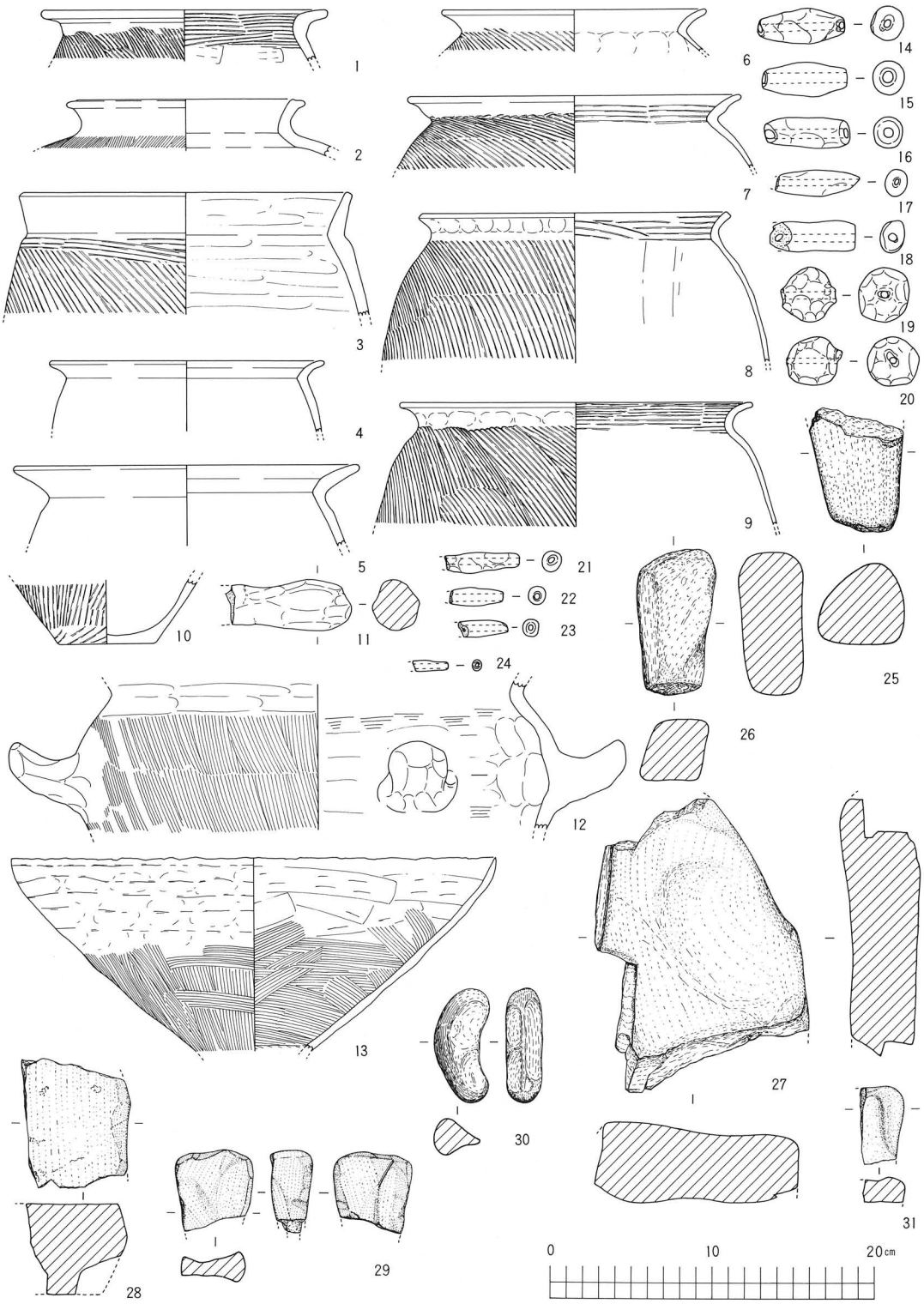


塚森遺跡出土弥生土器実測図

図版 20

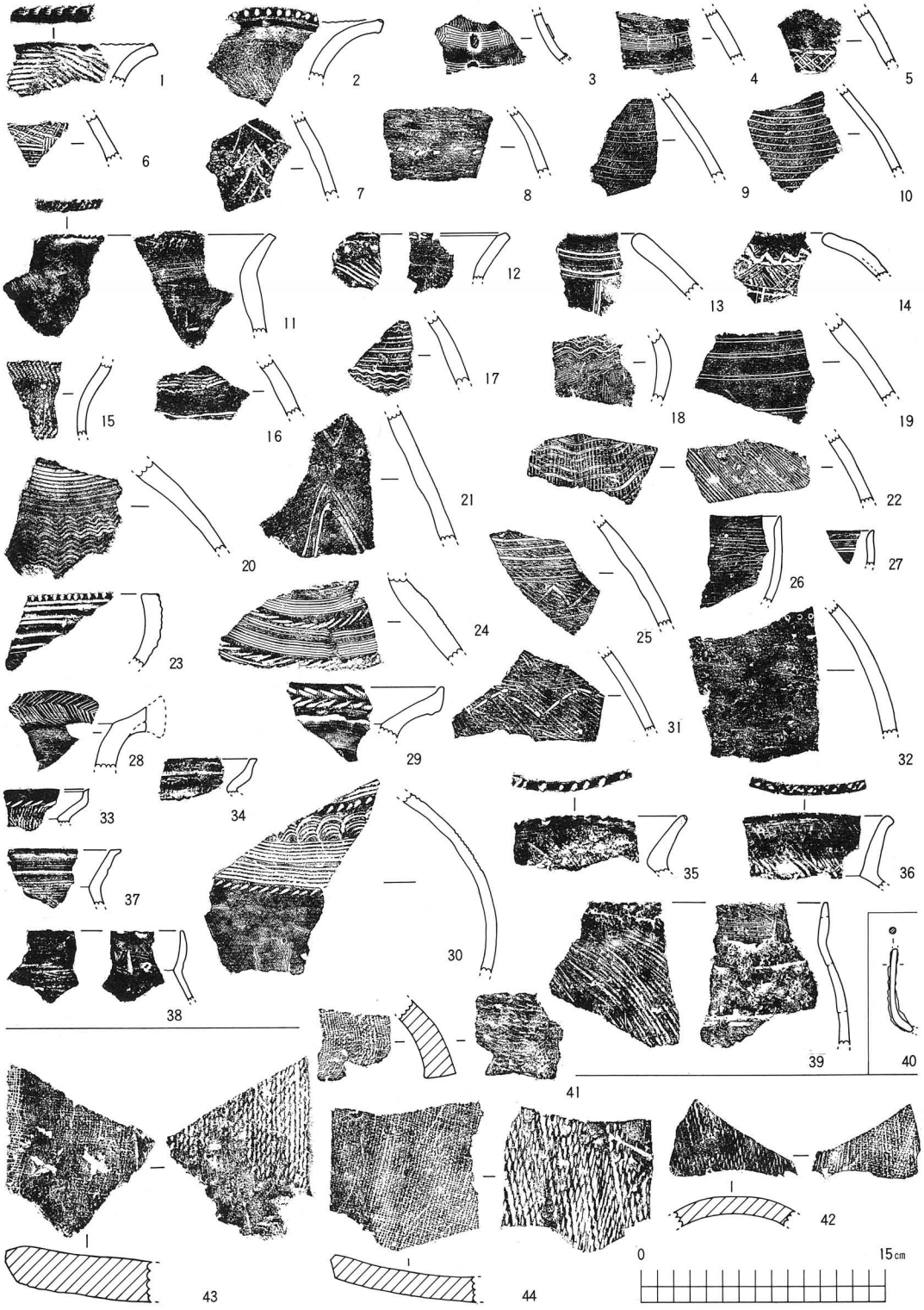


塚森遺跡出土弥生土器・土師器実測図

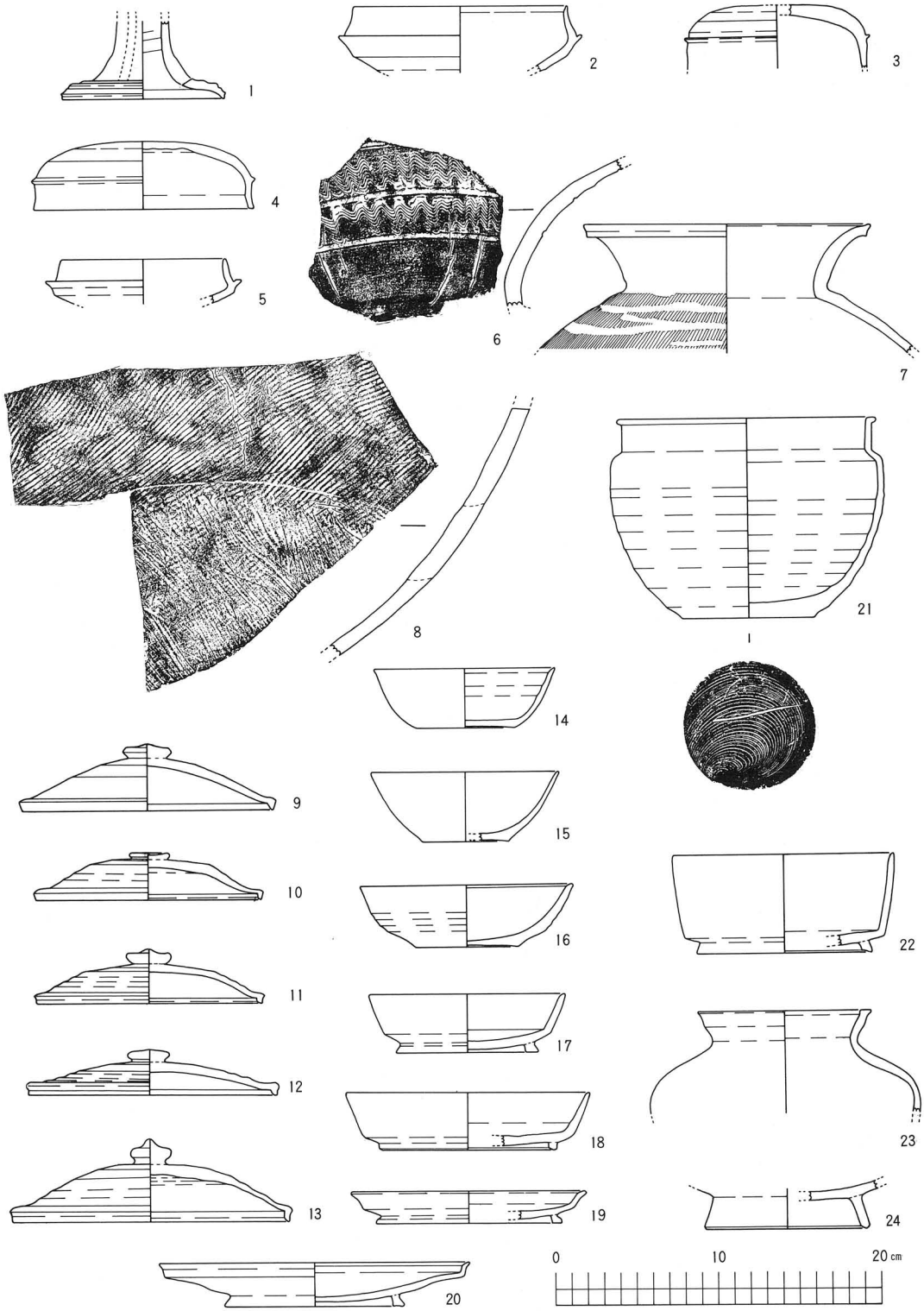


塚森遺跡出土土師器・土錘・石器実測図

図版22

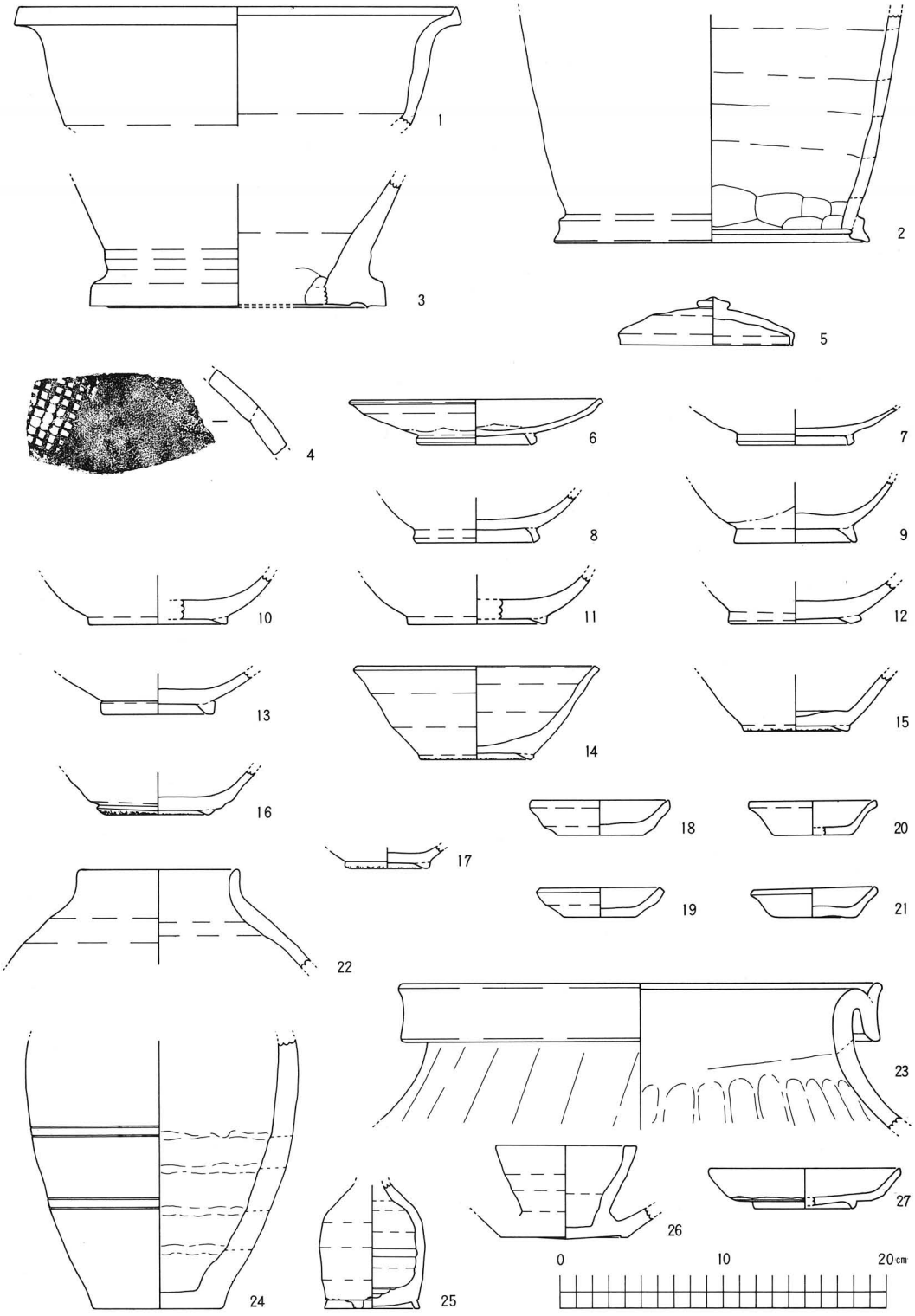


塚森遺跡出土弥生土器・土師器・瓦拓影および釣針実測図

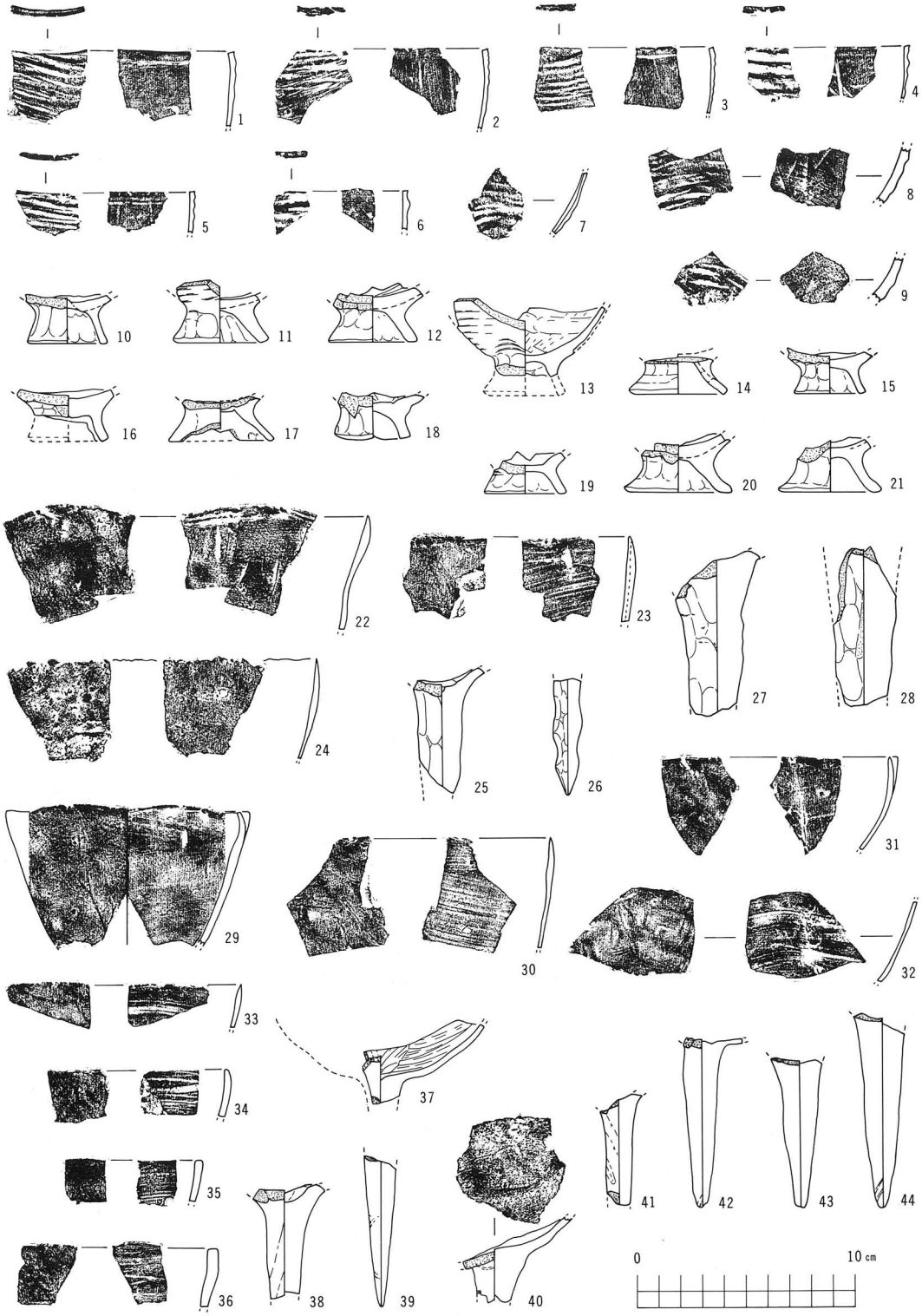


塚森遺跡出土須恵器実測図

図版24

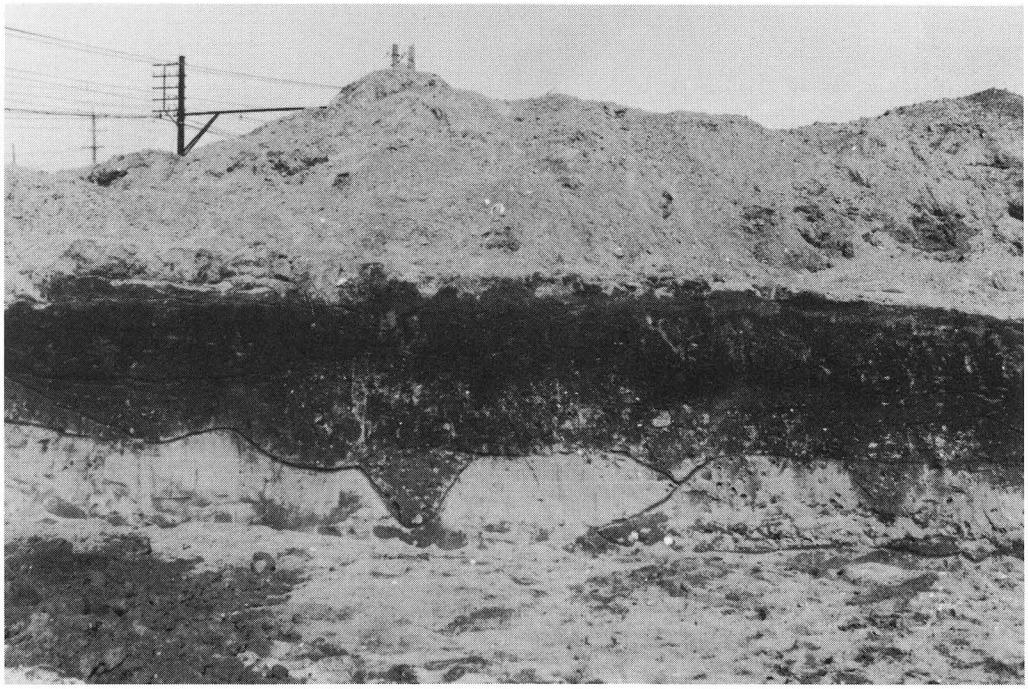


塚森遺跡出土須恵器・灰釉陶器等実測図



塚森遺跡出土製塩土器実測図および拓影

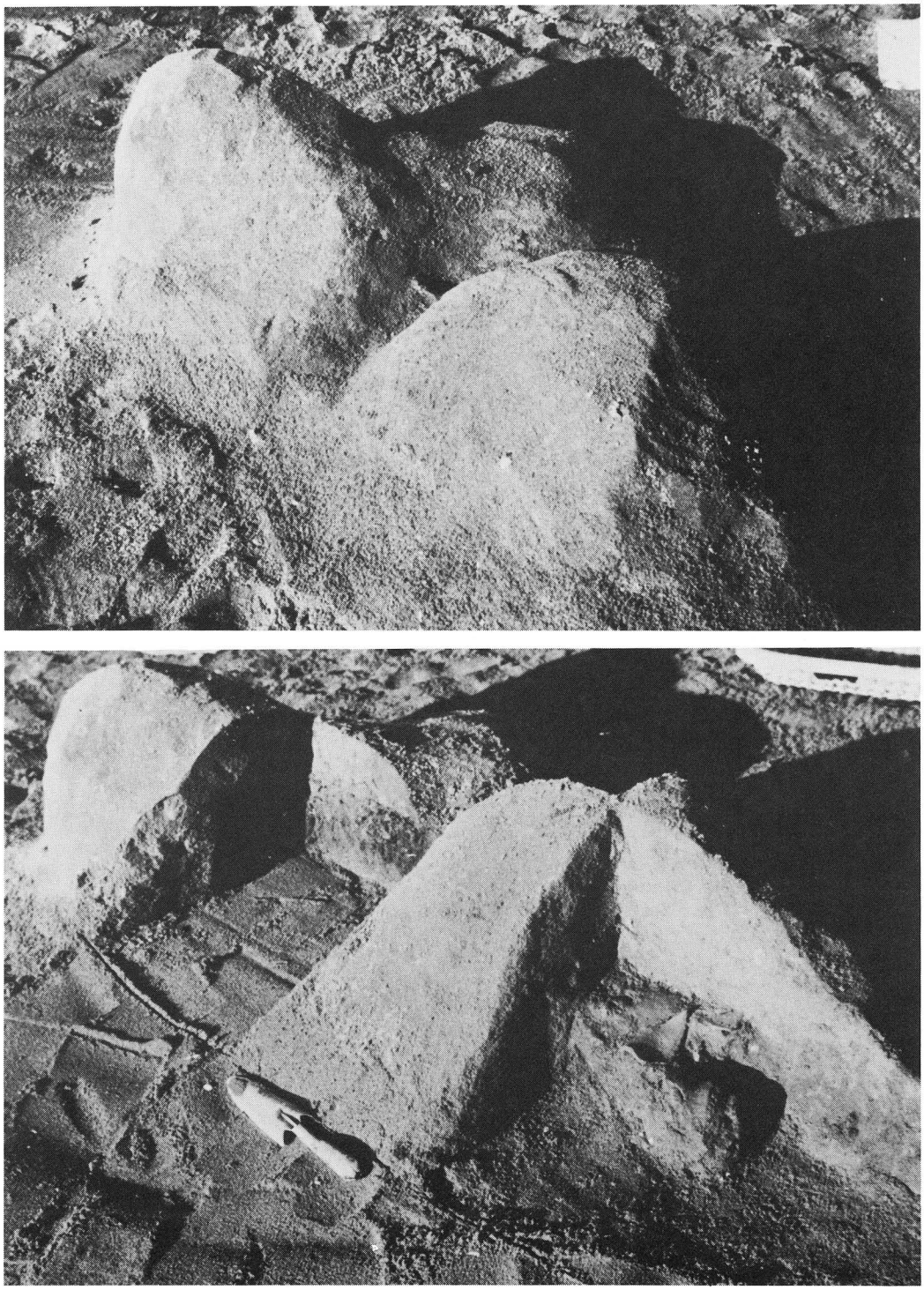
松崎貝塚現況



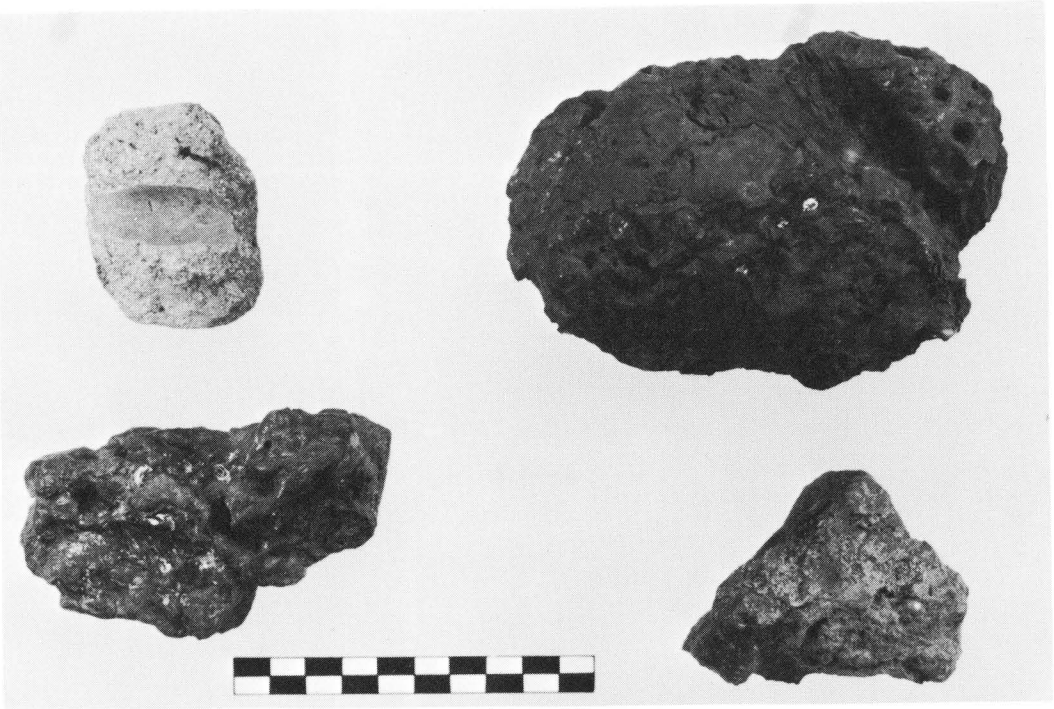
Ⅶ区北壁土層状況

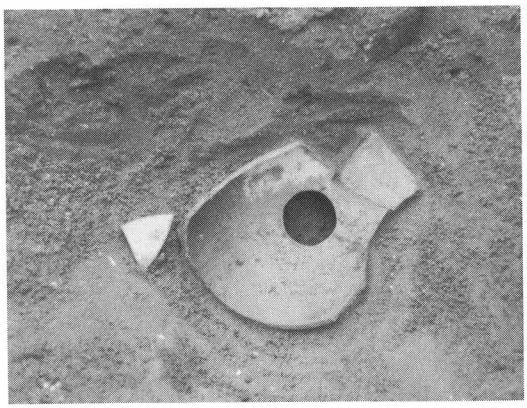
松崎貝塚VI区南壁土層状況

VI－1遺構断面

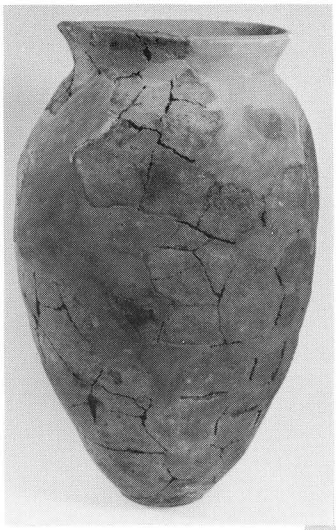


松崎貝塚Ⅶ－2遺構（下）断面

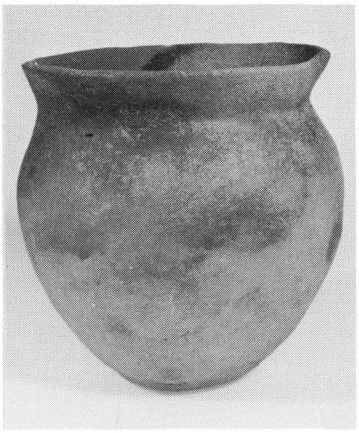




松崎貝塚（上）鞴の口と鉄塊および遺物出土状態

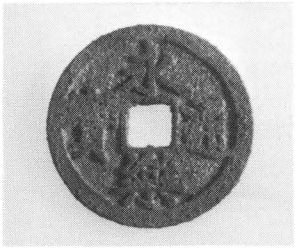


8－13

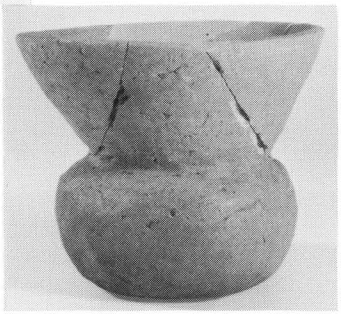


9－17

12－16

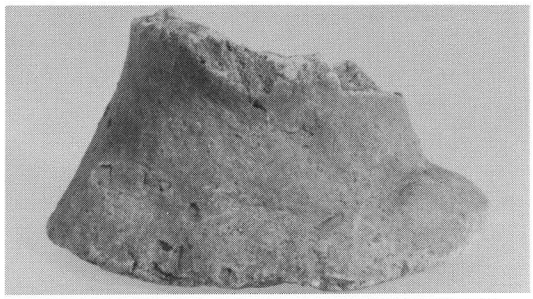


挿図7

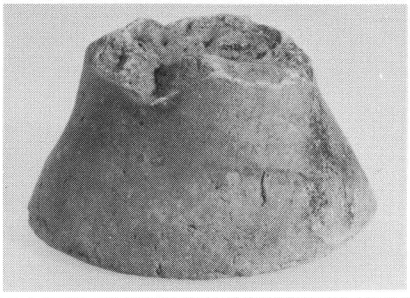


16－30

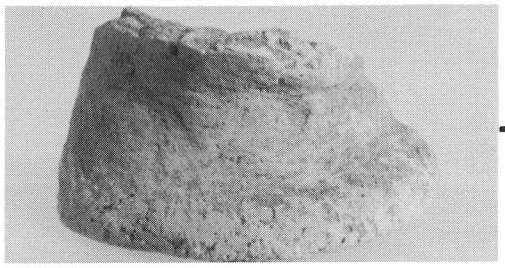
13－20



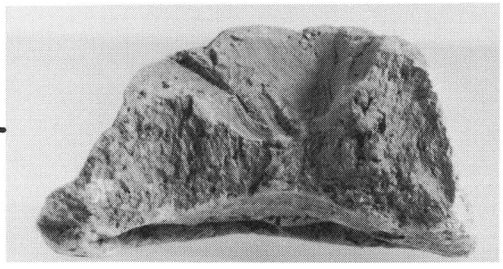
13－29



12－1



13－30



松崎貝塚出土土師器および貨幣

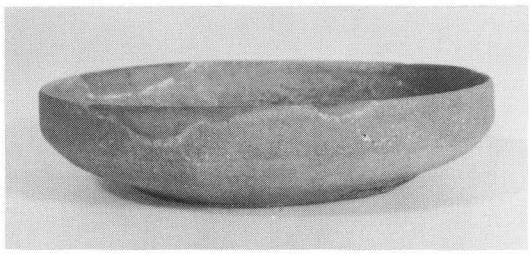
14
|
2

8
|
8

16
|
4

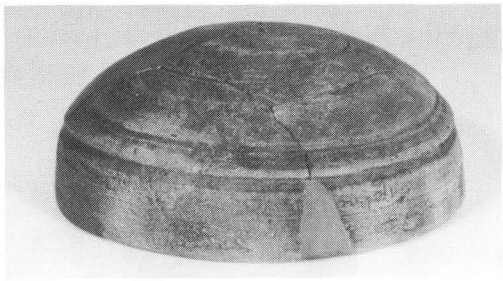
5
|
11

13—10　　8—6

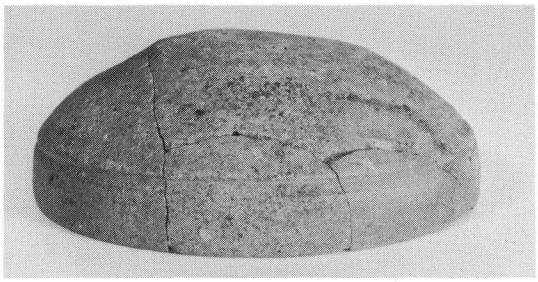


5—29　　14—17

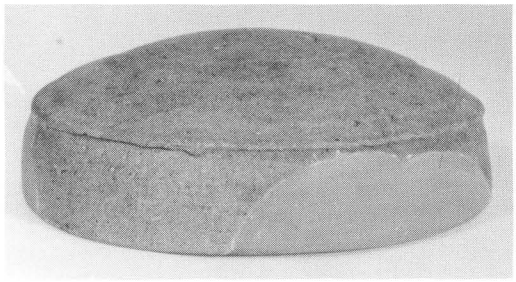
松崎貝塚出土須恵器（高坏等）



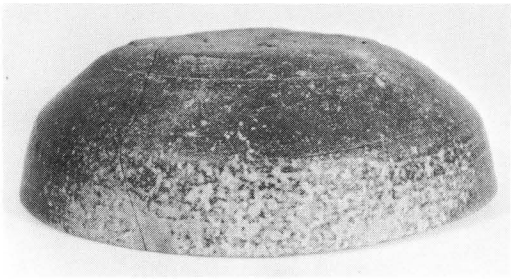
7－1



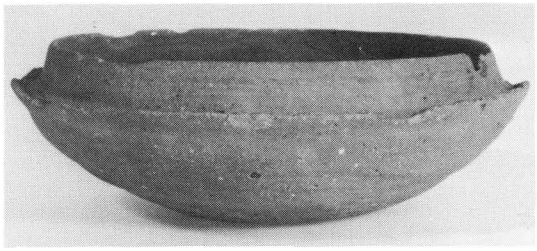
5－3



7－2



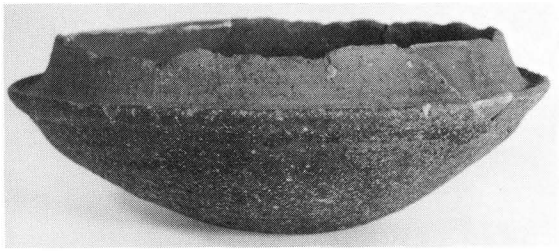
10－4



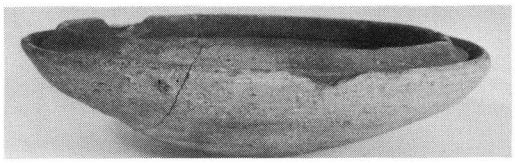
9－3

9－4

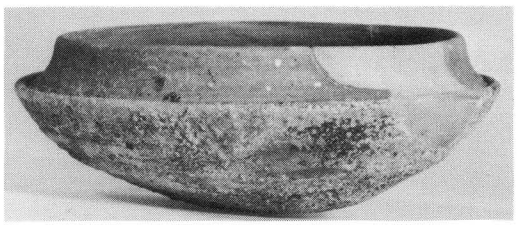
7－3



8－1

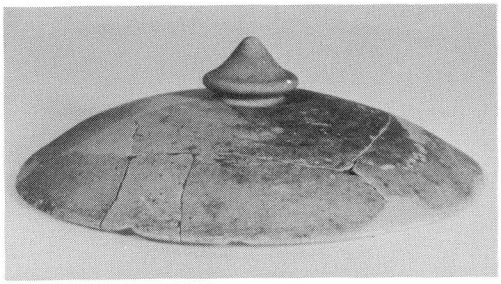


挿図4－3



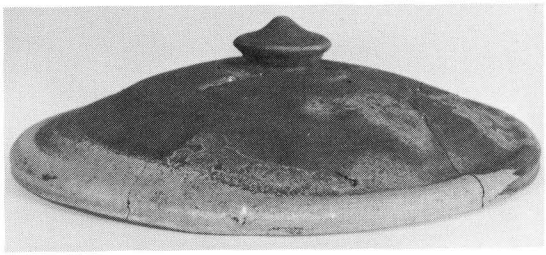
5－7

松崎貝塚出土須恵器（蓋坏）

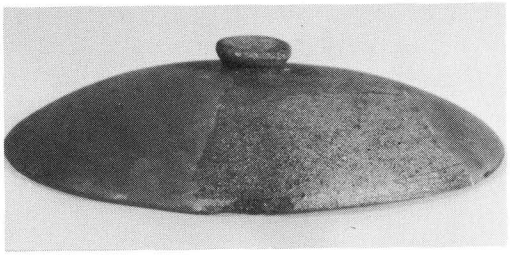


7－9

15－4



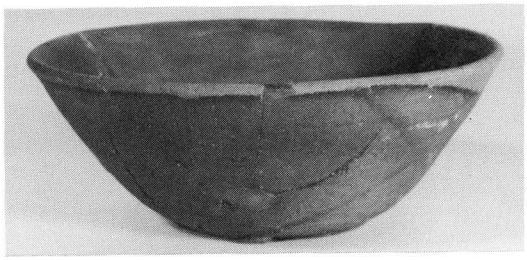
16－11



16－10

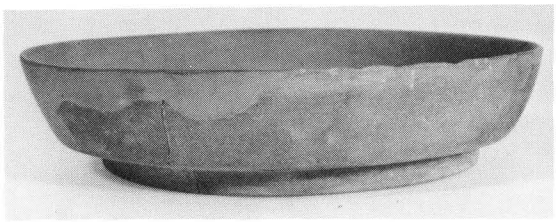
9－7

10－41

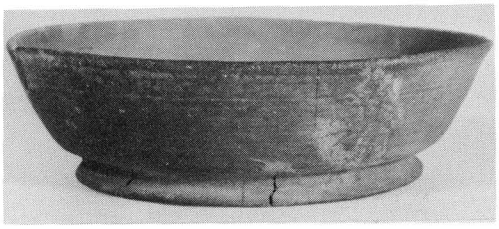


11－1

5－28

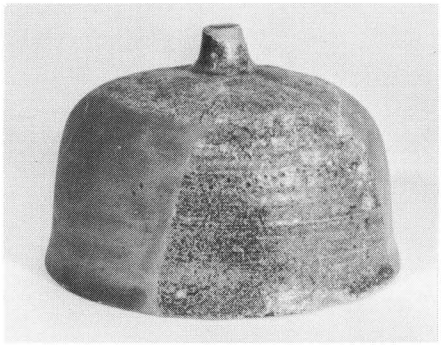


10－47

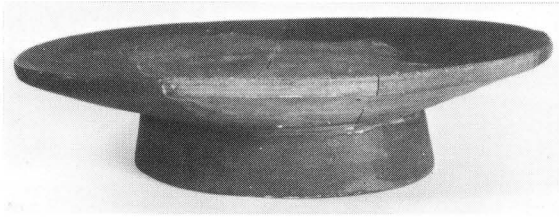


10－42

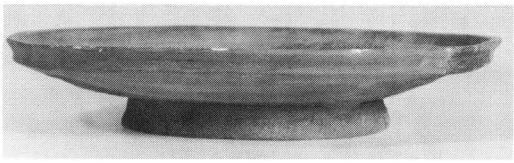
松崎貝塚出土須恵器（蓋・坏）



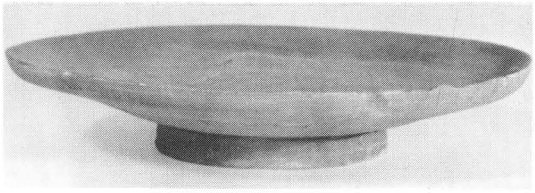
8－10



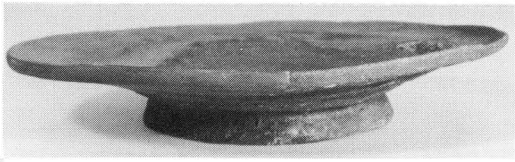
16－18



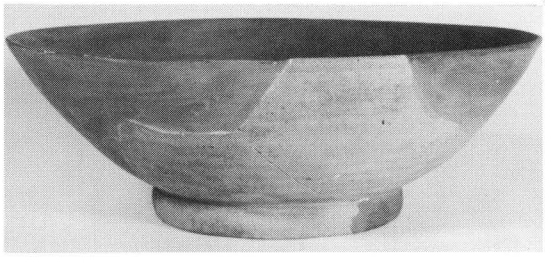
16－19



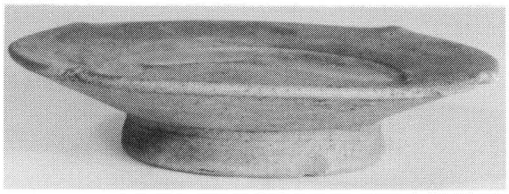
14－16



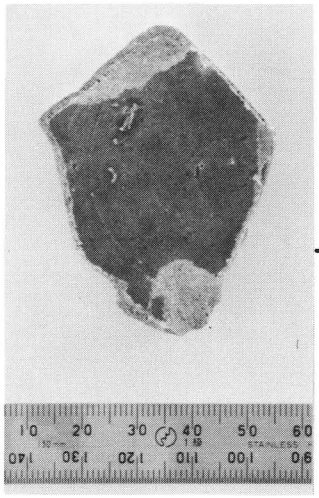
16－21

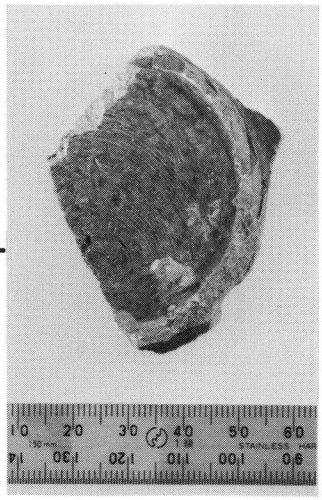


16－27

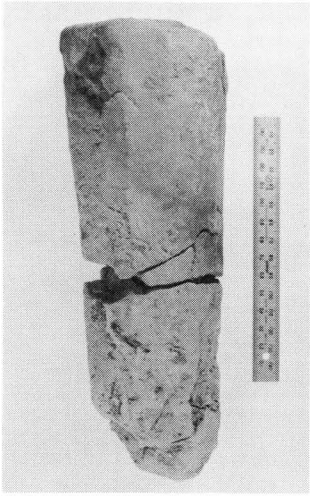


16－26



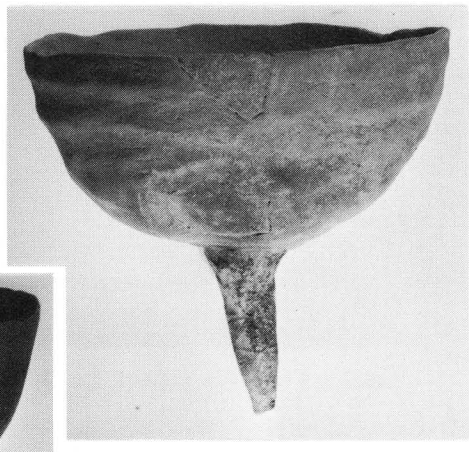


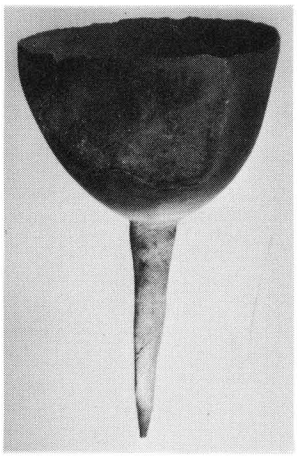
緑釉陶器

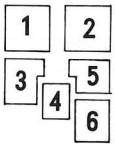


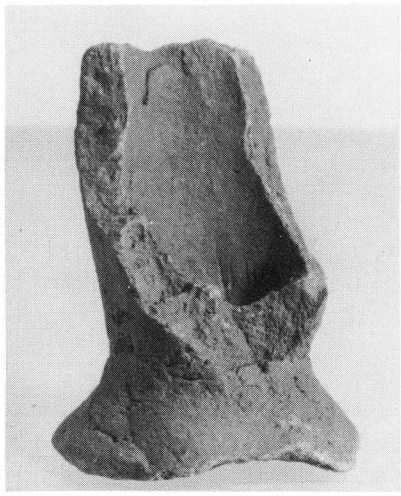
挿図5－1

松崎貝塚出土須恵器（盤等）・灰釉陶器等





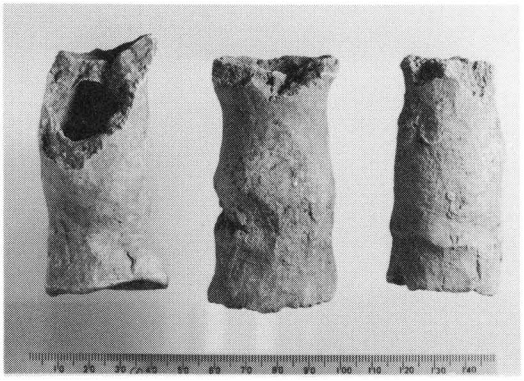




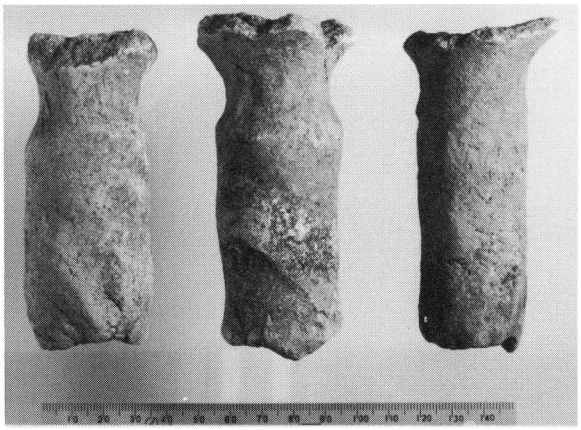
1　1類　　2　2類（推定復原）
3　3類〔6－37〕
4　4類（推定復原）
5　5類（推定復原）
6　渥美半島製塩土器A類類似式〔13－35〕

松崎貝塚出土製塩土器各類

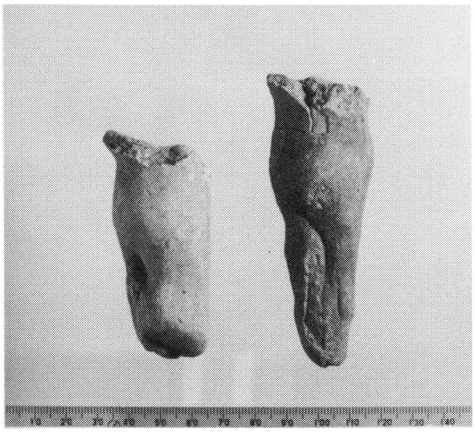
1類〔9—19・9—18・6—26〕



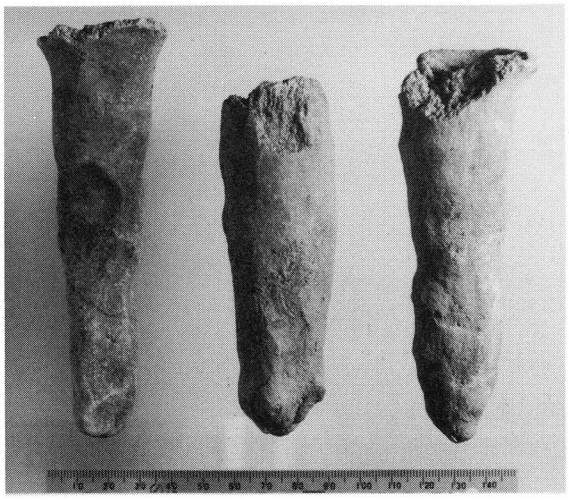
1類〔（V区）・6—28・7—27〕



1類〔11—57・15—21・9—36〕



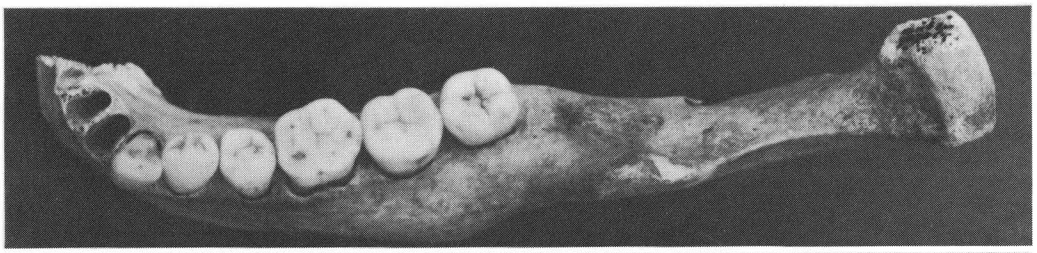
2類〔11—58・（Ⅶ区）〕

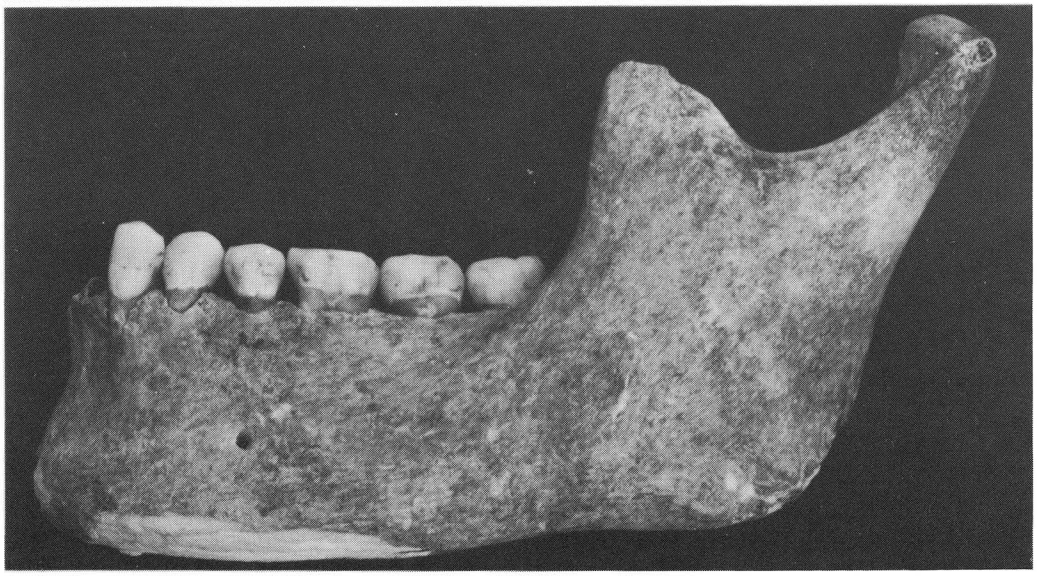


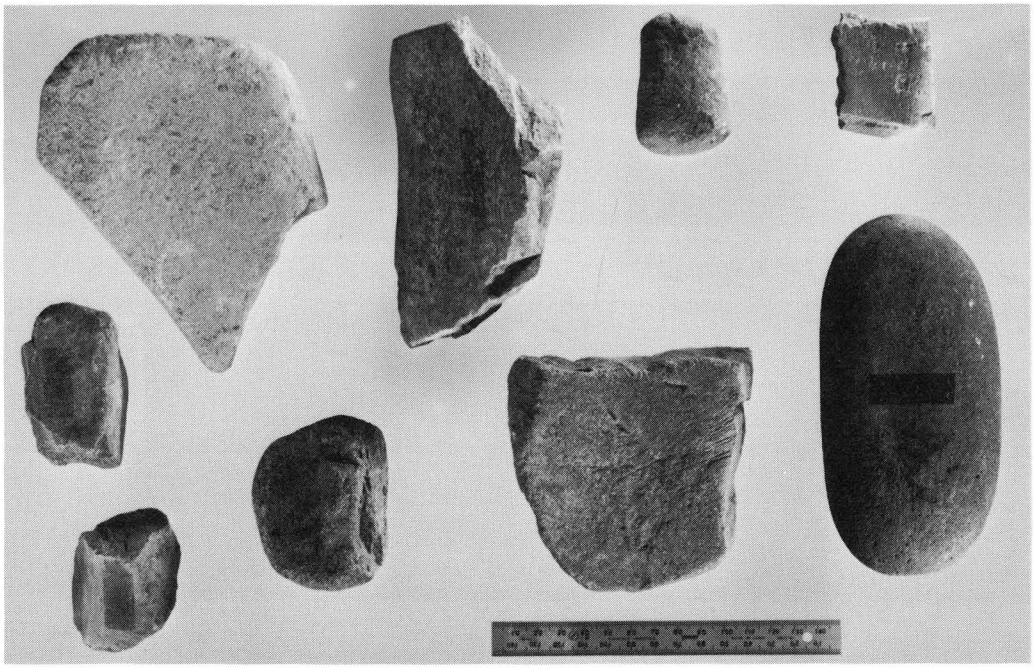
3類〔8—27・8—32・9—43〕

3類〔（Ⅵ区）・8—33・7—30〕

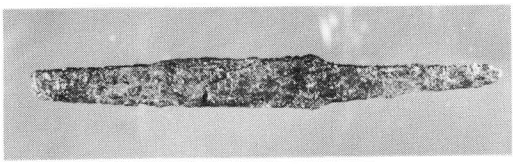
松崎貝塚出土製塩土器各類台脚



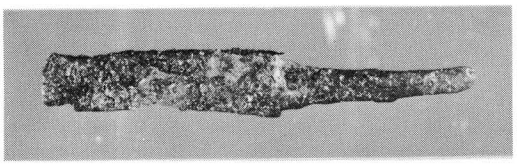




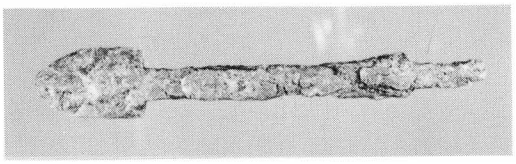
松崎貝塚出土人骨下顎骨：上面観・側面観　（下）石器



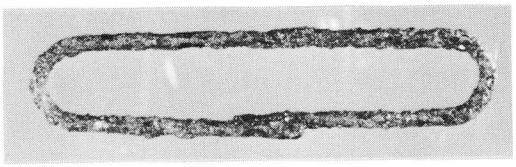
17－2



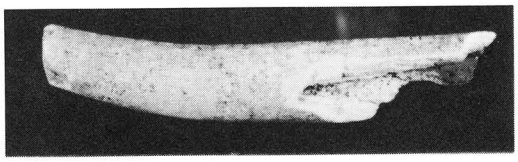
17－4



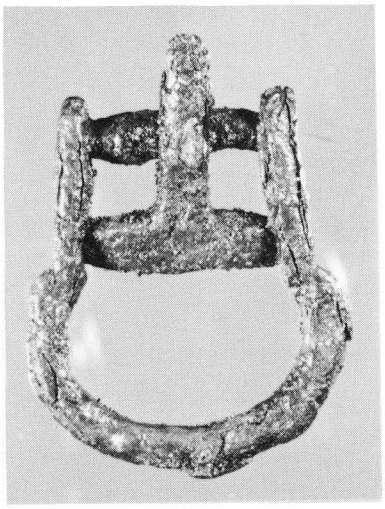
17－7



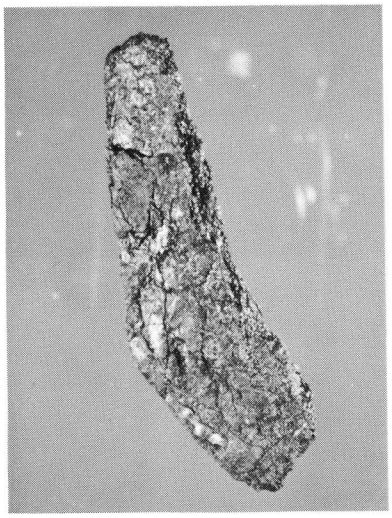
17－10



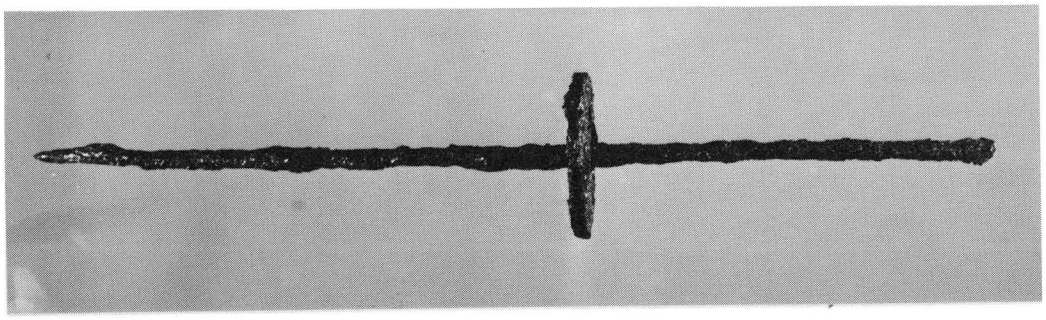
17－11



17－5

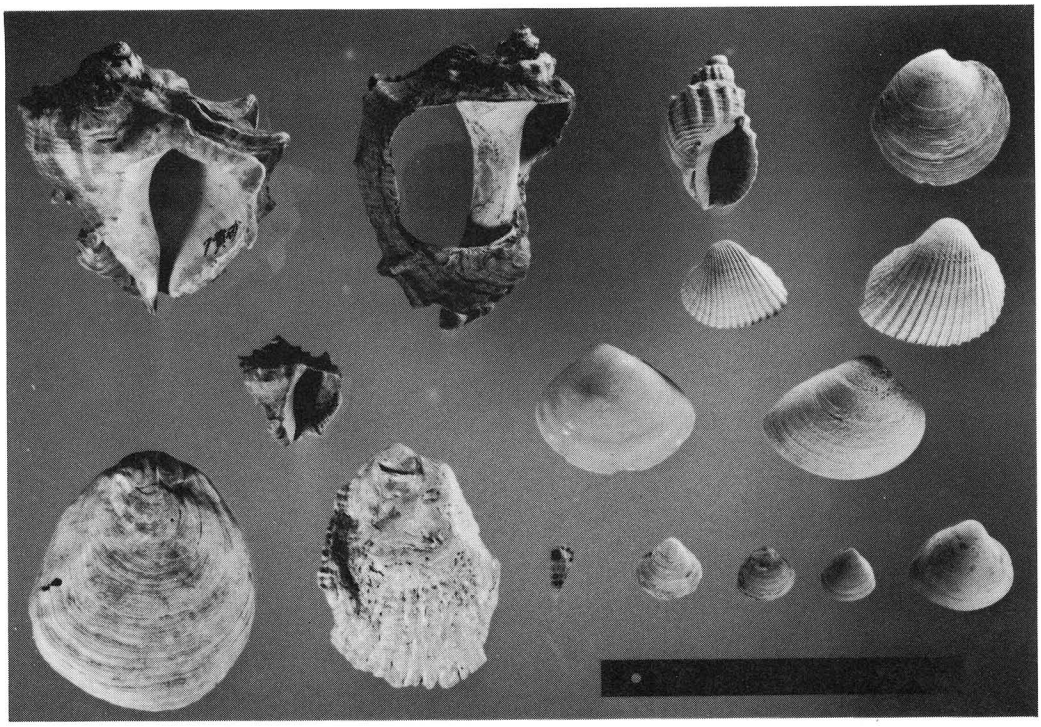


17－6

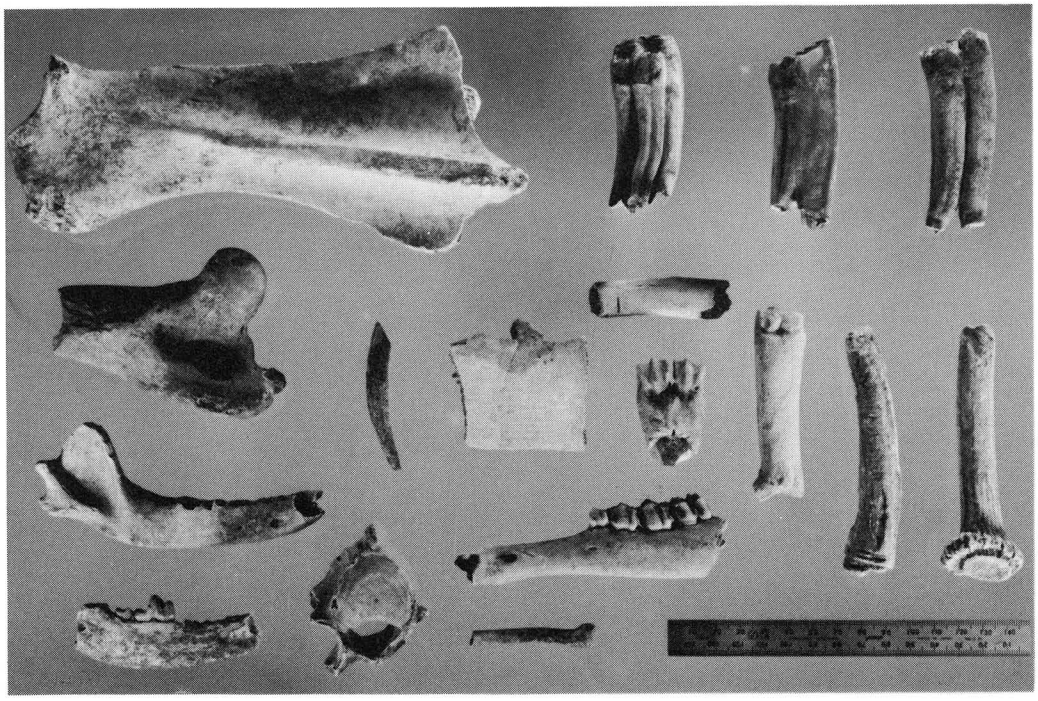


17－1

松崎貝塚出土鉄器および骨角器

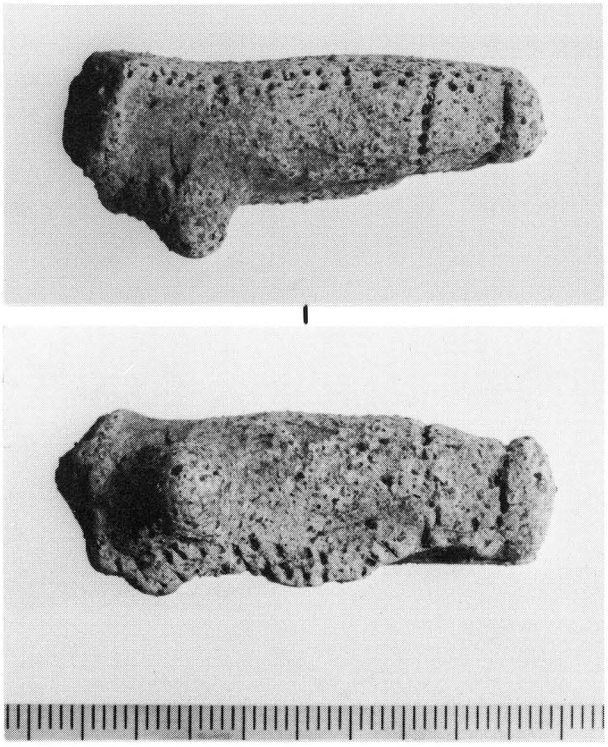


松崎貝塚出土貝類

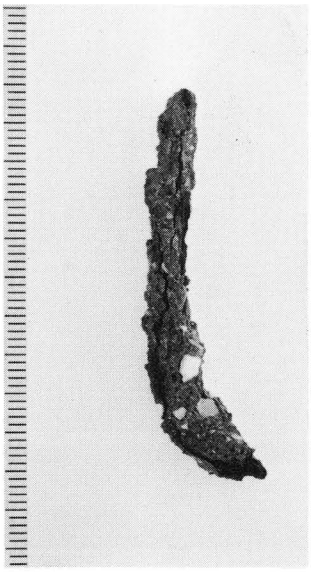


獣骨類

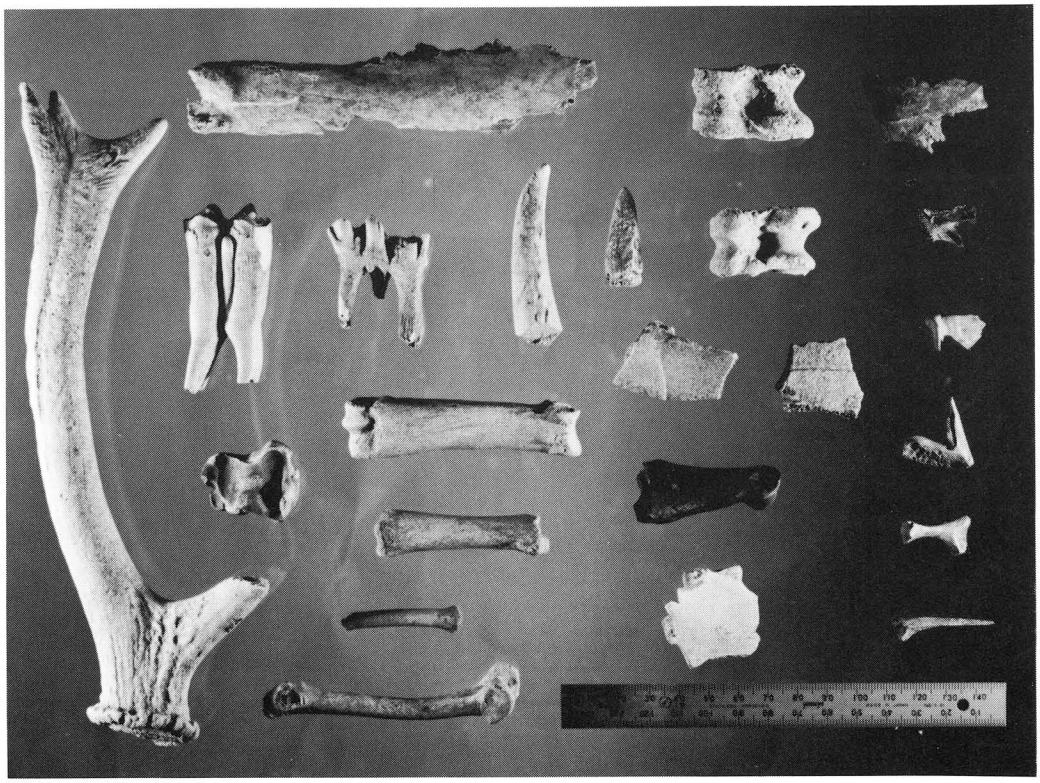
塚森遺跡出土縄文土器（挿図１２）



土偶（挿図１２－１２）

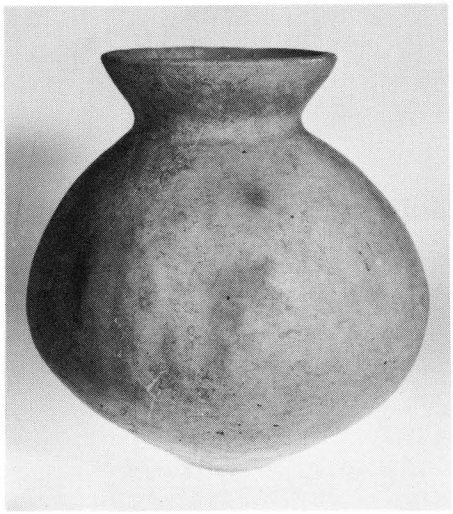


釣針（２２－４０）

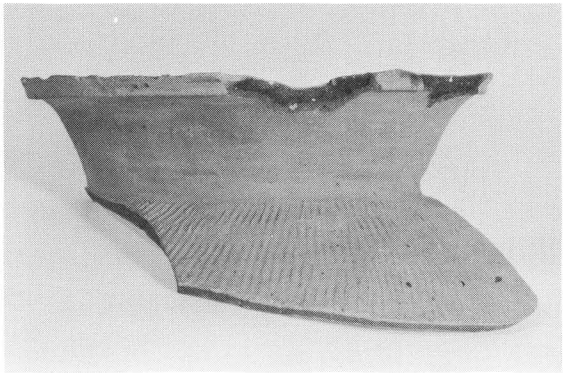


塚森遺跡出土獣骨類

塚森遺跡・壷形土器出土状態

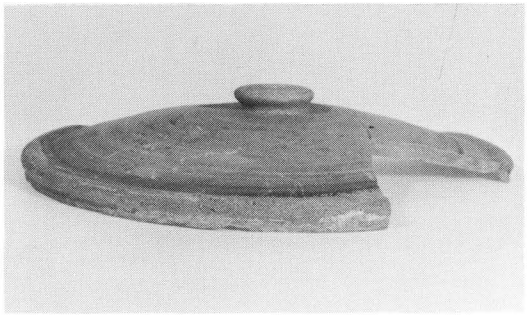


壷形土器（１９－６）



23－7

23－21

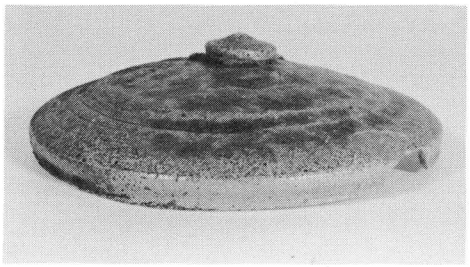


23－12

23－16

23－10

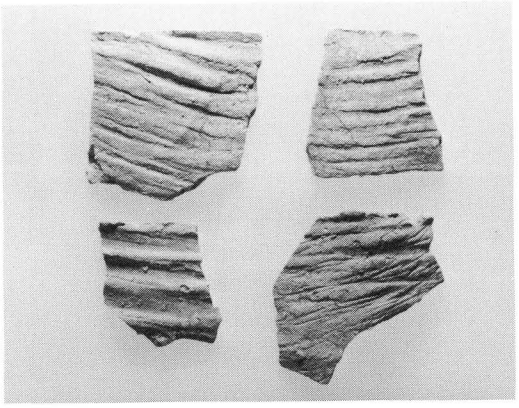
23－13

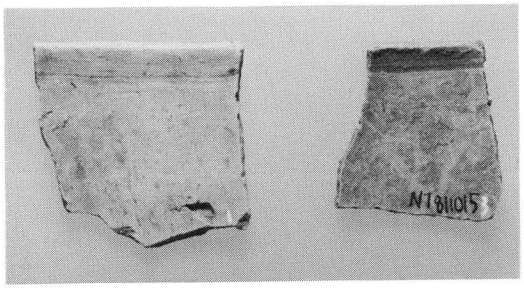


24－5

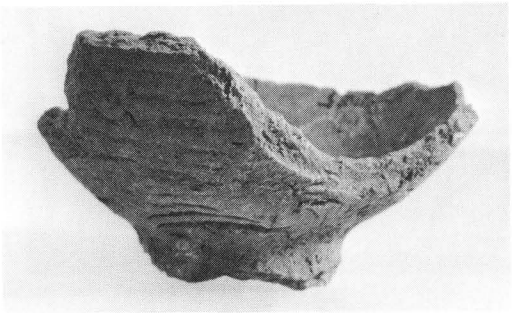
24－6

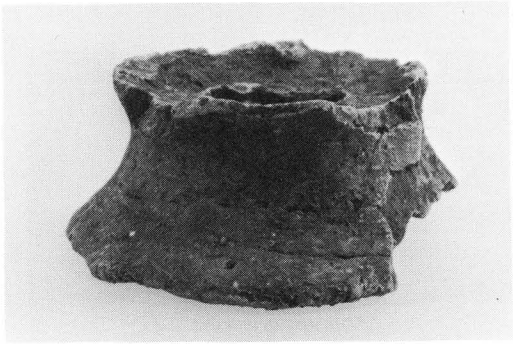
塚森遺跡出土須恵器・灰釉陶器

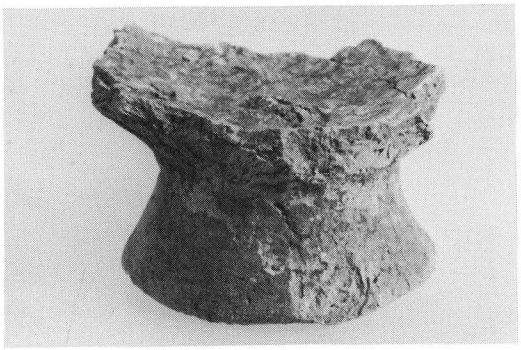


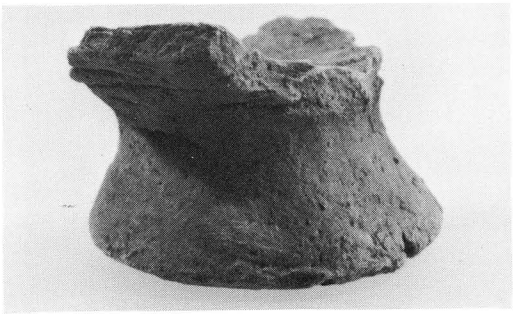


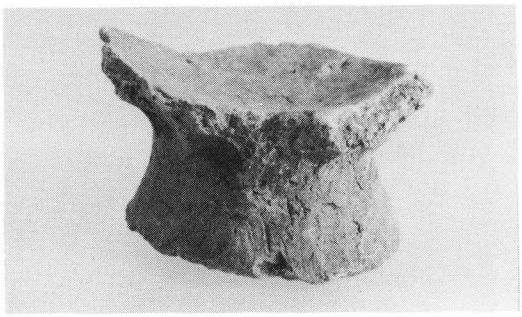
口縁部内面





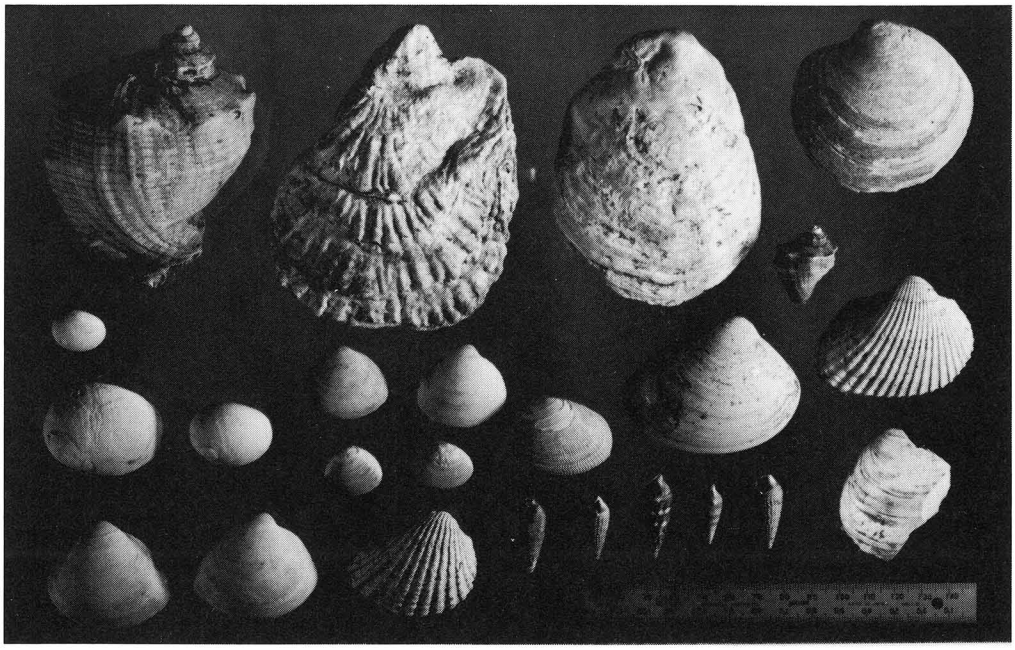






塚森遺跡出土製塩土器（塚森式）

塚森遺跡出土石器



貝　類

愛知県東海市松崎貝塚第２次発掘調査報告書
昭和59年　7月 31日 発行
編集・発行　東海市教育委員会
〒476　愛知県東海市中央町一丁目１番地
電話〈0560〉 63－2211（代）
〈0562〉 33－1111（代）
印刷　　株式会社中部マイクロセンター